平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

瀬戸山遺跡・瀬戸山古墳群

2001
埼玉県熊谷市教育委員会

平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

瀬戸山遺跡・瀬戸山古墳群

せとやまいせき　せとやまこふんぐん

2001

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷には、原始・古代から中世に至る集落や館跡など、様々な埋蔵文化財が数多く分布することが知られています。

こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

熊谷市大字平塚新田一帯は、江南台地の東端に位置し、北に荒川の望む台地上に位置します。この一帯は熊谷市内に残る貴重な丘陵地帯であるとともに、古墳時代を中心とした集落跡、古墳跡が多数分布する埋蔵文化財包蔵地でもあります。

昭和57年度、埋蔵文化財が広く分布するこの地域で、吉岡中学校校庭の拡張と吉岡配水場の建設が持ち上がりました。貴重な埋蔵文化財であることから遺跡の保護と保存について、関係各課と協議を重ねてまいりましたが、事業計画の変更が難しかったことから、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、昭和57年度に実施されたものですが、貴重な埋蔵文化財に鑑みて、今年度、発掘調査成果をまとめることができました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行にあたりまして、関係各位に格別の御理解・御協力を賜りましたこと、厚くお礼申しあげます。

平成13年3月

熊谷市教育委員会
教育長 **飯塚誠一郎**

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市大字平塚新田500番地他、及び大字平塚新田字前原537番地他に所在する瀬戸山遺跡（埼玉県遺跡番号59－31）、及び瀬戸山古墳群（埼玉県遺跡番号59－30－14～27・34）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、市立吉岡中学校校庭拡張工事、及び市立吉岡配水場建設事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は、市立吉岡中学校校庭拡張工事に伴う発掘調査が昭和57年６月２日から昭和57年６月30日まで、市立吉岡配水場建設事業に伴う発掘調査が昭和57年７月12日から昭和57年９月11日までである。

整理・報告書作成期間は、平成12年４月１日～平成13年３月30日までである。

5　発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会寺社下博・金子正之が、本書の執筆・編集は、第Ⅰ章第１節を金子が、その他を松田 哲が行った。

6　発掘調査における写真撮影は寺社下・金子が、遺物の写真撮影は松田が行った。

7　本書にかかる資料は熊谷市教育委員会が保管している。

8　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜った。記して感謝申しあげます。

（敬称略、五十音順）

青木克尚　新井　悟　牛山英昭　小林　高　竹野谷俊夫　知久裕昭　富田孝彦
中島広顕　村松　篤　大里郡市町村文化財担当者会
埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課

凡　例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1　遺構挿図縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

遺構全測図…1／400　　竪穴住居跡…1／60　　古墳平面図…1／80・160

古墳断面図…1／40・80　　溝跡平面図…1／400　　溝跡断面図…1／40

土坑・墓壙…1／40

2　遺構挿図中のトーンは次のとおりである。

＝地 山　　＝炉・焼 土　　＝炭化物

3　遺物挿図の縮尺は、次のとおりである。

土器・円筒埴輪…1／4　　石器・鉄製品・形象埴輪（破片）…1／2

形象埴輪（馬形）…1／6

4　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・埴輪断面　　白抜き

須恵器・断面　　黒塗り

赤 彩

5　挿図中の遺物はすべて観察表にその内容を記してある。計測数値中、（　）が付されるものは推定値、現存高を表す。

6　遺物拓影図は、原則として向って左側に外面を示した。内外面両方を示す場合には左側に外面、右側に内面を示した。

7　写真図版の遺物縮尺はすべて任意である。

8　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行　1994）を参考にした。

目　次

序
例 言
凡 例
目 次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……8
　1　調査の方法……8
　2　検出された遺構と遺物……8
Ⅳ　遺構と遺物 ……12
　1　古墳時代前期の遺構と遺物 ……12
　　(1)竪穴住居跡……12
　2　古墳時代後期の遺構と遺物 ……28
　　(1)古 墳 ……28
　3　その他の遺構と遺物 ……58
　　(1)溝 跡 ……58
　　(2)土 坑 ……61
　　(3)墓 壙 ……73
　　(4)ピット……74
　　(5)遺構外出土遺物……74
Ⅴ　調査のまとめ ……77

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図……3
第２図　周辺遺跡位置図……4
第３図　調査地点位置図……9
第４図　調査地点１全測図……10
第５図　調査地点２全測図……11
第６図　第１号竪穴住居跡……12
第７図　第１号竪穴住居跡出土遺物(１)……13
第８図　第１号竪穴住居跡出土遺物(２)……14
第９図　第２号竪穴住居跡・出土遺物……17
第10図　第３号竪穴住居跡……18
第11図　第３号竪穴住居跡出土遺物……19
第12図　第４号竪穴住居跡・出土遺物……20
第13図　第５号竪穴住居跡……22
第14図　第５号竪穴住居跡出土遺物……23
第15図　第６号竪穴住居跡・出土遺物……25
第16図　第７号竪穴住居跡・出土遺物……26
第17図　第８号竪穴住居跡……27
第18図　第１号墳……28
第19図　第１号墳出土遺物(１)……29
第20図　第１号墳出土遺物(２)……30
第21図　第２号墳・出土遺物……32
第22図　第３号墳・出土遺物……34
第23図　第４号墳・出土遺物……35
第24図　第５号墳……36
第25図　第６号墳……37
第26図　第７号墳・出土遺物……38
第27図　第８号墳……39
第28図　第８号墳出土遺物……40
第29図　第９号墳……42
第30図　第９号墳外周溝出土遺物(１)……43
第31図　第９号墳外周溝出土遺物(２)……44
第32図　第９号墳外周溝出土遺物(３)……45
第33図　第９号墳内周溝出土遺物……46
第34図　第10号墳……50
第35図　第10号墳外周溝出土遺物……51
第36図　第10号墳内周溝出土遺物……51
第37図　第11号墳……53
第38図　第11号墳出土遺物……54
第39図　第12号墳・出土遺物……56
第40図　第13号墳・出土遺物……57
第41図　第１～９号溝跡……60
第42図　溝跡断面図……61
第43図　第１～７号土坑……63
第44図　第８～15号土坑……65
第45図　第16～23号土坑……67
第46図　第24～31号土坑……69
第47図　土坑出土遺物(１)……71
第48図　土坑出土遺物(２)……72
第49図　第１号墓壙……74
第50図　遺構外出土遺物……75

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……5
第２表　周辺古墳一覧表……6
第３表　第１号竪穴住居跡出土遺物観察表……15
第４表　第１号竪穴住居跡出土鉄製品観察表…16
第５表　第２号竪穴住居跡出土遺物観察表……18
第６表　第３号竪穴住居跡出土遺物観察表……19
第７表　第４号竪穴住居跡出土遺物観察表…21
第８表　第５号竪穴住居跡出土遺物観察表…24
第９表　第６号竪穴住居跡出土遺物観察表…26
第10表　第７号竪穴住居跡出土遺物観察表…27
第11表　第１号墳出土遺物観察表……31
第12表　第１号墳出土形象埴輪観察表……31

第13表　第２号墳出土遺物観察表……33
第14表　第３号墳出土遺物観察表……34
第15表　第４号墳出土遺物観察表……35
第16表　第７号墳出土遺物観察表……39
第17表　第８号墳出土遺物観察表……40
第18表　第９号墳外周溝出土遺物観察表……46
第19表　第９号墳内周溝出土遺物観察表……48
第20表　第10号墳外周溝出土遺物観察表……52
第21表　第10号墳内周溝出土遺物観察表……52
第22表　第11号墳出土遺物観察表……55
第23表　第12号墳出土遺物観察表……56
第24表　第13号墳出土遺物観察表……57
第25表　土坑出土遺物観察表……73
第26表　遺構外出土遺物観察表……76
第27表　遺構外出土土製品・鉄製品・石器観察表…76

図版目次

図版１　調査地点１全景
調査地点１作業風景
図版２　調査地点２周辺風景
調査地点２全景
図版３　第１号竪穴住居跡
第１号竪穴住居跡遺物出土状況(１)
第１号竪穴住居跡遺物出土状況(２)
図版４　第２号竪穴住居跡
第３号竪穴住居跡
図版５　第４号竪穴住居跡
第５号竪穴住居跡
図版６　第５号竪穴住居跡遺物出土状況
第６号竪穴住居跡
図版７　第７号竪穴住居跡
第８号竪穴住居跡
図版８　第１号墳
第２号墳
図版９　第２号墳遺物出土状況(１)
第２号墳遺物出土状況(２)
第３号墳
図版10　第４号墳・第２～４号溝跡
第５号墳・第５号溝跡
図版11　第６号墳・第２～５号溝跡
第７号墳
図版12　第８号墳
第９号墳
図版13　第10号墳
第10号墳西側周溝
第10号墳東側周溝
図版14　第10号墳外周溝遺物出土状況(１)
第10号墳外周溝遺物出土状況(２)
第11号墳
図版15　第12号墳
第１号溝跡
第１号土坑
図版16　第９号土坑遺物出土状況(１)
第９号土坑遺物出土状況(２)
図版17　第１号墓壙(東から)
第１号墓壙(西から)
第１号墓壙本体(東から)
図版18　第13号墳
第13号墳遺物出土状況
図版19　第１号竪穴住居跡１・３～５・７・11～13
図版20　第１号竪穴住居跡17～19・21～25
図版21　第２号竪穴住居跡１・２
第３号竪穴住居跡２・４・９
第５号竪穴住居跡１～３
図版22　第５号竪穴住居跡４～９
第６号竪穴住居跡１・２
図版23　第１号墳１
第２号墳１・２

図版24　第３号墳１
第４号墳１
第７号墳１
第９号墳外周溝１・２
図版25　第９号墳外周溝６・24
第10号墳外周溝１～４
第13号墳１
図版26　第１号竪穴住居跡29～33　表
第５号竪穴住居跡10～22　表
第１号墳３～12　表
図版27　第１号竪穴住居跡29～33　裏
第５号竪穴住居跡10～22　裏
第１号墳３～12　裏
図版28　第８号墳１～５　表
第９号墳外周溝９　表
第９号墳外周溝10　表
図版29　第８号墳１～５　裏
第９号墳外周溝９　裏
第９号墳外周溝10　裏
図版30　第９号墳外周溝11・12　表
第９号墳外周溝13～15　表
第９号墳外周溝16～23　表
図版31　第９号墳外周溝11・12　裏
第９号墳外周溝13～15　裏
第９号墳外周溝16～23　裏
図版32　第９号墳外周溝25　表
第９号墳外周溝26　表
第９号墳外周溝27～29　表
図版33　第９号墳外周溝25　裏
第９号墳外周溝26　裏
第９号墳外周溝27～29　裏
図版34　第９号墳外周溝30～34　表
第９号墳外周溝35～45　表
第９号墳外周溝46～52　表
図版35　第９号墳外周溝30～34　裏
第９号墳外周溝35～45　裏
図版35　第９号墳外周溝46～52　裏
図版36　第９号墳外周溝53～57　表
第９号墳内周溝２～８　表
第10号墳外周溝16～18　表
内周溝４・５　表
図版37　第９号墳外周溝53～57　裏
第９号墳内周溝２～８　裏
第10号墳外周溝16～18　裏
内周溝４・５　裏
図版38　第11号墳３～９　表
第11号墳10～17　表
第１号土坑１　表
第９号土坑３～８　表
図版39　第11号墳３～９　裏
第11号墳10～17　裏
第１号土坑１　裏
第９号土坑３～８　裏
図版40　第９号土坑２　表
第９号土坑９～13　表
第９号土坑14・15　表
図版41　第９号土坑２　裏
第９号土坑９～13　裏
第９号土坑14・15　裏
図版42　第９号土坑16・17　表
第22号土坑18　表
第28号土坑19　表
遺構外３～10　表
図版43　第９号土坑16・17　裏
第22号土坑18　裏
第28号土坑19　裏
遺構外３～10　裏
図版44　第１号墳13～17
第１号墳18（上から）
第１号墳18（横から）
図版45　遺構外出土遺物11・12・14・15

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

（1）吉岡中学校校庭拡張事業について

昭和57年度事業として、吉岡中学校校庭拡張が予算化された。当該地には、台地上に位置し、古墳跡、集落跡等の遺跡が色濃く分布することが知られており、保存に向けて協議を行ったが、事業の変更が困難なため記録保存の発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第57条の３の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、熊谷市長より昭和57年4月30日付け57熊業発第654号で提出された。そして、文化財保護法第98条の規定に基づく埋蔵文化財の発掘調査届を、市教育長から昭和57年4月30日付け57熊教社発第655号で発掘調査通知を提出し、昭和57年12月2日付け57委保記第-3059号で文化庁より発掘調査の受理通知があった。

発掘調査は昭和57年６月2日から実施した。

（2）吉岡配水場建設事業について

昭和57年5月21日付け57熊業発第77号で、熊谷市長から埋蔵文化財発掘調査にかかわる協議が、熊谷市教育委員会教育長あてに提出された。開発地域一帯は台地上に位置し、古墳跡、集落跡等の遺跡が色濃く分布することが知られており、保存に向けて協議を重ねた。しかし、事業の変更が困難なため記録保存の発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第57条の３の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、熊谷市長より昭和57年4月30日付け57熊業発第250号で提出された。そして、文化財保護法第98条の規定に基づく埋蔵文化財の発掘調査届を、市教育長から昭和57年4月30日付け57熊教社発第656号で発掘調査通知を提出し、昭和57年12月2日付け57委保記第-3060号で文化庁より発掘調査の受理通知があった。

発掘調査は昭和57年７月12日から実施した。

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

ア　吉岡中学校校庭拡張事業地

瀬戸山遺跡の吉岡中学校拡張部分の発掘調査は、昭和57年6月２日から昭和57年６月30日にかけて行われた。調査面積は校庭拡張面積である2,000㎡について行った。

昭和57年６月2日に遺構確認面まで重機で表土剥ぎを行い、6月６日から遺構精査作業を行った。付近は古墳や方形周溝墓等が集中する箇所であり、遺構精査の結果、円墳が確認された。主体部は確認できなかったため、周溝の調査を中心に調査を行った。遺物は極めて少なく、椀形土器が確認されたのみで、調査は昭和57年6月30日に終了した。

イ　吉岡配水場建設事業地

瀬戸山遺跡の吉岡配水場建設予定地は、吉岡中学校校庭拡張事業地の近くに位置し、吉岡中学校校庭

拡張事業に伴う発掘調査終了後、引き続き発掘調査を開始した。調査面積は配水場建設予定地3,000㎡について行った。

昭和57年7月12日に遺構確認面まで重機で表土剥ぎを行い、並行して遺構精査作業に入った。吉岡中学校校庭拡張箇所に比して、遺構の密度は高く、古墳跡、竪穴住居跡、溝跡、墓跡等が多数検出された。

調査は、昭和57年9月11日に終了した。

（2） 整理・報告書作成作業

両事業は同一遺跡であることから一括して整理・報告書作成作業を行った。整理作業は、平成12年4月10日から始めた。遺物の洗浄・注記・復元を行い、それと同時に遺構の図面整理作業を行った。12月まで順次、遺物の実測・拓本取り・写真撮影を行い、遺構の最終的な図面整理を行った。11月から遺構・遺物図面のトレース、遺構図・遺物図版組を行った。１月から原稿執筆、割付け等の作業、報告書の印刷、校正を行った後、3月末日に本報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　　熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査（昭和57年度）

教育長	関根幸夫
教育次長	新井　勝
社会教育課長	並木良輔
課長補佐	里見昌夫
係長	岡田伸洋
主査	山川　建
主事	寺社下　博
主事	金子正之
主事	島野嘉寿子

(2) 整理・報告書刊行（平成12年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	野辺良雄
社会教育課長	浜島義雄
副参事	浅野晴樹
課長補佐	北　俊明
主幹兼係長	金子正之
主任	寺社下　博
主任	浅見敦夫
主任	吉野　健
主事	松田　哲
発掘調査員	小林貴郎
発掘調査員	越前谷　理
発掘調査員	小野寺弘光

Ⅱ　遺跡の立地と環境

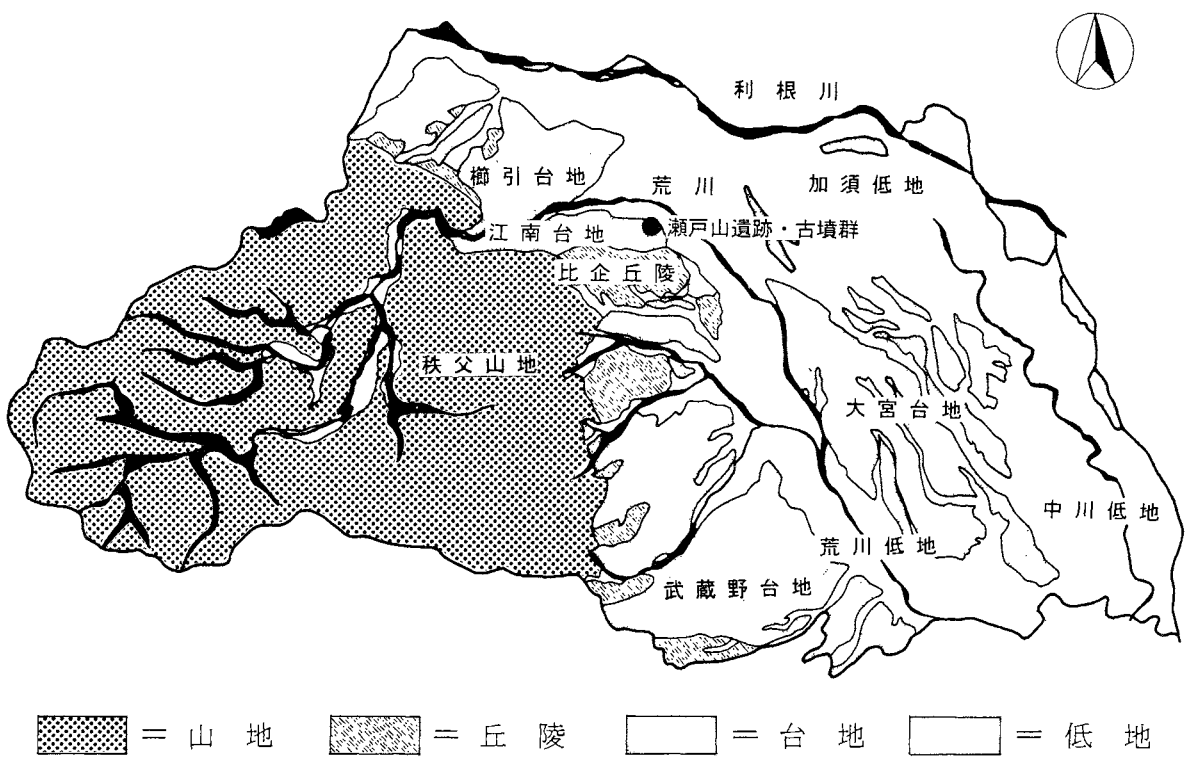
熊谷市は埼玉県北部に位置する中核都市である。市の北側には妻沼町を挟んで利根川が、市の南側には荒川がそれぞれ西から南東方向へ流れており、市の大半が川に挟まれた妻沼低地上にある。

熊谷市の地形は、市内西側の荒川左岸には櫛引台地、そして台地下の東側には妻沼低地が広がっている。一方、市の南側、荒川右岸には江南台地が荒川に沿って東西方向に延びている。今回報告する瀬戸山遺跡、及び古墳群は江南台地上にあり、熊谷市内でも南端に所在する(第１図)。

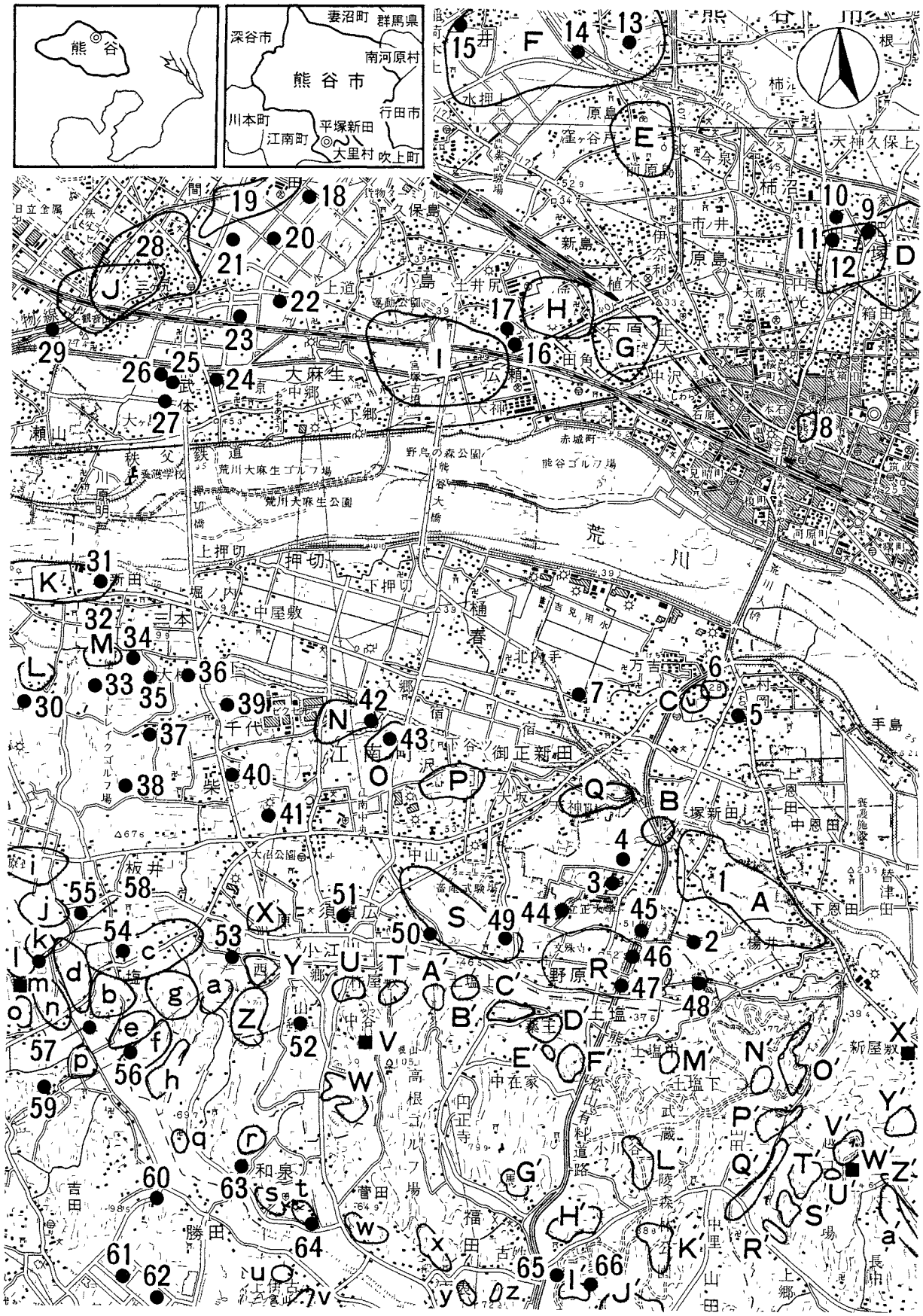
江南台地は、寄居町金尾付近から大里村箕輪付近まで延びた幅狭な洪積台地である。台地は表層部に腐植土を乗せ、下層にはローム層が堆積している。ローム層は上部が大里ローム層、下部が新期ローム層に対比され、大里ローム層は南関東・立川ローム層に対比される。そして、ローム層下には川本粘土層がみられ、その下には基盤となる砂礫層が発達している。

台地は海抜100～40m程で西から東へと緩やかに下っていき、やがて荒川、及び沖積地に面する。台地東部での荒川、及び沖積地との比高差は10～15m程である。台地内には開析谷や埋没谷が発達しており、これらに面した場所には多数の遺跡、及び古墳群が確認されている。また、江南台地南を東流する和田川以南には外秩父山地から東へ延びた比企丘陵が広がっており、江南台地同様、開析谷や埋没谷が発達し、多数の遺跡、及び古墳群がみられる。

瀬戸山遺跡・古墳群は、熊谷市大字平塚新田、及び大字楊井に所在し、江南台地でも東端の標高24～47mの台地上に立地している。本遺跡、及び古墳群の確認範囲は北西方向から南東方向まで約1.7kmと非常に細長く、今回報告する調査地点は遺跡範囲内でも北西部にあたる。遺跡範囲南東部にある古墳群は古墳



第１図　埼玉県の地形図


熊谷
深谷市
妻沼町
群馬県
南河原村
熊谷市
川本町
江南町
平塚新田
大里村
行田市
吹上町
荒川
荒川大麻生公園
荒川大麻生ゴルフ場
熊谷ゴルフ場
野鳥の森公園
大麻生
中郷
下郷
広瀬
小島
久保島
原島
新島
柿沼
上押切
押切
下押切
中屋敷
千代
江南
御正新田
塚新田
中恩田
下恩田
板井
須賀広
小江
野原
和泉
勝田
吉田
菅田
福田
高根ゴルフ場
中在家
新屋敷
長中
手島
春

第２図　周辺遺跡位置図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			34	富士山遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前、奈良
1	瀬戸山遺跡	縄文中、古墳前～後、奈良・平安、江戸	35	北方遺跡	縄文早
2	No.３２遺跡	古墳	36	権現坂遺跡	縄文前・中、古墳中・後(埴輪窯跡群)
3	立正大学熊谷校地内	中・近世	37	天神谷遺跡	古墳前、奈良・平安(窯跡)
4	下原遺跡	縄文	38	寺内廃寺	奈良・平安
5	下北原遺跡	奈良・平安	39	宮下遺跡	古墳後、奈良・平安
6	村岡館跡	平安末～中世	40	久保遺跡	弥生後
7	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世	41	原谷遺跡	縄文早、古墳前
8	熊谷氏館跡	鎌倉	42	上前原遺跡	縄文前
9	出口下遺跡	古墳後	43	行人塚遺跡	弥生後、古墳前
10	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	44	鹿嶋遺跡	旧石器、縄文早、弥生？、奈良・平安
11	出口上遺跡	奈良・平安、中世	45	下新田遺跡	奈良・平安
12	肥塚館	中世	46	荒神脇遺跡	旧石器、縄文早、奈良・平安
13	本代遺跡	古墳後、近世	47	熊野遺跡	奈良・平安
14	下河原上遺跡	近世末	48	丸山遺跡	古墳前・後
15	稲荷木上遺跡	古墳後	49	宮脇遺跡	旧石器、縄文早、古墳後
16	不二ノ腰遺跡	奈良・平安	50	本田東台遺跡	旧石器、縄文早、古墳後
17	高値遺跡	縄文前、古墳後、平安、中・近世	51	須広宮脇遺跡	古墳後
18	東遺跡	平安、中世	52	釜場遺跡	古墳前
19	樋ノ上遺跡	縄文前・中、古墳後、奈良・平安、中・近世	53	船川遺跡	縄文草創・早、古墳前
20	黒沢館跡	中世	54	塩西遺跡	旧石器、古墳前・後
21	若松遺跡	中・近世	55	岩比田遺跡	旧石器、縄文早、古墳後、奈良・平安、中世
22	庚申塚遺跡	近世	56	塩前遺跡	縄文早、古墳前
23	松原遺跡	中・近世	57	塩新田遺跡	弥生後、古墳中
24	臺遺跡	近世	嵐山町		
25	社裏遺跡	中世	58	北田遺跡	縄文早・晩、古墳前
26	社裏北遺跡	中世	59	西ノ谷遺跡	古墳後
27	社裏南遺跡	中世	60	泉蔵院遺跡	古墳中
28	三ヶ尻遺跡	縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	61	芳沼入遺跡	弥生後
29	No.２３遺跡	古墳後	62	大野田西遺跡	縄文早～中、弥生後、奈良・平安
川本町			滑川町		
30	諦光寺跡	奈良・平安	63	三門館跡	中世
江南町			64	舟川遺跡	弥生後、古墳前
31	新田裏遺跡	古墳後	65	栗谷遺跡	縄文早、弥生後、古墳後
32	蛯ヶ沢遺跡	縄文早～後、弥生後古墳前・後(埴輪窯跡群)	66	栗谷東遺跡	縄文早
33	西原遺跡	旧石器、縄文前～後、奈良・平安			

時代後期の群集墳であり、現在までに前方後円墳１基、円墳20基の計21基が確認されている。古墳群中には過去発掘調査が実施されたものもあり、多数の副葬品が検出されている（熊谷市　1963）（貞末　1973）（熊谷市教委　1977）。詳細については第Ⅴ章において述べることとする。

次に本遺跡周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代は、近年、江南台地上で検出例が増加している。江南町鹿嶋遺跡（44）、塩西遺跡（54）、本田東台遺跡（50）、荒神脇遺跡（46）では礫群やナイフ型石器が、川本町白草遺跡では細石器のブロックや荒屋型彫器が検出されている。石器はソフトローム層中からの検出例が多いが、塩西遺跡ではハードローム層中からの検出例があり、最古段階と考えられる。

第２表　周辺古墳一覧表

熊谷市			a	新山古墳群	古墳後	B′	山中古墳群	古墳後
A	瀬戸山古墳群	古墳後	b	塩・第１支群	古墳前・後	C′	蟹沢古墳群	古墳後
B	万吉下原古墳群	古墳前・後	c	塩・第２支群	古墳前・後	D′	天神山横穴墓群	古墳後
C	村岡古墳群	古墳後	d	塩・第３支群	古墳後	E′	天神前古墳群	古墳後
D	肥塚古墳群	古墳後	e	塩・第４支群	古墳前	F′	馬場古墳群	古墳後
E	原島古墳群	古墳後	f	塩・第５支群	古墳後	G′	鼻田沼古墳群	古墳後
F	玉井古墳群	古墳後	g	塩・第６支群	古墳前	H′	矢崎古墳群	古墳後
G	石原古墳群	古墳後	h	塩・第７支群	古墳後	I′	栗谷古墳群	古墳後
H	坪井古墳群	古墳後	i	桜山古墳群	古墳後	J′	中山古墳群	古墳後
I	広瀬古墳群	古墳後	j	立野古墳群	古墳後	K′	後谷古墳群	古墳後
J	三ヶ尻古墳群	古墳後	嵐山町			L′	ゴエモン塚古墳群	古墳後
川本町			k	古里・北田支群	古墳後	M′	山の上古墳群	古墳後
K	鹿島古墳群	古墳後	l	古里・上土橋支群	古墳後	N′	菖蒲沼古墳群	古墳後
L	清水山古墳群	古墳後	m	岩根沢横穴墓群	古墳後	O′	追山古墳群	古墳後
江南町			n	古里・駒込支群	古墳後	P′	棘山古墳群	古墳後
M	姥ヶ沢古墳群	古墳後	o	古里・尾根支群	古墳後	東松山市		
N	上前原古墳群	古墳後	p	陣屋古墳群	古墳後	Q′	市の坪古墳群	古墳後
O	行人塚古墳群	古墳後	滑川町			R′	比丘尼山横穴墓群	古墳後
P	瀞簡院古墳群	古墳後	q	西浦古墳群	古墳後	S′	三千塚・第Ⅰ支群	古墳後
Q	天神山古墳群	古墳後	r	松原古墳群	古墳後	T′	三千塚・第Ⅶ支群	古墳後
R	野原東古墳群	古墳後	s	峯(畠中)古墳群	古墳後	U′	三千塚・第Ⅵ支群	古墳後
S	野原古墳群	古墳後	t	山崎古墳群	古墳後	V′	三千塚・第Ⅴ支群	古墳後
T	石橋山古墳群	古墳後	u	巌山古墳群	古墳後	W′	秋葉塚古墳	古墳後
U	漆畑古墳群	古墳後	v	麓古墳群	古墳後	X′	新屋敷１号墳	古墳後
V	高根横穴墓群	古墳後	w	柴山古墳群	古墳後	Y′	三千塚・第Ⅳ支群	古墳後
W	日向古墳群	古墳後	x	両表古墳群	古墳後	Z′	三千塚・第Ⅲ支群	古墳後
X	上原古墳群	古墳後	y	小姓前古墳群	古墳後	a′	三千塚・第Ⅱ支群	古墳後
Y	西古墳群	古墳後	z	三軒新田古墳群	古墳後			
Z	釜場古墳群	古墳後	A′	円正寺古墳群	古墳後			

縄文時代については草創期段階からみられる。現在確認されている遺跡は江南町船川遺跡(53)のみで、開析谷に面した台地上に立地している。尖頭器等石器の検出例が多く、土器はあまりみられない。

早期になると遺跡数が増加し、特に江南台地上においてみられる。これらの遺跡からは、撚糸文・沈線文・押型文土器が伴出しており、継続的に集落が営まれていたことが考えられる。江南町鹿嶋遺跡(44)、宮脇遺跡(49)では早期撚糸文段階の竪穴住居跡が検出されている。

前期は江南台地西部では寄居町南大塚遺跡をはじめ多数の集落跡が出現するが、台地東部では検出例が少なく、和田川、及び吉野川流域に点在するのみである。台地西部の集落跡も前期前半にピークを迎えるが、徐々に減少していき、末頃には台地東部の江南町上前原遺跡(42)のみとなる。

中期は初頭段階こそ検出例は少ないが、前半・勝坂式期になると次第に増加しはじめ、後半の加曽利Ｅ式期には爆発的に多くなる。そして、100軒以上もの住居跡からなる大規模集落が出現してくる。本遺跡周辺では主に吉野川沿いに遺跡がみられ、川本町上本田遺跡からは環状に配された住居跡が62軒検出されており、大規模集落の１つといえる。本遺跡周辺ではこうした拠点的集落の周りに小・中規模の集落跡が存在する状況がみてとれる。

後期は台地上のみならず低地上にも進出し始めるが、中期に比べて遺跡数が減少する。本遺跡周辺で

は、江南町蛯ヶ沢遺跡(32)において住居跡が検出されている以外にはみられない。

晩期は後期に比べてさらに減少する。遺跡は後期から続く傾向が伺え、低地上での動向が目立つ。ただ、江南町では晩期でも終末の浮線文土器が採集されており、同期の遺跡が存在することは間違いない。

弥生時代は初期段階では低地上での動きが目立ち、本遺跡周辺では後期に入ってからみられるようになる。集落は数軒単位の小規模なものが主となるが、川本町白草遺跡では22軒と比較的多く検出されている。土器は縄文系の吉ヶ谷式土器を主体として櫛描文系の岩鼻・樽式土器を含む。また、大里村円山遺跡では南関東地方の久ヶ原式土器を伴う方形周溝墓が検出されており注目される。

古墳時代前期は比企丘陵に隣接する松山台地では大幅な遺跡の増加がみられるが、本遺跡周辺ではさほどみられない。江南台地上ではほぼ等間隔に点在し、比企丘陵上では特に江南町塩地区に集中している。特筆すべき事例としては、江南台地上では本遺跡の北西に位置する万吉下原古墳群(B)において盛土を有する方形周溝墓が3基検出されていることや、江南町行人塚遺跡(42)では鉄器生産跡が検出されていること等が挙げられる。また、比企丘陵上に立地する塩古墳群・第Ⅰ支群(b)では盛土をもつ方形周溝墓20基と前方後方形周溝墓2基が検出されており、主体部をもつ方形周溝墓から鉄剣やガラス玉等が出土している。

中期は他地域同様、検出例が非常に少ない。集落跡は江南町富士山遺跡(34)、塩西遺跡(54)、塩新田遺跡(57)等があるが、このうち塩新田遺跡では初期段階の竈を持った住居跡が検出されており、次代へのつながりがみてとれる。また、大里村船木遺跡では石製模造品の生産跡が見つかっており、当時の祭祀形態を検証する上で貴重な事例である。古墳は比企丘陵上に立地する東松山市三千塚古墳群中の雷電山古墳がみられるのみである。全長86mの帆立貝式前方後円墳で、県内最古の埴輪が検出されている。

後期になると遺跡数は爆発的な増加をみせ始める。特に荒川以北の妻沼低地自然堤防上においては多数の遺跡が検出されているが、本遺跡周辺では江南町本田東台遺跡(50)において大規模な集落跡が検出されている以外に目立った動きはみられない。ただし、古墳は群集墳として多数存在し、台地・丘陵上の開析谷に面する場所には無数の古墳群が所在している。同期の古墳群は主に小規模な前方後円墳と円墳群で構成されており、これは瀬戸山古墳群にも当てはまる。この他には生産遺跡として、江南町蛯ヶ沢(32)・権現坂埴輪窯跡(36)等があり、多数の窯跡や工房跡、粘土採掘坑、還元焔焼成の円筒埴輪が出土しており、広域な供給圏を有していたと思われる。

律令体制の始まる奈良・平安時代は、本遺跡周辺は武蔵国男衾郡に属すると想定される。遺跡は古墳時代後期以降引き続き営まれるものが多く、規模も大きくなる。本遺跡周辺でも、江南町荒神脇遺跡(46)や岩比田遺跡(55)等において数十軒にも及ぶ住居跡が検出されている。また、近年、川本町百済木遺跡からは大型の掘立柱建物跡や一辺10m以上の大型住居跡を有する集落跡が検出されており、有力者層の居宅と考えられている。寺院関連では基壇建物や宗教関連遺物、「花寺」の墨書土器等が検出された江南町寺内廃寺(38)や、金銅仏の出土が伝えられる川本町諦光寺跡(30)等がある。また、寺内廃寺の南には式内社・出雲乃伊波井神社がある。

中世の遺跡は本遺跡北に村岡館跡(6)がみられる以外に、江南町、川本町、滑川町等周辺には館跡をはじめ、多数の遺跡がみられる。また、江南町野原古墳群(S)では古墳時代後期の古墳から鋳造製の阿弥陀仏が出土した例があり、経塚として利用された様子が伺える。

Ⅲ　遺跡の概要

1　調査の方法

発掘調査は、調査地点１・２ともまず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行っていった。遺構検出数の多い調査地点２は、一辺４ｍのグリッド方式を用いて調査区全体を網羅できる様に、南西隅をＡ－１として北へ１・２・３…、東へＡ・Ｂ・Ｃ…とし、Ａラインは南から北へＡ－１・Ａ－２・Ａ－３…と呼称した。Ｂライン以東も同様に呼称し、グリッド設定を行った。

手掘り作業終了後は、各遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行っていった。なお、実測作業を行うにあたっては、グリッド交点に設定した杭を基準に水糸による１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

2　検出された遺構と遺物

検出された遺構は、調査地点１からは古墳時代後期の古墳１基、調査地点２からは古墳時代前期の竪穴住居跡８軒、古墳時代後期の古墳12基、古墳時代後期以降の溝跡９条、土坑32基、ピット９基、江戸時代の墓壙１基等である。遺構のほとんどが調査地点２からの検出である。

竪穴住居跡はすべて古墳時代前期の所謂五領式期でも末期段階のものである。これらのほとんどが確認面から浅く、平面プランは正方形である。大半が他の遺構と重複しており、状態の良いものはほとんどみられないが、第１・６号住居跡の貯蔵穴、及びその周辺からは良好な一括資料が得られた。

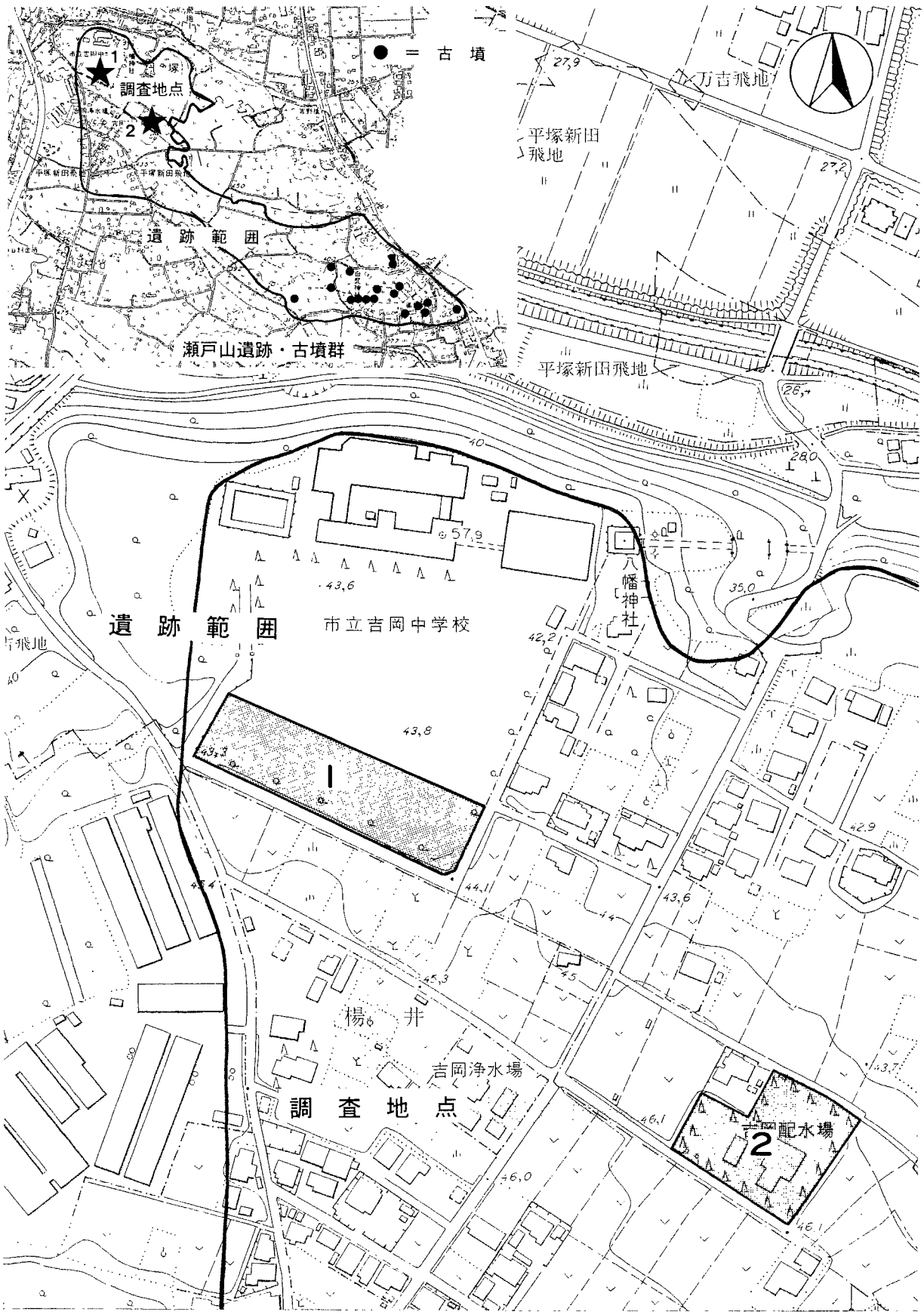
古墳は調査地点１では全形を検出できたが、調査地点２では調査区域の都合から全形を確認したものは少ない。また、住居跡同様、他の遺構と重複しているものが多い。古墳は円墳を主とし、墳丘はみな削平された状態であり、検出したのは周溝のみである。このうち、調査地点２の北端に位置する第９・10号墳は二重に周溝が巡っており、外側の周溝（以下「外周溝」）は幅広で緩やかに掘り込まれているのに対し、内側の周溝（以下「内周溝」）は幅が狭く、逆台形状を呈している。両周溝の同時性については判別できていないが、同心円状に巡っていることから１つの古墳と判断した。古墳出土遺物は土器、埴輪を主体とするが、ほとんどが破片である。また、遺物数は各古墳によりに違いがみられた。埴輪は朝顔形のものを含めて円筒埴輪が主体となるが、第１号墳からは唯一、形象埴輪が検出されている。

溝跡は時代・時期不明であるが、住居跡や古墳を切って構築されていることから、古墳時代後期以降のものである。遺物は周辺から流れ込んだ土器・埴輪があるが、図示可能な遺物はみられなかった。

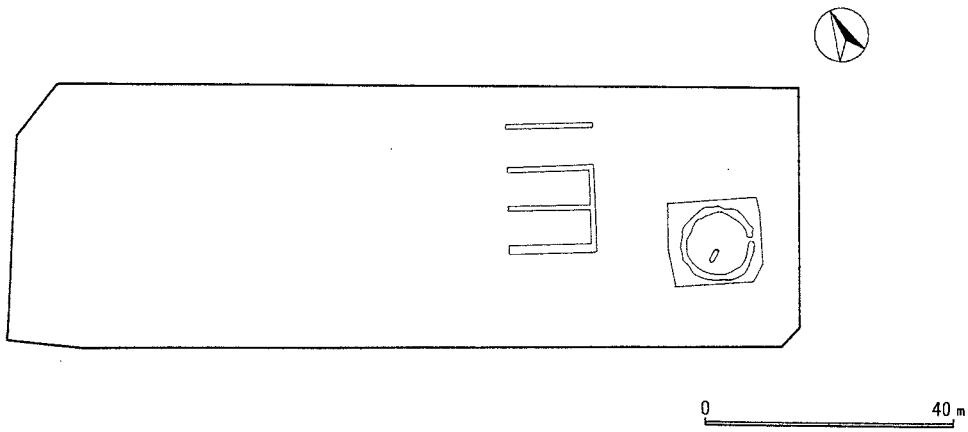
土坑は溝跡同様、遺物の僅少さから時代・時期の判別が困難である。このうち、第２号墳の北側にある第９号土坑では、円筒埴輪がまとまって検出されたことから古墳時代後期のものであるが、その他については、住居跡や古墳を切っていることから古墳時代後期以降のものとしか判断できない。

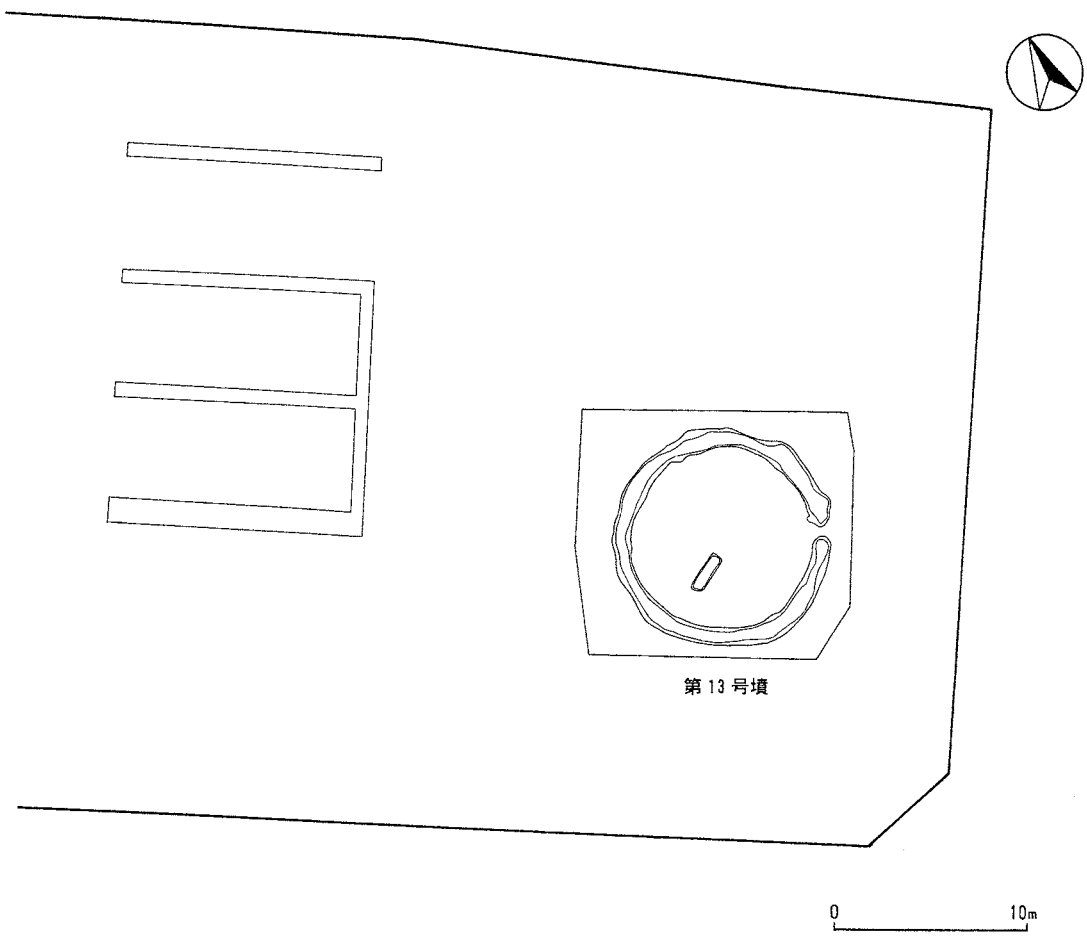
墓壙からは江戸時代の遺物が若干検出されている。やや崩れた状態ではあったが、緑泥片岩を箱型に組み合わせた構造であった。調査地点２の北東隅から１基のみ検出された。

ピットは主に調査地点２の北東部において検出されている。これらはほぼ７号溝跡に沿って位置していることから溝跡に付随するものと思われる。その他のピットについては規則的に並ぶものはみられなかった。

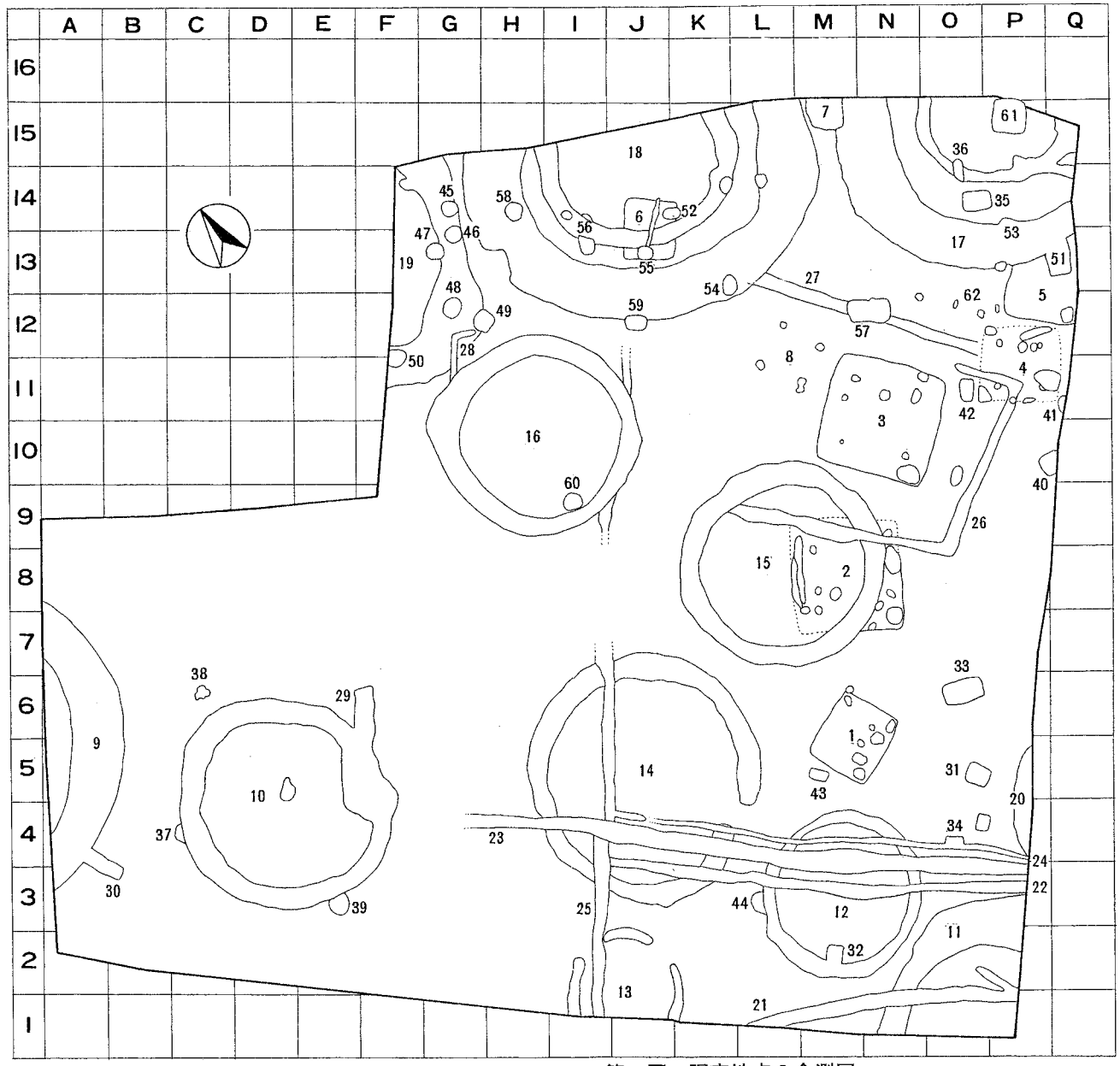

● ＝ 古 墳
1
調査地点
2
遺 跡 範 囲
瀬戸山遺跡・古墳群
万吉飛地
平塚新田
飛地
平塚新田飛地
遺 跡 範 囲
市立吉岡中学校
八幡神社
I
楊井
吉岡浄水場
調 査 地 点
吉岡配水場
2

第３図　調査地点位置図





第４図　調査地点１全測図



No.	遺構名	No.	遺構名
1	第1号竪穴住居跡	33	第4号土坑
2	第2号竪穴住居跡	34	第5号土坑
3	第3号竪穴住居跡	35	第6号土坑
4	第4号竪穴住居跡	36	第7号土坑
5	第5号竪穴住居跡	37	第8号土坑
6	第6号竪穴住居跡	38	第9号土坑
7	第7号竪穴住居跡	39	第10号土坑
8	第8号竪穴住居跡	40	第11号土坑
9	第 1 号 墳	41	第12号土坑
10	第 2 号 墳	42	第13号土坑
11	第 3 号 墳	43	第14号土坑
12	第 4 号 墳	44	第15号土坑
13	第 5 号 墳	45	第16号土坑
14	第 6 号 墳	46	第17号土坑
15	第 7 号 墳	47	第18号土坑
16	第 8 号 墳	48	第19号土坑
17	第 9 号 墳	49	第20号土坑
18	第 10 号 墳	50	第21号土坑
19	第 11 号 墳	51	第22号土坑
20	第 12 号 墳	52	第23号土坑
21	第1号溝跡	53	第24号土坑
22	第2号溝跡	54	第25号土坑
23	第3号溝跡	55	第26号土坑
24	第4号溝跡	56	第27号土坑
25	第5号溝跡	57	第28号土坑
26	第6号溝跡	58	第29号土坑
27	第7号溝跡	59	第30号土坑
28	第8号溝跡	60	第31号土坑
29	第9号溝跡	61	第1号墓坑
30	第1号土坑	62	ピット群
31	第2号土坑		
32	第3号土坑		

0 10m

第５図　調査地点２全測図

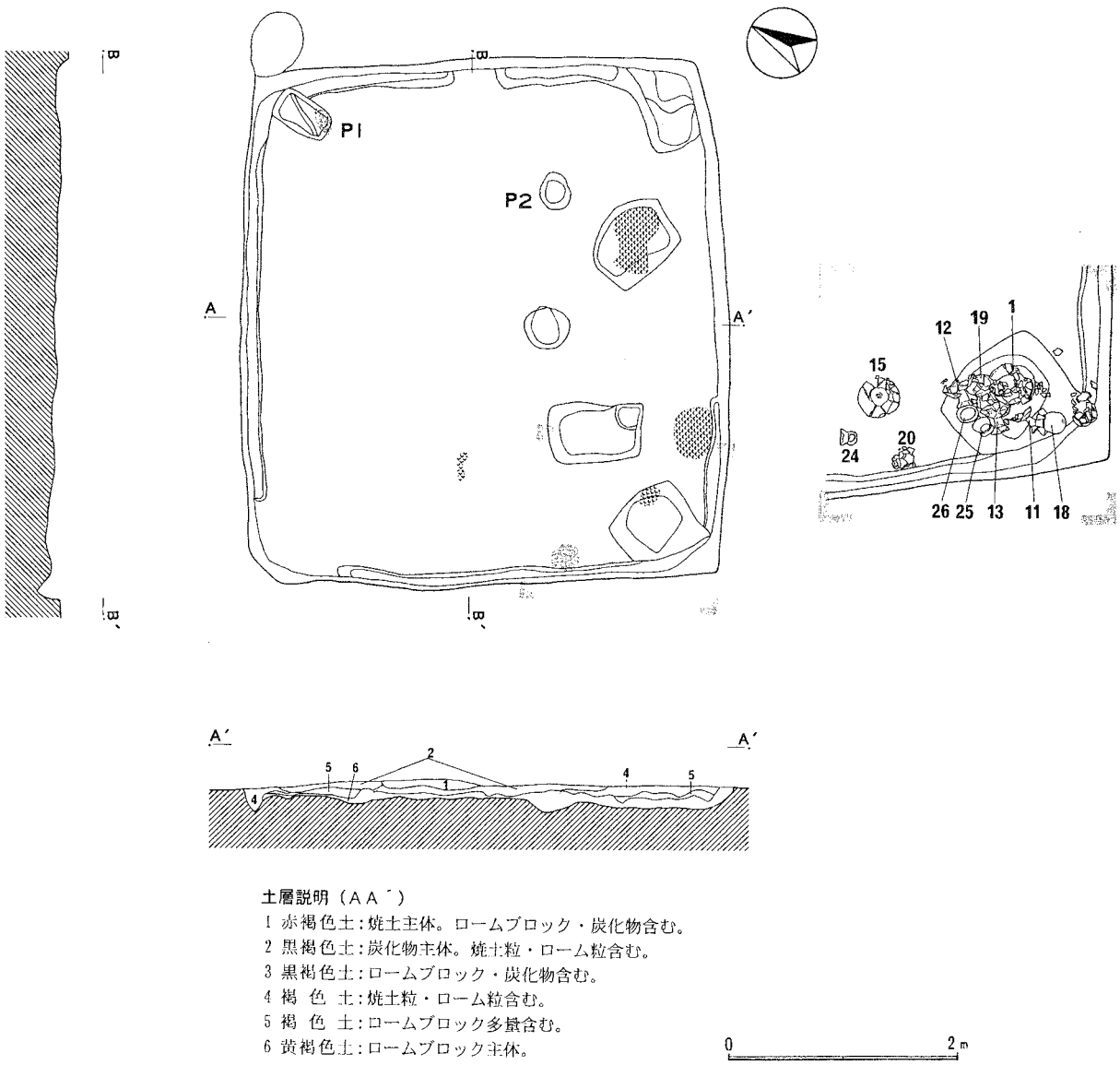
Ⅳ　遺構と遺物

1　古墳時代前期の遺構と遺物

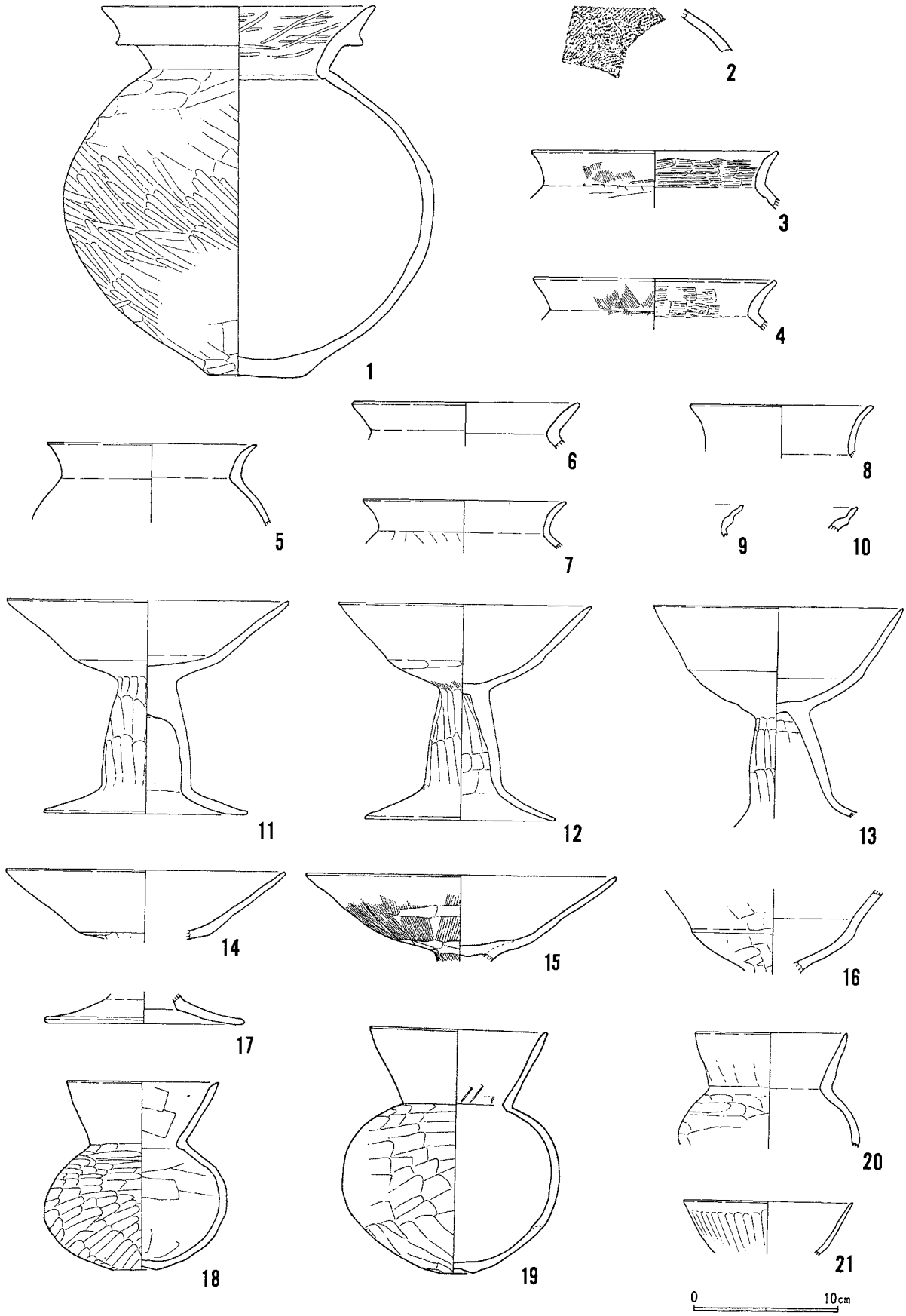
（1）竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡　（第６図）

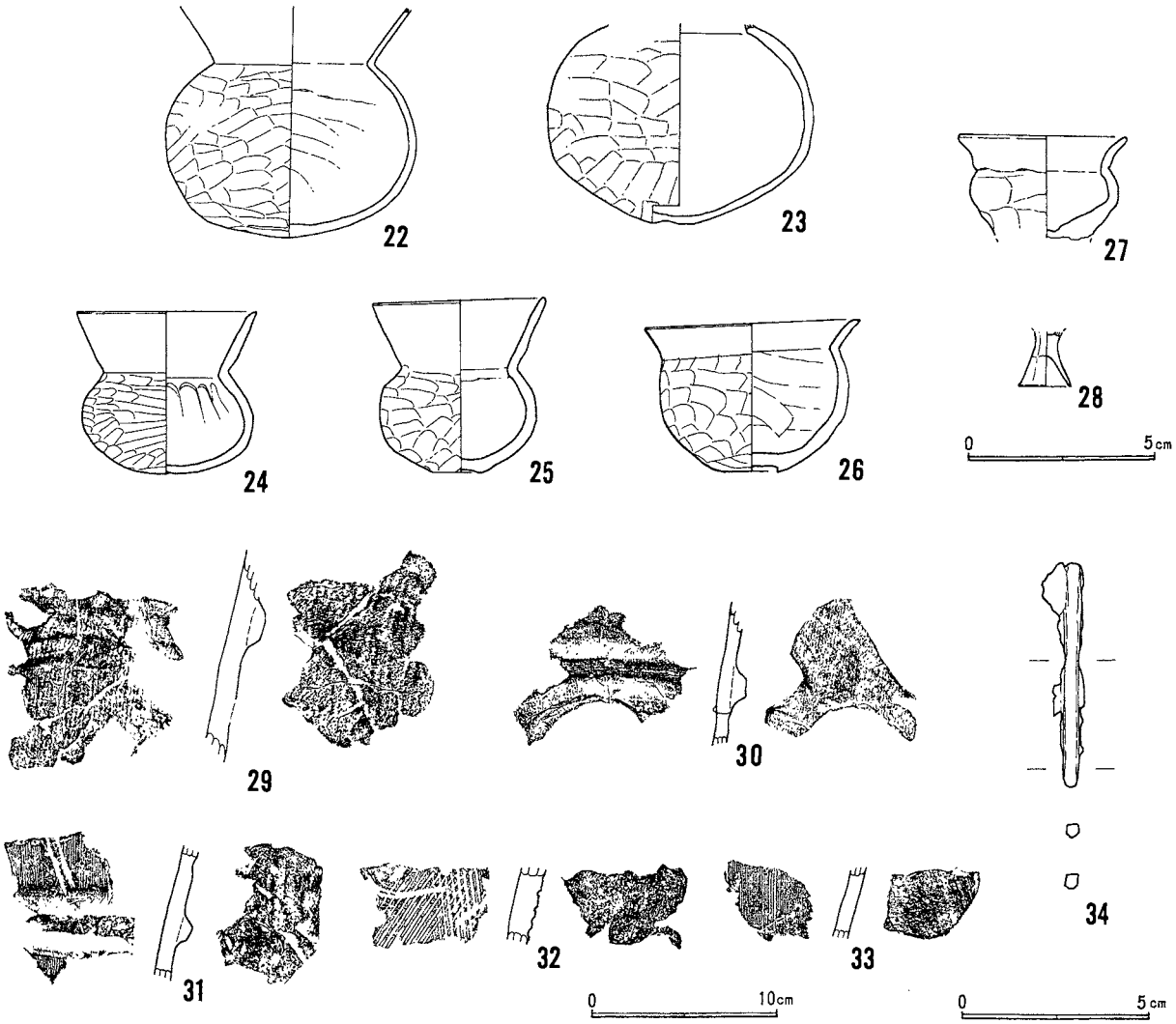
調査地点２の南東、Ｍ・Ｎ－５・６グリッドに位置する。長軸4.54m、短軸4.21mで、平面プランはほぼ正方形である。確認面からの深さは0.09m～0.18mでやや高低差がある。主軸方向はＮ－49°－Ｅ。北・西・南壁沿いには壁溝がみられ、北側は中央部分が切れている。幅は最も狭い南壁沿いで0.13m、最も広い北東隅で0.56mあるが、0.20m前後が平均的である。床面からの深さは0.14m前後である。なお、幅広の北東隅壁溝内は階段状になっている。床面はやや凹凸がみられるが全面貼床面である。炉跡はみられなかったが、住居跡内の所々で焼土が検出された。また、東壁沿いには炭化物がま



第６図　第１号竪穴住居跡



第７図　第１号竪穴住居跡出土遺物（1）



第８図　第１号竪穴住居跡出土遺物（２）

とまって検出された。貯蔵穴は南東隅に設けられている。長軸0.69m、短軸0.62mで、いびつな台形状を呈している。柱穴は４つ確認された。主柱穴と思われるものはみられないが、すべて住居跡に付随すると思われる。また、柱穴以外にも土坑状の掘り込みが住居跡内東側で２つ検出されているが用途は不明である。

遺物は貯蔵穴、及びその西側床面上からまとまって検出された。出土遺物には、土師器・壺、甕、高坏、坩、椀、ミニチュア土器の他に、刀子（？）、円筒埴輪がある。

第７図１・２は壺。１は胴部にヘラナデ後ミガキが施されている。３～10は甕。３～８は口縁部が「く」の字、９・10は「S」字状を呈する。11～17は高坏。いずれも口縁部が直線的で、坏部に稜を有し、脚部がやや膨らみ、裾部は平坦に近いタイプである。15の外面にはハケメが残存している。18～21・第８図22～25は坩。大中小さまざまであり、赤彩したものもみられる。26は口縁部が短く、器高が低いこと等から椀とした。27・28はミニチュア土器。27は甕、28は高坏である。29～33は円筒埴輪・胴部片。周辺の古墳からの流れ込みである。ヘラナデ整形の29・30は朝顔形の円筒埴輪の可能性がある。32の外面にはヘラによる線刻がみられる。34は刀子と思われる鉄製品。上部を欠いている。

第３表　第１号竪穴住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 19	土師器 壺	19.2 25.2 6.8	外 口縁部横ナデ。胴部横・斜位ヘラナデ後斜位ミガキ。内 口縁部横ナデ後横・斜位ミガキ。胴部横位ヘラナデ。複合口縁。胴部球形。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　　密	にぶい赤褐 褐灰色 褐　色	良好	ほぼ完形	
2 —	土師器 壺	— — —	外 ＬＲ単節縄文。内 横位ヘラナデ。外面摩耗顕著。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　　密	外　にぶい赤褐 褐灰色 内　褐　色	良好	肩部片	
3 19	土師器 甕	(17.2) (4.1) —	外 口縁部斜位ハケメ、胴部斜位ヘラナデ。内 横位ハケメ。胴部横位ヘラナデ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　やや粗	にぶい赤褐色 明赤褐色	良好	口縁部 20％	
4 19	土師器 甕	(17.0) (3.6) —	外 口縁部斜位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　小石　密	にぶい褐色 明赤褐色	良好	口縁部 20％	
5 19	土師器 甕	(12.6) (5.8) —	外 口縁部横位ヘラナデ。内 口～胴部横位ヘラナデ。内外面剥離顕著。口縁部やや外反する。胴部膨らむ。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　小石　やや粗	にぶい赤褐色 明赤褐色	良好	口 40％ 胴 15％	胴部調整図示不可。
6 —	土師器 甕	(16.0) (3.2) —	内外ともに口縁部横ナデ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 密	外　明赤褐色 橙　色 内　橙　色	良好	口縁部 15％	
7 19	土師器 甕	(14.2) (3.4) —	外 口縁部横ナデ。胴部横位ヘラナデ。 内 口縁部横ナデ。胴部横位ヘラナデ。外面剥離顕著。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 角閃石　石英 長石　　密	にぶい赤褐色	良好	口縁部 30％	
8 —	土師器 甕	(12.8) (3.7) —	内外ともに横ナデ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	外　にぶい黄褐 ｵﾘｰﾌﾞ黒色 内　褐灰色	良好	口縁部 15％	
9 —	土師器 甕	— — —	内外ともに横ナデ。口縁部「Ｓ」字状呈する。	白色粒　石英 小石 やや粗	黒褐色	良好	口縁部片	
10 —	土師器 甕	— — —	内外ともに横ナデ。口縁部「Ｓ」字状呈する。	砂粒　白色粒 石英 密	黒褐色 褐　色	良好	口縁部片	
11 19	土師器 高　坏	19.8 15.0 14.2	外 口縁・裾部横ナデ、脚部縦位ヘラナデ。 内 口縁・裾部横ナデ。脚部縦位粗いナデ。口縁部直線的に開く。坏部稜有。脚部やや膨らむ。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 密	にぶい褐色 橙　色	良好	口 70％ 坏 90％ 脚 90％ 裾 25％	
12 19	土師器 高　坏	17.8 15.2 13.3	外 口縁・裾横ナデ、坏部斜ハケメ後横ヘラナデ、脚部縦ヘラナデ。内 口縁・裾横ナデ。脚部縦・横ナデ。口縁部直線的に開く。坏部稜有。脚部やや膨らむ。	砂粒　黒色粒 石英　小石 密	明赤褐色 橙　色	良好	ほぼ完形	
13 19	土師器 高　坏	19.6 (15.4) —	外 口縁・裾部横ナデ、坏部横位ヘラナデ、脚部縦位ヘラナデ、内 口縁・裾部横ナデ。脚部横位粗いナデ。口縁部直線的に開く。坏部稜有。脚部やや膨らむ。	砂粒　黒色粒 角閃石　石英 小石 密	外　赤　色 内　明赤褐色	良好	口 20％ 坏 90％ 脚100％ 裾 10％	
14 —	土師器 高　坏	(19.6) (5.0) —	外 口縁部横ナデ、坏部横位ヘラナデ。 内 口縁部横ナデ。口縁部直線的に開く。坏部稜有。	砂粒　白色粒 石英 密	外　赤　灰赤 内　灰褐色 にぶい橙色	良好	口～坏 30％	
15 —	土師器 高　坏	21.8 (6.6)	外 口縁部横ナデ、坏部縦位ハケメ後一部横位ヘラナデ。内 口縁部横ナデ、ナデ。口縁部直線的に開く。坏部稜有。	砂粒　白色粒 石英　黒雲母 小石　　密	外　赤褐色 黒褐色 内　赤褐色	良好	口 90％ 坏100％	
16 —	土師器 高　坏	— (5.9) —	外 口縁部横ナデ、斜・縦位ヘラナデ、坏部横・斜位ヘラナデ。内 口縁部横ナデ。口縁部やや外反する。坏部稜有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 金雲母　小石　密	赤褐色	良好	坏 部 20％	
17 —	土師器 高　坏	— (2.1) (12.0)	内外ともに横ナデ。緩やかに広がる。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 密	暗褐色 赤褐色	良好	裾 部 30％	
18 20	土師器 坩	10.6 13.3 2.8	外 口縁横ナデ、胴横・斜ヘラナデ。内 口縁横ナデ、胴横ヘラナデ、口縁部直線的に開く。胴部球形。底部上げ底。	砂粒　白色粒 黒色粒　長石 石英　　密	外　にぶい赤褐 黒　色 内　にぶい赤褐	良好	ほぼ完形	
19 20	土師器 坩	12.4 17.3 2.4	外 口縁横ナデ、胴横・斜ヘラナデ。 内 口縁横ナデ、胴横ヘラナデ、口縁部直線的に開く。胴部球形。底部上げ底。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 密	にぶい赤褐色	良好	ほぼ完形	
20 20	土師器 坩	10.6 (8.1) —	外 口縁横ナデ、縦ヘラナデ。胴部横ヘラナデ。内 口縁横ナデ。胴部横ヘラナデ。口縁部直線的に開く。胴部球形。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 密	外　橙　色 内　明赤褐色	良好	口 45％ 胴 35％	
21 —	土師器 坩	(11.8) (3.8) —	外 口縁部縦位ヘラナデ。内 口縁部横位ヘラナデ。口縁部やや内湾する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　密	にぶい赤褐色	良好	口縁部 25％	
22 20	土師器 坩	— (12.6) —	外 口縁横ナデ。胴横・斜ヘラナデ。 内 口縁横ナデ。胴斜ヘラナデ。口縁部直線的に開く。胴部球形。底部丸底。	砂粒　白色粒 密	外　にぶい赤褐 内　橙　色	良好	口 10％ 胴100％ 底100％	

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
23 20	土師器 坩	－ 1.6 10.9	外 胴部横・斜位ヘラナデ。内 胴部横位ヘラナデ。胴部球形。底部上げ底。 良好	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　　密	外　明赤褐色 内　赤褐色	良好	胴 60% 脚100%	
24 20	土師器 坩	9.4 9.6 2.7	外 口縁横ナデ、胴横・斜ヘラナデ。 内 口縁横ナデ、胴横ヘラナデ。口縁部直線的に開く。胴部球形。底部上げ底。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　　密	にぶい橙色	普通	ほぼ完形	
25 20	土師器 坩	9.8 8.9 1.0	外 口縁横ナデ、胴横・斜ミガキ。 内 口縁横ナデ、胴ユビオサエ、ヘラナデ。口縁部直線的に開く。胴部球形。丸底。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　　密	黒褐色 赤褐色	良好	ほぼ完形	
26 20	土師器 椀	11.8 8.3 3.2	外 口縁横ナデ。胴横ヘラナデ。 内 口縁横ナデ。胴横・斜ヘラナデ。口縁直線的に開く。胴部球形。底部やや上げ底。	砂粒　白色粒 石英 密	外　黒褐色 内　にぶい橙色 暗褐色	良好	ほぼ完形	
27 －	土師器 ﾐﾆﾁｭｱ	4.6 (2.8) －	外 口縁部横ナデ。胴部横位ヘラナデ。内 口縁部横ナデ。胴部横位ヘラナデ。口縁部外反する。胴部倒卵形。	白色粒　黒色粒 石英 密	外　黒褐色 灰褐色 内　灰褐色	良好	口～胴 100%	台付甕。
28 －	土師器 ﾐﾆﾁｭｱ	－ (1.5) (1.5)	外 脚部縦位ヘラナデ。内 脚部横位ヘラナデ。脚部「ハ」の字に開く。	砂粒　白色粒 石英 密	外　灰褐色 内　黒褐色	良好	接100% 脚 10%	高坏。
29 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	内外ともに縦位ヘラナデ。突帯やや丸み帯びる。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　やや粗	橙　色	良好	胴部片	
30 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ヘラナデ。内 斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。透孔有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	橙　色	良好	胴部片	
31 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。外面線刻有。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　やや粗	にぶい橙色	普通	胴部片	
32 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 横・縦位ヘラナデ。外面線刻有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　やや粗	外　明赤褐色 内　褐　色	良好	胴部片	
33 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位細かいハケメ。内 斜位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 やや粗	にぶい橙色	良好	胴部片	

第４表　第１号竪穴住居跡出土鉄製品観察表

No.	種 別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
34	刀子？	(6.2)	5.0	4.0	－	断面正方形。上部欠く。

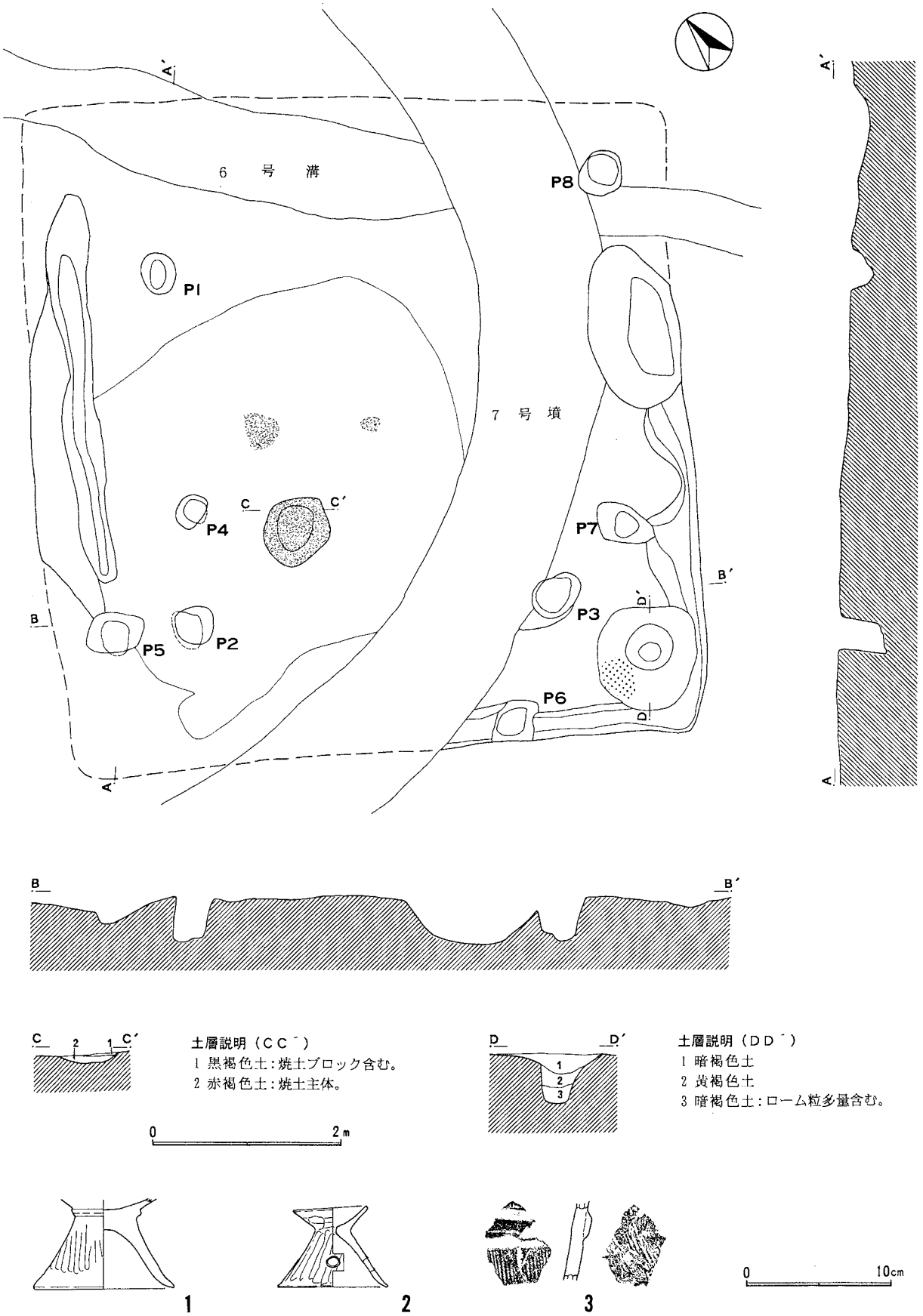
第２号竪穴住居跡（第９図）

調査地点２の東側ほぼ中央、Ｍ・Ｎ―７～９グリッドに位置する。北側、及び中央より東側を第６号溝跡と第７号墳により一部切られている。また、掘り込みがほとんどみられないことから、北側、及び北西隅、南西隅の壁を欠いている。

本住居跡の規模は残存する東西中央部分で6.95mを測ることから、一辺 約７m程の正方形プランになるものと思われる。深さは残りの良い南東部で約0.02～0.05mである。主軸方向はＮ－44°－Ｅ。

壁溝は残りの良い西壁一部、及び南東部において確認されたが、本来は全周していたのかもしれない。幅は0.15～0.56mで一定していない。深さは床面、及び確認面から0.06～0.14mである。床面は住居跡中心から南西部において貼床面が検出されたが、壁溝同様、本来は全面貼床面であった可能性がある。貼床面はほぼ平坦である。炉跡は住居跡中央よりやや南西部に設けられている。長軸0.79m、短軸0.66m、床面からの深さは0.08mで、不整円形をしている。炉跡の北側には若干の焼土が床面に散っていた。貯蔵穴は南東隅に設けられている。径1.05m前後でほぼ円形状を呈している。床面からの深さは0.52mである。貯蔵穴の上面には少量の炭化物がまとまってみられた。

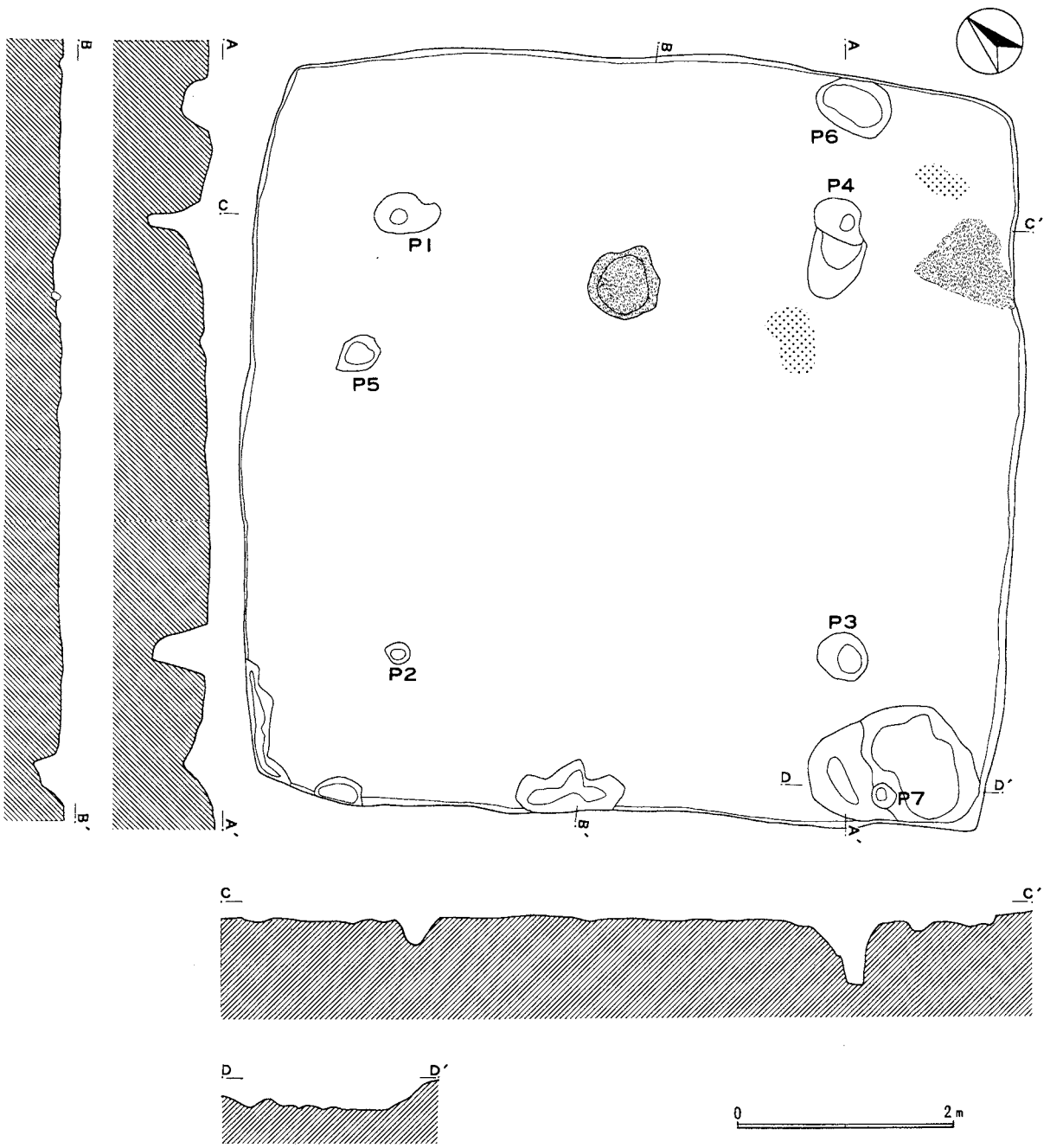
柱穴は計８つ検出された。Ｐ１～３は主柱穴となるが、北東部の柱穴は７号墳により破壊されている。その他、Ｐ５は遺物が検出されたことから本住居跡に伴うものであるが、Ｐ６～８については不明である。また、東壁中央部には楕円形状を呈した土坑状の掘り込みが見られるが、東壁内にラインが含まれ



第９図　第２号竪穴住居跡・出土遺物

第５表　第２号竪穴住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 21	土師器 高杯	－ (6.2) 9.8	外 脚部縦位ヘラナデ。内 斜位ヘラナデ。台付。接合部突帯有。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　やや粗	黄橙色 橙　色	良好	脚 部 100%	
2 21	土師器 器 台	5.3 5.7 7.8	外 口縁横位、台部縦位ヘラナデ。 内 口縁・台部横位ヘラナデ。坏部底面、台部(４つ)透孔有。口縁部直線的に開く。台部「ハ」の字に開く。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　密	外　にぶい赤褐 内　明赤褐色	良好	完　形	
3 －	円 筒 埴 輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。突帯低く、やや丸み帯びる。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　やや粗	外　にぶい赤褐 内　橙　色	良好	胴部片	



第10図　第３号竪穴住居跡

ることから、本住居跡に伴うものと判断した。掘り方の可能性も考えられる。

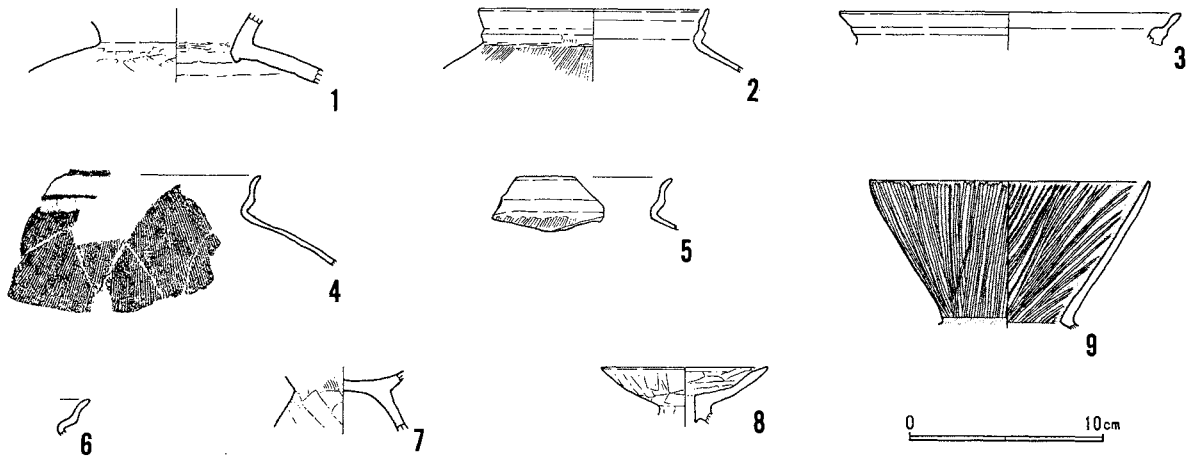
出土遺物は残存状態の悪さから少ない。このうち図示可能な遺物は３点のみである。

第９図１は土師器・高杯の脚部。接合部には突帯が巡っている。２は土師器・器台。完形品である。Ｐ５から出土した。３は円筒埴輪・胴部片。７号墳からの流れ込みである。

第３号竪穴住居跡（第10図）

調査地点２の北東、Ｍ～Ｏ－10・11グリッドに位置する。本住居跡の規模は一辺7.05mで、平面プランは正方形である。確認面からの深さは0.05m前後で、他の住居跡同様、非常に浅い。主軸方向はＮ－36°－Ｅ。

壁溝は南西隅と南側壁中央部にみられるだけである。幅は南西隅で0.12m、南側中央で0.46mある。



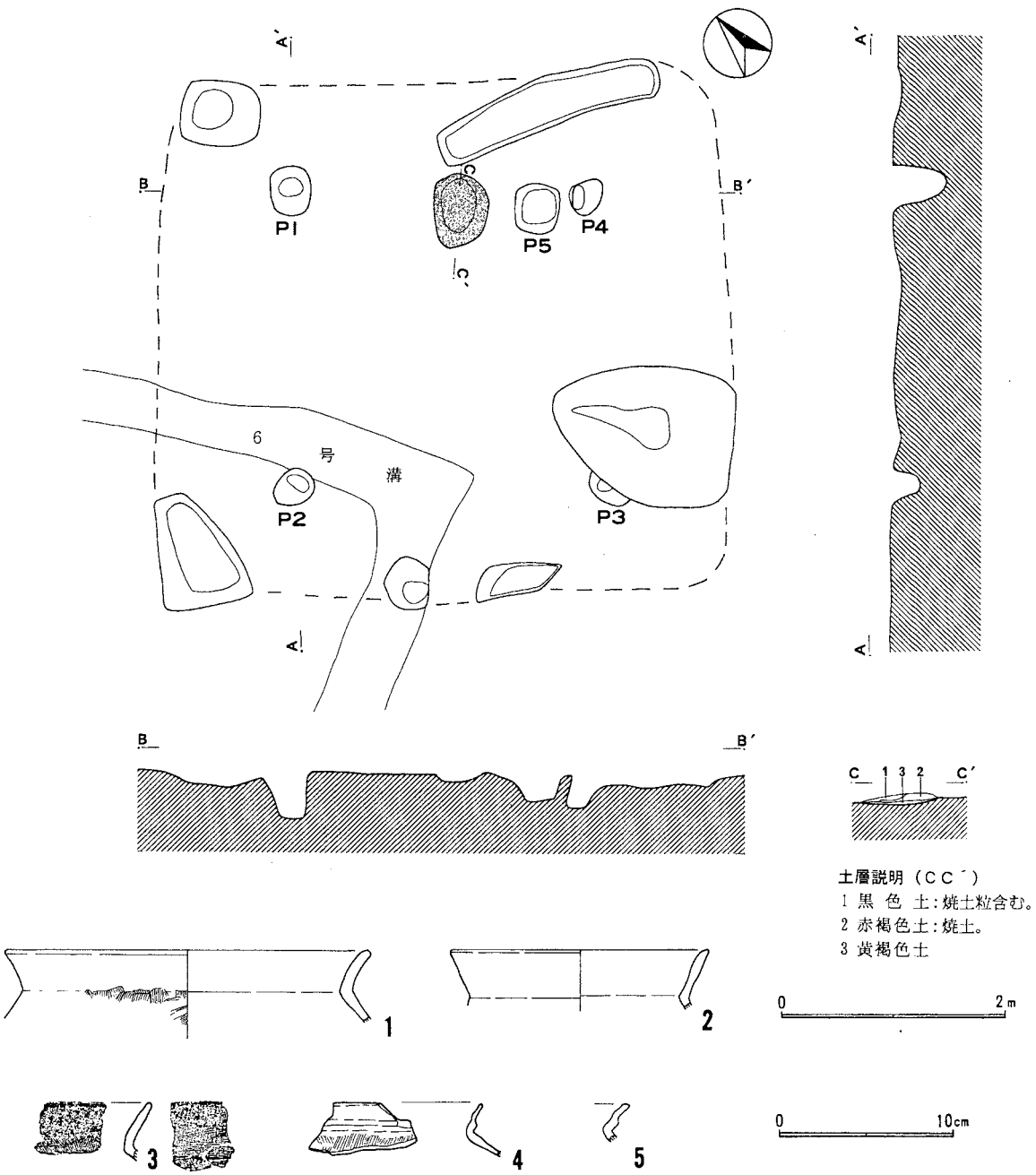
第11図　第３号竪穴住居跡出土遺物

第６表　第３号竪穴住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 －	土師器 壺	－ (3.7) －	外 頸部横ナデ、肩部縦・斜位ハケメ。 内 口縁部横ナデ、肩部横位ヘラナデ。内面輪積痕有。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 密	外　にぶい黄褐 褐灰色 内　にぶい橙色	良好	頸 30% 肩 15%	
2 21	土師器 甕	(12.3) (3.3) －	外 口縁部横ナデ、胴部縦位ハケメ。 内 口縁部横ナデ、胴部横位ヘラナデ。口縁部「S」字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　密	外　灰黄褐色 黒褐色 内　にぶい褐色	良好	口～胴 15%	
3 －	土師器 甕	(18.0) (1.7) －	内外ともに口縁部横ナデ。口縁部「S」字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　明褐灰色 内　にぶい赤褐	良好	口縁部 10%	
4 21	土師器 甕	－ － －	外 口縁部横ナデ、胴部縦・斜位ハケメ。 内 口縁部横ナデ、胴部横位ヘラナデ。口縁部「S」字状呈する。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 密	外　黒褐　灰黄 内　にぶい黄褐 暗灰黄色	良好	口～胴片	
5 －	土師器 甕	－ － －	外 口縁部横ナデ、胴部斜位ハケメ。 内 口縁部横ナデ、胴部横位ヘラナデ。口縁部「S」字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 密	外　黒色　褐色 浅黄色 内　褐灰色	良好	口縁部片	
6 －	土師器 甕	－ － －	内外ともに口縁部横ナデ。口縁部「S」字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 密	外　にぶい黄橙 灰黄褐色 内　暗灰黄色	良好	口縁部片	
7 －	土師器 甕	－ (3.3) －	外 斜位ハケメ後斜位ヘラナデ。内 横・斜位ヘラナデ。台付。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　にぶい橙色 灰黄褐色 内　灰白色	普通	接合部 100%	
8 －	土師器 器台	(8.8) (3.0) －	内外ともに口縁部縦・斜位ヘラナデ。口縁部やや内湾する。台部緩やかに広がる。底面透孔有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　にぶい橙色 灰黄褐色 内　灰白色	普通	口　25% 接100%	
9 21	土師器 坩	14.6 (7.9) －	内外ともに口縁部縦位ミガキ。口縁部直線的に開く。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 密	赤褐色	良好	口縁部 100%	

床面からの深さは0.25mである。床面はやや凹凸がみられるが、全面貼床面である。炉跡は住居跡中心からやや北側に設けられている。径0.65m前後の不整円形状を呈しており、床面からの深さは0.08mである。柱穴は計７つが確認された。このうちＰ１～４が主柱穴となるが、Ｐ２は他の柱穴に比べて小さい。また、Ｐ４のまわりからは焼土、及び炭化物が検出されている。Ｐ５～７は本住居跡に伴うものかどうかは不明である。貯蔵穴は南東隅に設けられている。長軸1.60m、短軸1.16m、床面からの深さは0.15mで、楕円形状を呈する。貯蔵穴内には２つの掘り込みがあり、その間にＰ７がみられる。

出土遺物は少なく、図示可能な遺物は９点のみである。土師器・壺、甕、器台、坩等がみられ、いず



第12図　第４号竪穴住居跡・出土遺物

第７表　第４号竪穴住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 —	土師器 甕	(21.6) (4.3) —	外 口縁部横ナデ。胴部縦・斜位ハケメ。 内 口縁部横ナデ。胴部横位ヘラナデ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　密	外　褐灰色 黒　色 内　灰褐色	良好	口縁部 15%	
2 —	土師器 甕	(3.6) —	内外ともに口縁部横ナデ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　密	外　にぶい赤褐 暗褐色 内　にぶい橙色	良好	口縁部 20%	
3 —	土師器 甕	— — —	外 口縁部横ナデ、斜位ハケメ。内 横・斜位ハケメ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 密	外　橙　色 内　明赤褐色 にぶい橙色	良好	口縁部片	
4 —	土師器 甕	— — —	外 口縁部横ナデ。胴部斜位ハケメ。内 口縁部横ナデ。胴部横位ヘラナデ。口縁部「S」字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　密	外　黒褐色 内　黒褐色 にぶい赤褐	良好	口縁部片	
5 —	土師器 甕	— — —	内外ともに口縁部横ナデ。口縁部「S」字状呈する。	砂粒　黒色粒 石英 密	外　黒　色 内　褐　色	良好	口縁部片	

れも破片での検出である。

第11図１は壺・頸～肩部片。内面には輪積痕がみられる。２～６は「S」字状口縁を持つ甕。いずれも器壁が薄い。７は甕の接合部。胎土が粗い。８は器台。底面には孔を有する。外面はナデ調整である。９は坩の口縁部で内外面赤彩している。

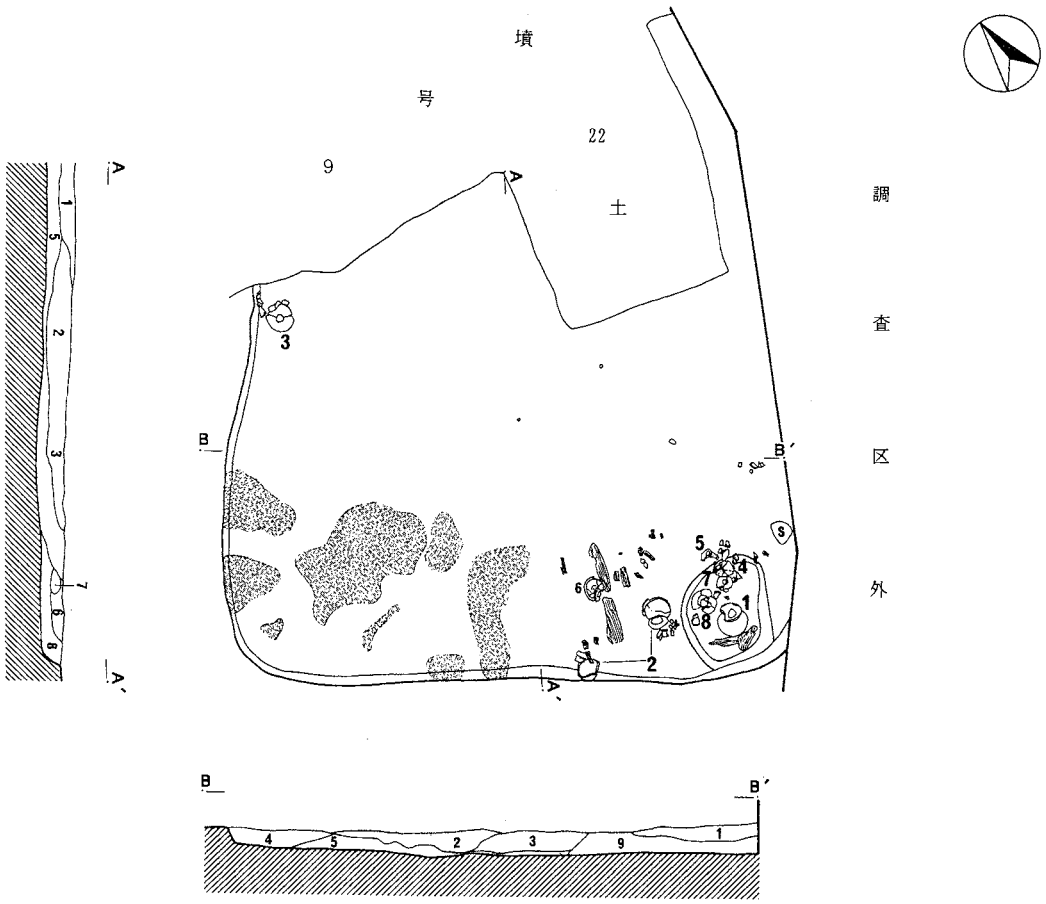
第４号竪穴住居跡（第12図）

調査地点２の東端ほぼ中央、Ｐ・Ｑ－11・12グリッドに位置する。本住居跡の西には３号住、北東には５号住がある。残存状態が非常に悪く、炉跡、柱穴、壁溝のみの検出である。また、南東部は第６号溝に切られているため、正確な規模・平面プラン等は不明であるが、検出された柱穴、及び壁溝からみて一辺4.60m程度の正方形になると思われる。主軸方向も定かではないが、Ｎ－33°－Ｅ程度になろう。壁溝は、北側と南側において一部検出されただけである。北東部の壁溝は住居跡の内側に入り込み、炉跡に接する所まで延びているが、これは確認面の影響で掘り方まで掘った結果と考えられる。また、北西隅、及び南西隅、南側中央にはピット状の掘り込みがみられるが、これも確認面の影響から壁溝がピット状になったものと思われる。北側、及び南側の壁溝の幅は0.26～0.45m、確認面からの深さは0.05m前後である。床面は削平されているため残っていないが、床面中心よりやや北側には炉跡が設けられている。長軸0.67m、短軸0.50mで不整円形状を呈する。深さは床面が有効ではないので定かではないが、確認面からは0.05mを測る。柱穴は計５つ検出されている。Ｐ１～４が主柱穴と思われる。Ｐ５は本住居跡に伴うものかどうか不明である。

本住居跡の南東部には長軸1.60m、短軸1.25mの掘り込みがみられ、Ｐ３と重複していることから別の遺構とも考えられたが、掘り込みの東側ラインが本住居跡東壁ラインと一致することから、とりあえず本住居跡に含めた。掘り方の可能性が考えられる。

出土遺物は残存状態の悪さから非常に少ない。図示可能な遺物は５点のみであるが、いずれも破片である。炉跡や周溝、柱穴より出土した。これらはすべて土師器・甕の口縁部である。

第12図１～３は口縁部が「く」の字状を呈する。２は口径がやや小さい。４・５は「S」字状口縁部片。４は器壁が薄い。



土層説明（ＡＡ´ＢＢ´）
1 暗褐色土：ローム粒・炭化物少量含む。
2 黒　色　土：焼土粒・ローム粒・炭化物含む。
3 黒褐色土：焼土粒・ローム粒少量含む。
4 暗褐色土：ロームブロック・炭化物少量含む。
5 暗褐色土：焼土粒・ローム粒・ロームブロック・炭化物含む。
6 黄褐色土：ローム粒多量含む。
7 ロームブロック
8 暗褐色土：ロームブロック含む。
9 褐　色　土：焼土粒・ローム粒少量含む。

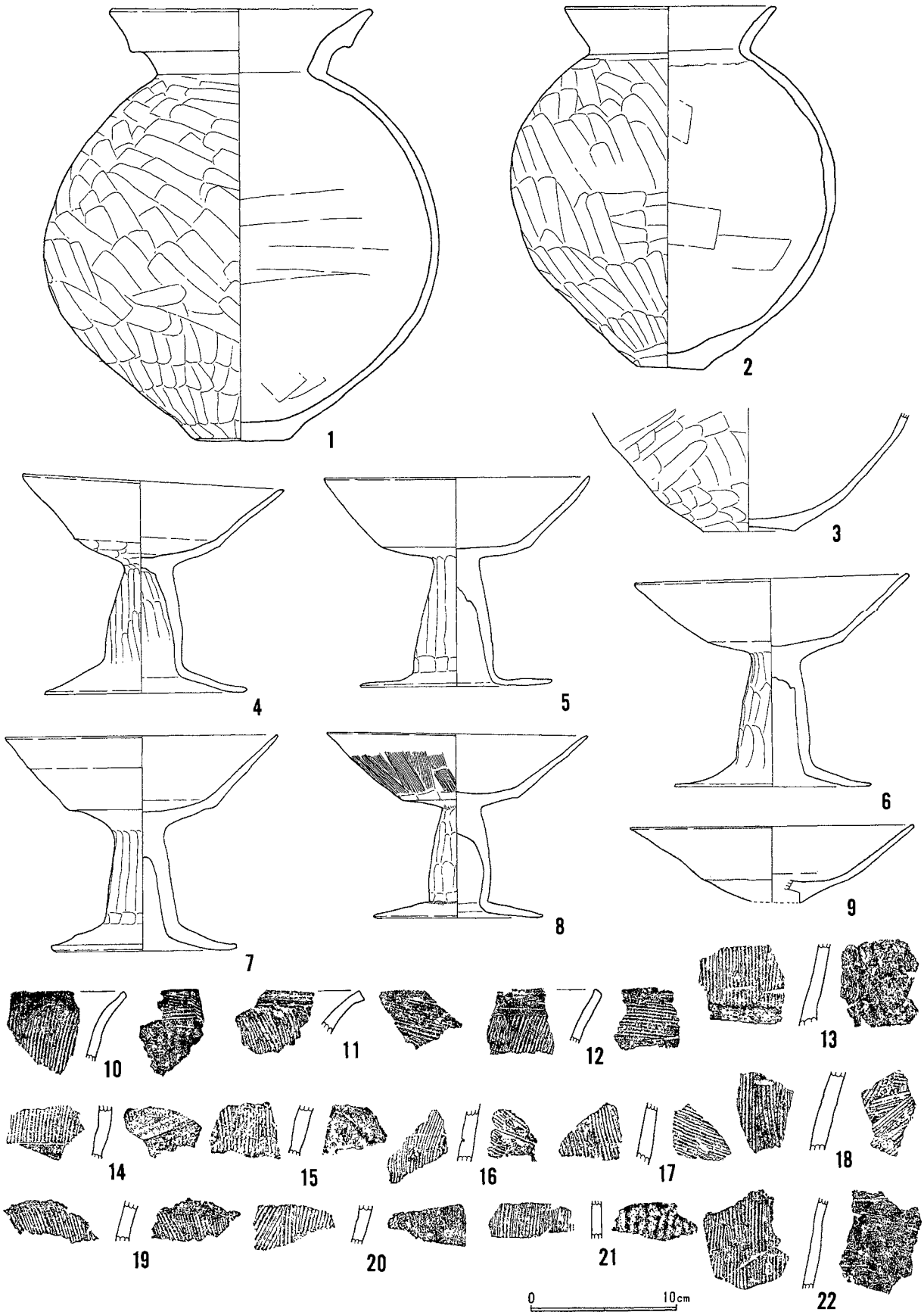
0　2m

第13図　第５号竪穴住居跡

第５号竪穴住居跡（第13図）

調査地点２の北東、Ｐ・Ｑ－12・13グリッドに位置する。本住居跡の北側は９号墳と22号土坑により切られており、東側は調査区外にある。よって、規模は定かではないが、住居跡南東の調査区との境には貯蔵穴が見られることから一辺５m程度のものになろう。また、平面プランは他の住居跡同様、正方形になろう。確認面からの深さは、0.15～0.20mとしっかりした掘り込みがみられる。主軸方向は南・西壁を基準とするとＮ－30°－Ｅ程度になる。検出された部分での床面は全面貼床面であり、ほぼ平坦である。壁溝や炉跡、柱穴は確認できなかったが、南壁沿いからは焼土や炭化物がまとまって検出された。貯蔵穴は調査区との境に設けられており、この部分が本住居跡の南東隅になると思われる。貯蔵穴は長軸0.95m、短軸0.80mで、楕円形状を呈している。

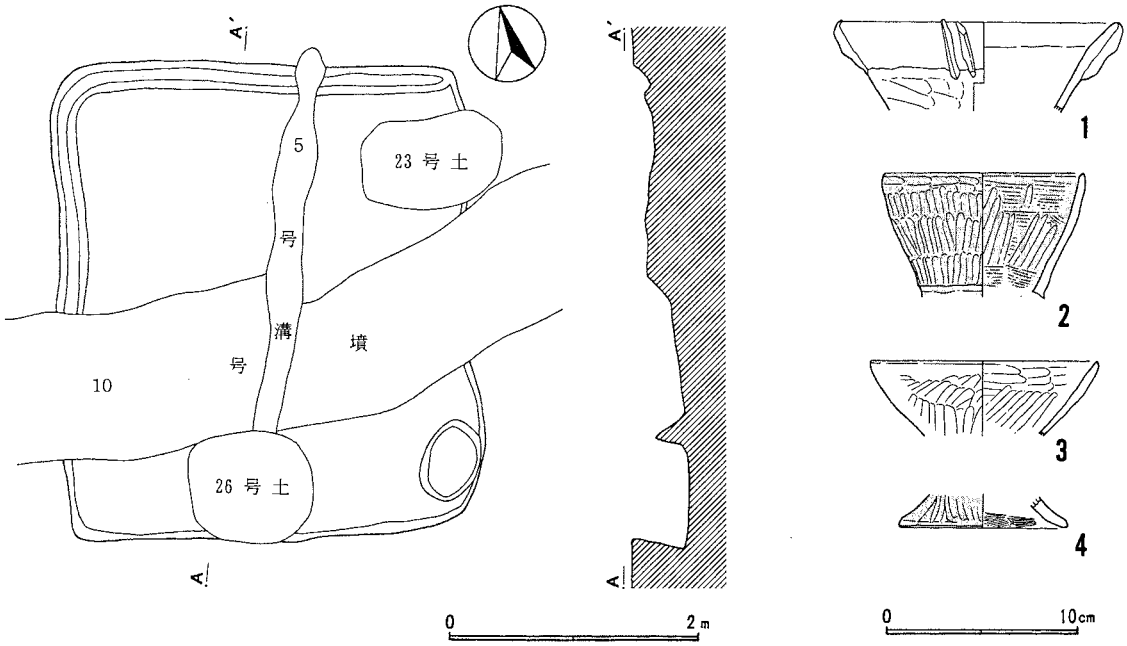
遺物は貯蔵穴内、及びその周辺からまとまって検出されている。図示可能な遺物は、土師器・壺、高



第14図　第５号竪穴住居跡出土遺物

第８表　第５号竪穴住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 21	土師器 壺	18.3 30.5 6.8	外 口縁横ナデ、胴部斜・縦ヘラナデ。 内 口縁横ナデ、胴部横・斜ヘラナデ。複合口縁。口縁部外反。胴部球形。底部平底。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 長石　小石　やや粗	外　明赤褐色 内　浅黄橙色	普通	ほぼ完形	
2 21	土師器 壺	14.8 25.3 4.6	外 口縁部横ナデ、胴部斜位ヘラナデ。 内 口縁部横ナデ、胴部横・斜位ヘラナデ。口縁部「く」の字。胴部球形。平底。	砂粒　白色粒 黒色粒 やや粗	赤　色	良好	ほぼ完形	
3 21	土師器 壺	－ (8.2) 6.2	内外ともに斜位ヘラナデ。胴下～底部丸くすぼまる。底部上げ底。	砂粒　白色粒 赤色粒　小石 密	外　にぶい赤褐 黒褐色 内　暗赤灰色	良好	胴～底 100%	
4 22	土師器 高　坏	(18.3) 15.5 (14.2)	外 斜位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部直線的に開く。	白色粒　黒色粒 小石 密	外　赤　色 内　橙　色	良好	口 15% 坏 70% 脚 90%	
5 22	土師器 高　坏	18.6 14.6 13.4	外 口縁・裾部横ナデ。坏部横ヘラナデ。脚部縦・横ヘラナデ。内 口縁・裾部横ナデ。脚部横ヘラナデ。口縁ほぼ直線的に開く。坏部稜有。脚やや膨らむ。裾平坦。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 小石 密	外　明赤褐色 褐灰色 内　にぶい赤褐	良好	ほぼ完形	
6 22	土師器 高　坏	18.6 14.6 13.4	外 口縁・裾横ナデ。坏横ヘラナデ。脚縦ヘラナデ。内 口縁・裾横ナデ。脚横ヘラナデ。口縁直線的に開く。坏稜有。脚やや膨らむ。裾緩やかに広がる。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 長石 密	外　にぶい赤褐 灰褐色 橙　色 内　橙　色	良好	ほぼ完形	
7 22	土師器 高　坏	(19.2) 15.1 (12.6)	外 口縁・裾横ナデ。坏横ヘラナデ。脚縦・横ヘラナデ。内 口縁・裾横ナデ。脚横ヘラナデ。口縁直線的に開く。坏稜有。脚ほぼ直立。裾部やや膨らむ。	砂粒　白色粒 石英　小石 やや粗	外　明赤褐色 にぶい赤褐 内　橙　色	良好	口 45% 坏100% 脚100% 裾 40%	
8 22	土師器 高　坏	18.1 13.1 11.8	外 口縁・裾横ナデ。縦ハケメ。坏横ヘラナデ。脚縦ヘラナデ。内 口縁・裾横ナデ。脚横ヘラナデ。口縁直線的に開く。坏稜有。脚ほぼ直立。裾部緩やか。	砂粒　黒色粒 密	橙　色 明赤褐色	良好	ほぼ完形	
9 22	土師器 高　坏	19.8 (5.4) －	内外ともに口縁部横ナデ。口縁部直線的に開く。坏部稜有。	白色粒　黒色粒 石英　小石 密	赤褐色	良好	口 50% 坏100%	
10 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 横位ハケメ、ヘラナデ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 密	にぶい赤褐色	普通	口縁部片	
11 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 斜位ハケメ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	橙　色	良好	口縁部片	
12 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部直線的に開き、口唇部やや受け口状呈する。	砂粒　白色粒 石英 密	にぶい赤褐色	良好	口縁部片	
13 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 小石 やや粗	にぶい赤褐色	良好	胴部片	
14 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。	白色粒　赤色粒 小石 やや粗	にぶい赤褐色	良好	胴部片	
15 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　粗	明赤褐色	普通	胴部片	
16 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。内面線刻有。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 密	明赤褐色	良好	胴部片	
17 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 横位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	明赤褐色	良好	胴部片	
18 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 やや粗	明赤褐色	良好	胴部片	
19 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 横位ハケメ。	砂粒　白色粒 赤色粒　石英 やや粗	明赤褐色	良好	胴部片	
20 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 石英　小石 密	にぶい赤褐色	良好	胴部片	
21 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　橙　色 内　明赤褐色	良好	胴部片	
22 25・26	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 赤色粒　石英 密	にぶい赤褐色	良好	胴部片	



第15図　第６号竪穴住居跡・出土遺物

坏のみである。この他には９号墳からの流れ込みである円筒埴輪・破片が多数検出された。

第14図１～３は土師器・壺。１・２はほぼ完形である。１は貯蔵穴、２はその西側床面より出土した。３は壺・胴下～底部。他の遺物とは離れた北西部より出土した。４～９は高坏。いずれも口縁部が直線的に開き、坏部には稜を有し、脚部はやや膨らみ、裾部は平坦に近く、緩やかに開くタイプのものである。８のみ外面にハケメ調整が残存している。貯蔵穴より出土した。10～22は円筒埴輪。赤褐色でハケメ整形のみみられる。９号墳からの流れ込みである。

第６号竪穴住居跡（第15図）

調査地点２の北端ほぼ中央、Ｊ・Ｋ－13・14グリッドに位置する。本住居跡はほぼ中央部分を東西に10号墳内周溝により分断され、また、南北を５号溝跡、北東部を23号土坑、南壁中央を26号土坑によりそれぞれ切られている。残存状態は非常に悪いが、規模は計測可能であり、長軸3.84m、短軸3.22mのほぼ正方形に近い。確認面からの深さは0.15m前後である。主軸方向はＮ－18°－Ｅ。壁溝は北・西壁沿いにみられ、幅は0.20～0.25m、床面からの深さは0.05m前後である。検出した床面は全面貼床面である。炉跡・柱穴等は確認できなかったが、貯蔵穴は確認された。南東隅に設けられており、長軸0.66m、短軸0.44mで、床面からの深さは 0.20m前後である。楕円形状を呈している。

出土遺物は少ないが、主に貯蔵穴より検出された。土師器・壺、坩、器台等がある。

第15図１は壺。口縁部には棒状浮文が二個一対で貼り付けられている。２・３は坩の口縁部。２は内外面を赤彩している。３は口径が大きく低い。４は器台の台部。外面のみ赤彩している。

第９表　第６号竪穴住居跡出土遺物観察表

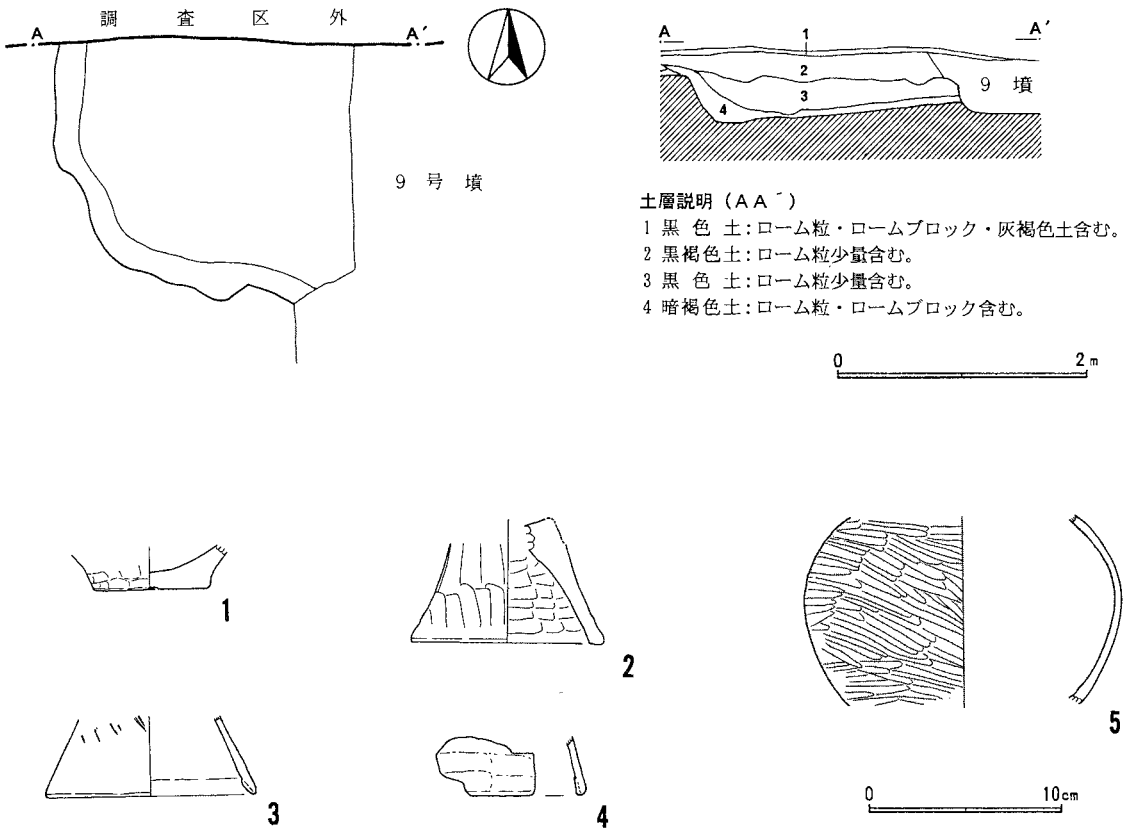
挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 22	土師器 壺	(15.0) (4.7) －	外 口縁部横ナデ、横位ヘラナデ。内 横ナデ、横位ヘラナデ。口縁部二個一対の棒状浮文有。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 やや粗	外　橙　赤橙 内　にぶい橙色 黒褐色	良好	口縁部 30%	
2 22	土師器 坩	(10.6) (6.6) －	外 口縁部横・縦位ミガキ。内 口縁部横位ハケメ後縦位ミガキ。赤彩。	砂粒　黒色粒 石英　小石 密	赤褐色	良好	口縁部 40%	
3 －	土師器 坩	(12.0) (4.0) －	外 口縁部斜・縦位ミガキ。内 口縁部横・斜位ミガキ。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 密	にぶい黄橙色	良好	口縁部 10%	
4 －	土師器 坩	－ － －	外 裾部縦・横位ミガキ。赤彩。内 横位ハケメ。裾部緩やかに広がる。	砂粒　黒色粒 白色粒　角閃石 小石　密	外　赤褐色 内　浅黄橙色	良好	台　部 10%	

第７号竪穴住居跡（第16図）

調査地点２の北東端、Ｍ・Ｎ－15グリッドに位置し、第９・10号墳の間にある。検出されたのは住居跡の南西隅のみである。北側半分は調査区外にあり、南東部は第９号墳に切られている。よって、本住居跡の規模は不明であるが、平面プランは検出された南西隅からみて他の住居跡同様、正方形になろう。確認面からの深さは最も深い壁際で0.38m、９号墳寄りで0.30mあり、住居跡の中心部に向ってやや高くなる傾向がみられる。床面は全面貼床面。壁溝・柱穴はみられず、その他の付属施設についても不明である。

出土遺物は非常に少なく、図示可能な遺物は５点のみである。土師器・壺、甕、坩等がある。

第16図１は壺の底部。２～４は台付甕の台部。３・４は折り返しがみられ、器壁が薄いことから「Ｓ」



第16図　第７号竪穴住居跡・出土遺物

第10表　第７号竪穴住居跡出土遺物観察表

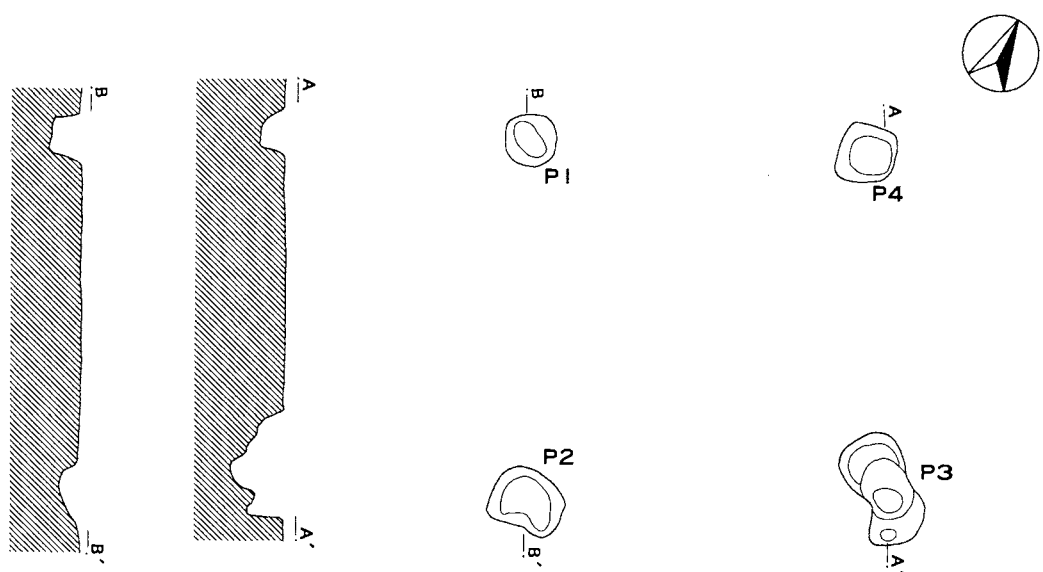
挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 —	土師器 壺	— (2.3) 6.1	外 横位ヘラナデ。内 横・斜位ヘラナデ。底部平底。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　　密	外　にぶい橙色 内　にぶい黄橙	良好	底　部 100%	
2 —	土師器 甕	— (6.6) 10.2	外 縦位ヘラナデ。内 横位ヘラナデ。台部「ハ」の字に開く。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　　やや粗	外　にぶい赤褐 内　にぶい黄褐	良好	台　部 100%	
3 —	土師器 甕	— (4.2) (11.0)	外 斜位丁寧なヘラナデ。内 横位ヘラナデ。台部「ハ」の字に開く。折返有。	砂粒　黒色粒 角閃石 　　密	橙　色 にぶい黄褐色	良好	台　部 20%	
4 —	土師器 甕	— — —	外 斜位丁寧なヘラナデ。内 横位ヘラナデ。台部「ハ」の字に開く。折返有。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 小石　　密	黄橙色 灰黄褐色	良好	台部片	
5 —	土師器 坩	— (10.1) —	外 横位ミガキ。赤彩。内 横・斜位ヘラナデ。胴部球形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　小石　密	外　赤褐色 　　黒褐色 内　にぶい橙色	良好	胴　部 35%	

字状口縁を持つ甕の台部であろう。５は坩の胴部。全面横・斜位のミガキ調整で、内外面に赤彩が施されている。

第８号竪穴住居跡（第17図）

調査地点２の中央よりやや北東、Ｌ・Ｍ－11・12グリッドに位置し、第４号住居跡の西側にある。残存状態が非常に悪く、４つの主柱穴のみの検出である。規模・平面プラン等詳細については全く不明である。柱穴は深さにバラツキがみられるが、ほぼ等間隔に正方形に配置されている。確認面からの深さはＰ１は0.25m、Ｐ２は0.14m、Ｐ３は0.40m、Ｐ４は0.18mである。

出土遺物はみられない。



第17図　第８号竪穴住居跡

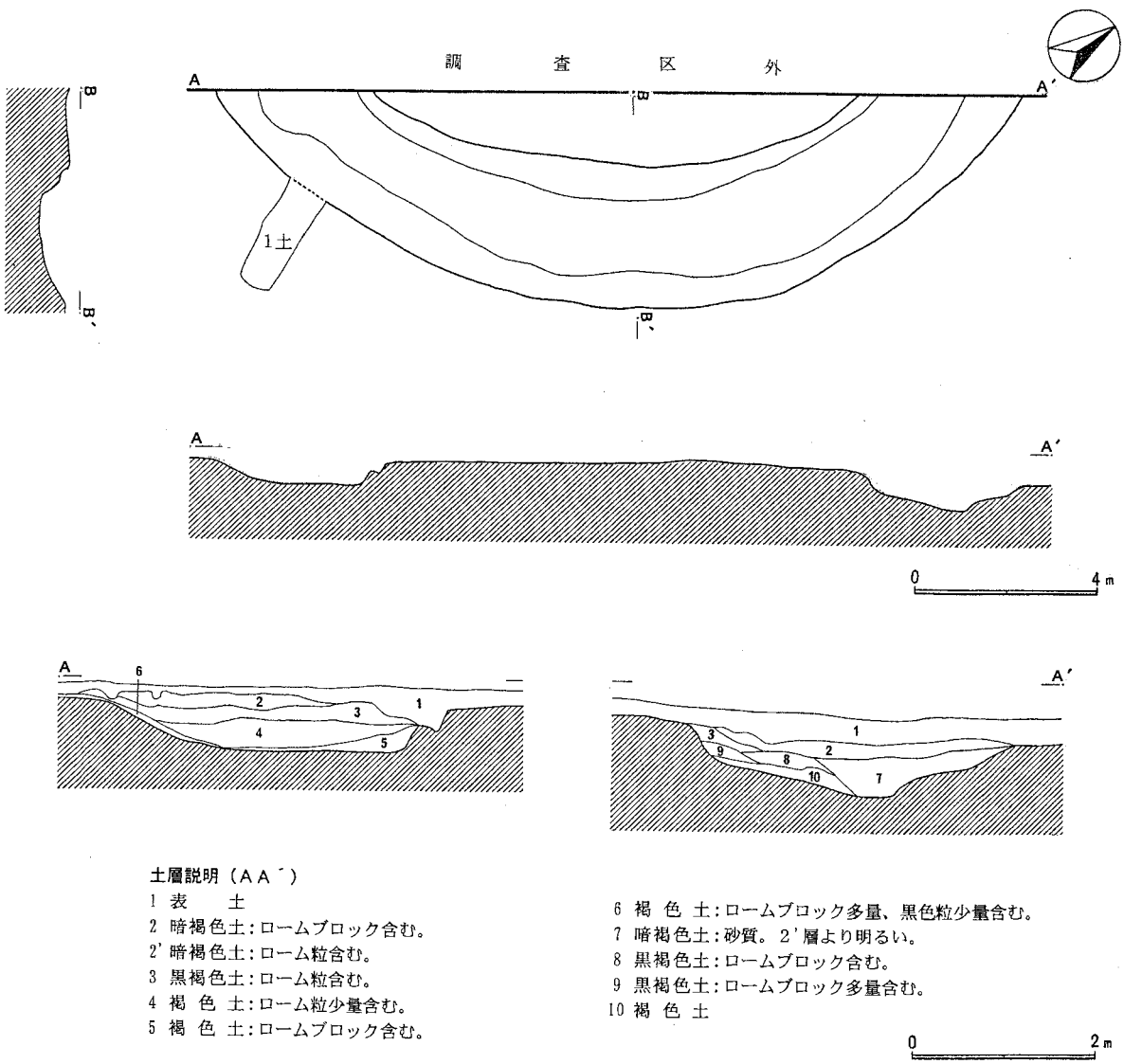
2 古墳時代後期の遺構と遺物

（1） 古 墳

第１号墳（第18図）

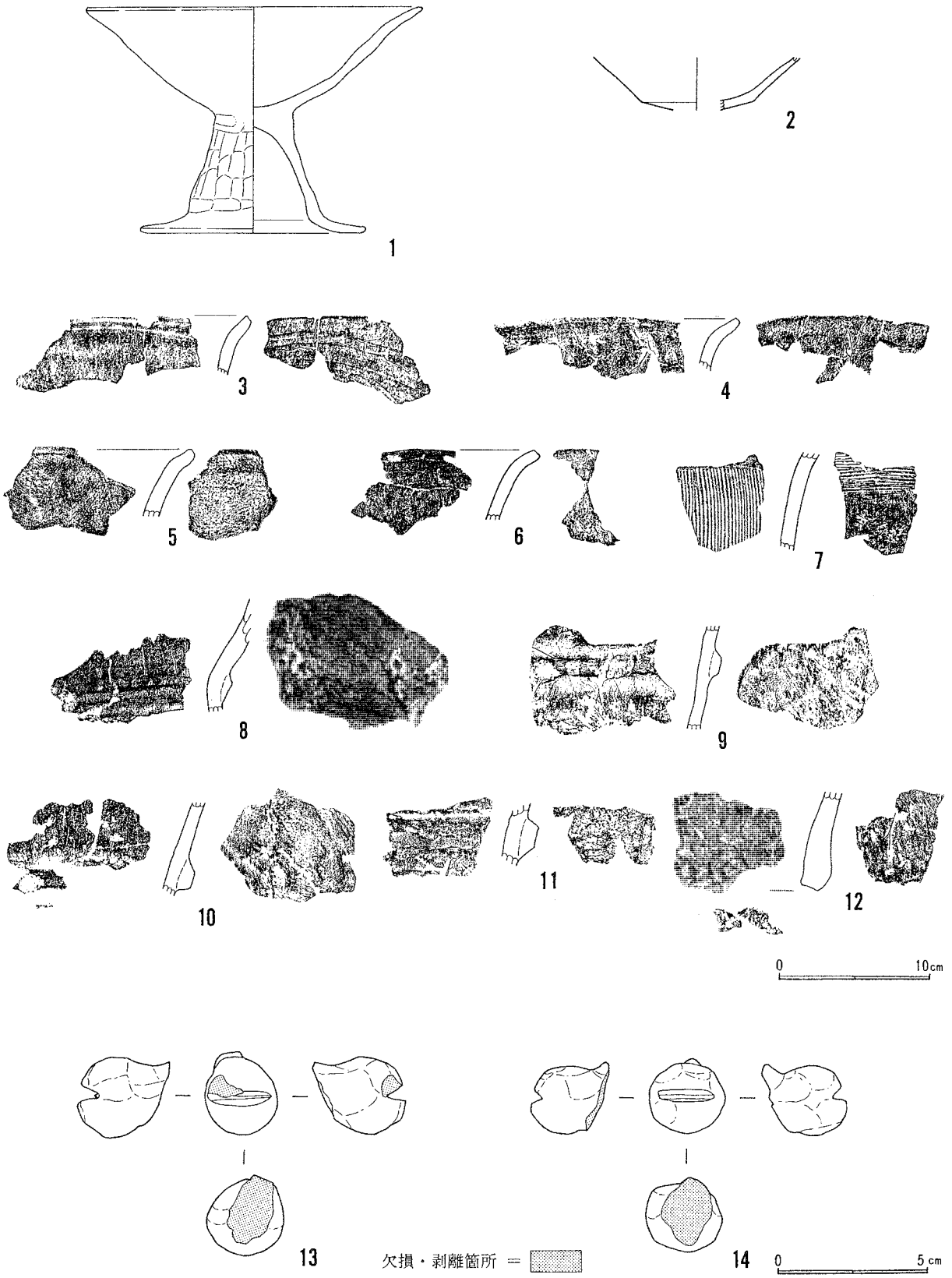
調査地点２の南西隅、Ａ・Ｂ－３～７グリッドに位置し、東側４ｍには２号墳が隣接する。大半が調査区外にあり、検出されたのは東側の周溝部分のみである。周溝南の外側立ち上がりを一部１号土坑に切られている。周溝のまわり具合からみて円墳である。墳丘は確認面段階で既に削平されており、調査区の都合からブリッジの有無や内部主体等については不明である。

周溝は幅2.64～3.40ｍで、確認面からの深さは0.50m前後である。周溝外側の立ち上がりは緩やかな傾斜で掘り込まれているが、内側は外側に比べてやや急である。底面はほぼ平坦である。正確な規模は不明であるが、確認面で周溝内側が調査区沿いに10.8mあることから、墳丘部の推定径はそれ以上になろう。周溝の覆土は総じてローム粒やロームブロックを含んでいる。自然堆積層。

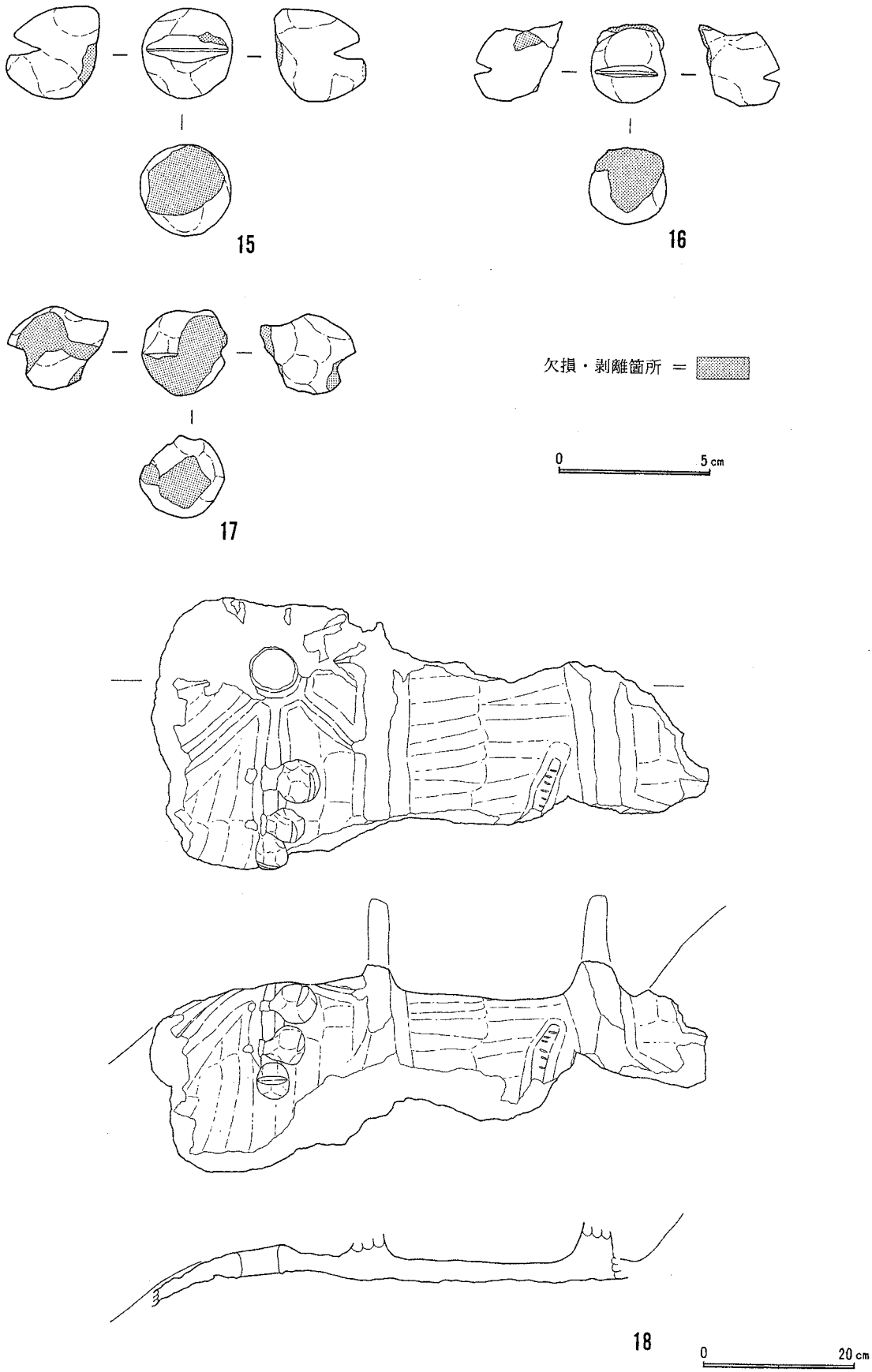


土層説明（ＡＡ′）
1 表　　土
2 暗褐色土：ロームブロック含む。
2' 暗褐色土：ローム粒含む。
3 黒褐色土：ローム粒含む。
4 褐 色 土：ローム粒少量含む。
5 褐 色 土：ロームブロック含む。
6 褐 色 土：ロームブロック多量、黒色粒少量含む。
7 暗褐色土：砂質。2'層より明るい。
8 黒褐色土：ロームブロック含む。
9 黒褐色土：ロームブロック多量含む。
10 褐 色 土

第18図　第１号墳



第19図　第１号墳出土遺物（1）



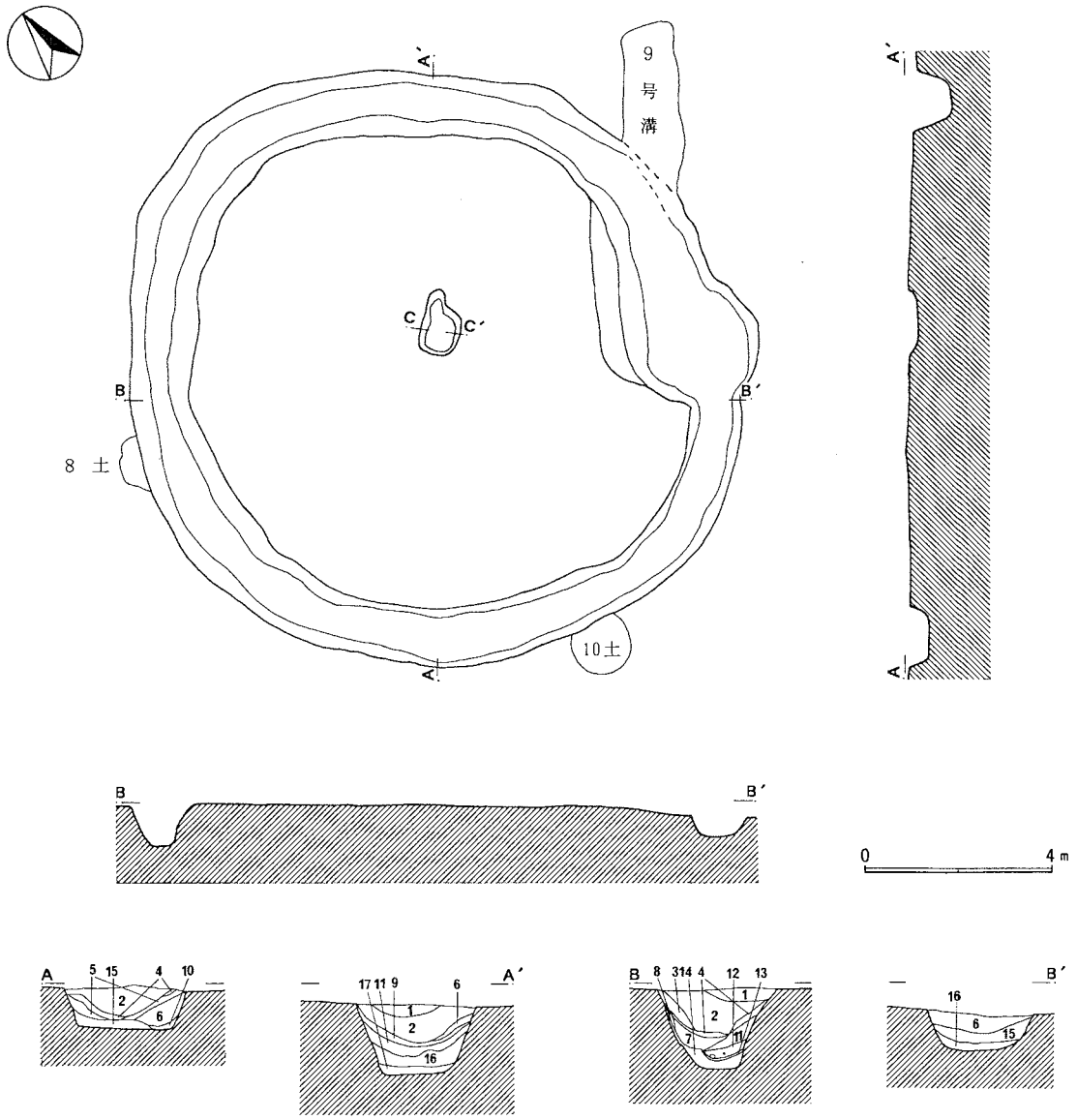
第20図　第１号墳出土遺物 (2)

第11表　第１号墳出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 23	土師器 高　坏	(22.8) (15.3) 15.2	外 口縁・裾横ナデ、坏横ヘラナデ、脚縦・横ヘラナデ。内 口縁・裾横ナデ、脚横ヘラナデ。口縁やや外反する。坏稜無。脚膨らむ。裾ほぼ平坦。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　密	外　明赤褐色 橙　色 内　橙　色	良好	口　5% 坏20% 脚90% 裾95%	
2 —	土師器 高　坏	— (3.6) —	内外ともに口縁部横ナデ。口縁部直線的。坏部稜有。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　密	明赤褐色	良好	坏　部 35%	
3 25・26	朝顔形 円筒 埴輪	— — —	外 縦位ヘラナデ。内 横位ヘラナデ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒 やや粗	明赤褐色	良好	口縁部片	
4 25・26	朝顔形 円筒 埴輪	— — —	外 縦位ヘラナデ。内 横位ヘラナデ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	明赤褐色 にぶい赤褐	良好	口縁部片	
5 25・26	朝顔形 円筒 埴輪	— — —	外 縦位ヘラナデ。内 横位ヘラナデ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 長石　粗	橙　色	良好	口縁部片	
6 25・26	朝顔形 円筒 埴輪	— — —	外 縦位ヘラナデ。内 横位ヘラナデ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　密	橙　色	良好	口縁部片	
7 25・26	円　筒 埴　輪	— — —	外 縦位ハケメ。内 横位ハケメ、ヘラナデ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　小石　密	外 橙　色 内 赤褐色	良好	口縁部片	
8 25・26	朝顔形 円筒 埴輪	— — —	外 縦位ヘラナデ。内 斜位ヘラナデ。	白色粒　黒色粒 石英　長石 粗	橙　色	良好	胴部片	
9 25・26	朝顔形 円筒 埴輪	— — —	外 縦位ヘラナデ。内 横位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 雲母　粗	明赤褐色	良好	胴部片	
10 25・26	朝顔形 円筒 埴輪	— — —	外 縦位ヘラナデ。内 横位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　やや粗	橙　色	普通	胴部片	
11 25・26	朝顔形 円筒 埴輪	— — —	突帯部。内 横位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　粗	橙　色	良好	胴部片	
12 25・26	朝顔形 円筒 埴輪	— — —	内外ともに縦位ヘラナデ。底面刻目有。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 粗	橙　色	良好	基底部片	

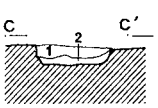
第12表　第１号墳出土形象埴輪観察表

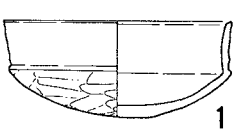
№	種　別	最大長 (cm)	最大幅(cm)	最大厚 (cm)	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
13 43	形象埴輪 土鈴	2.6	2.3	2.8	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	橙　色	良好	—	№13・15～20 同一個体
14 43	形象埴輪 土鈴	2.4	2.6	2.2	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　密	橙　色	良好	—	№13・14・16～ 20同一個体
15 43	形象埴輪 土鈴	3.1	3.0	2.9	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	橙　色	良好	—	№13～15・17～ 20同一個体
16 43	形象埴輪 土鈴	2.5	2.4	2.3	砂粒　黒色粒 密	橙　色	良好	—	№13～17・19～ 20同一個体
17 43	形象埴輪 土鈴	2.8	—	2.6	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 密	橙　色	良好	—	№13～18・20同 一個体
18 43	形象埴輪 馬形	—	—	—	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　密	橙　色	良好	背中部分	№13～19同一個 体

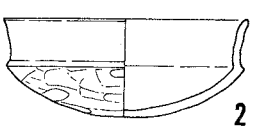


土層説明（ＡＡ´ＢＢ´）

1 褐 色 土：ローム粒含む。
2 黒褐色土：ローム粒含む。
3 褐 色 土：ロームブロック含む。
4 黒褐色土：粘土ブロック含む。
5 褐 色 土：ローム粒多量含む。
6 暗褐色土：ローム粒含む。
7 暗褐色土：ロームブロック・黒色土含む。
8 褐 色 土：ロームブロック多量含む。
9 暗褐色土：粘土ブロック含む。
10 褐 色 土：ロームブロック含む。
11 褐 色 土：ローム粒・ロームブロック含む。
12 黒褐色土：ローム粒・ロームブロック含む。
13 黒 色 土
14 灰褐色土：黄褐色土・灰褐色土・黒色土をブロック状に含む。
15 暗褐色土：ロームブロック含む。
16 黒褐色土：ロームブロック含む。
17 黄褐色土







土層説明（ＣＣ´）

1 暗褐色土：ローム粒含む。
2 暗褐色土：ロームブロック含む。

第21図　第２号墳・出土遺物

出土遺物は土器と埴輪があり、埴輪には円筒埴輪と形象埴輪がみられる。円筒埴輪は朝顔形が多く検出されている。また形象埴輪は唯一の検出例である。これらの出土遺物のほとんどが破片である。

第19図１・２は土師器・高坏。１は器高低く、坏部に稜をもたない。また脚部がやや短く、幅広である。２は坏部のみであるが、稜を有しており、古墳時代中期によくみられるタイプのものである。流れ込みの可能性がある。３～12は円筒埴輪・破片。概して明赤褐色、ないし橙色をしており、胎土は密なものと粗雑なものの２者がみられる。朝顔形がほとんどである。３～７は口縁部片。３～６は内外面ともにヘラナデ整形で口縁部が外反している。７はハケメ整形で外面は縦位、内面は横位に施されている。８～11は胴部片。いずれの破片もヘラナデ整形で、断面が台形状をした突帯を有している。８は口縁部直下に相当するもので、急激な外反が認められる。12は基底部片。内外ともにナデ整形で、底面には刻目がみられる。13・14・第20図15～17は馬形埴輪の一部。馬具の杏葉であろう。計５つが検出された。いずれも直径2.5～3.0cmで、表面には横方向の刻みがみられる。18と同一個体であるが接合関係はみられない。18は形象埴輪・馬の背中部分で鞍、雲珠、杏葉等がみられる。

第２号墳（第21図）

調査地点２の南西、Ｃ～Ｆ－３～６グリッドに位置する。西側４ｍには１号墳が隣接している。本古墳は全形を検出できたが墳丘は削平されており、周溝西の外側は８号土坑、南の外側は10号土坑、北東部は９号溝跡にそれぞれ切られている。周溝が全周する円墳であり、ブリッジはみられない。

確認面での墳丘部規模は、周溝内側の立ち上がりで直径10.56～10.96mである。周溝は幅1.16～1.76mであり、確認面からの深さは北・西側が0.80m前後、南・東側が0.40m前後で北西部の方が深い。逆台形状に掘り込まれ、底面は平坦である。本古墳は周溝を含めると直径は、13.20～14.40mになる。なお、周溝東側中央部分は土坑状にやや膨らんでいる。幅は2.88mである。覆土は総じてローム粒、ロームブロックを含む自然堆積層であるが、東西北の周溝からは中層に粘土ブロックを含む層が確認されている。墳丘は確認面段階で既に削平されていたが、墳丘部中央からは不整円形状の掘り込みが検出された。長軸1.48m、短軸0.84m、確認面からの深さは0.22mである。位置的にみて主体部にあたることから本古墳のものとした。

出土遺物は非常に少なく、図示可能な遺物は土師器・坏の２点のみである。埴輪はみられなかった。

第21図１・２は南側周溝内の底面からやや浮いたレベルで検出された。いずれも坏部に稜を有し、丸底の典型的な古墳時代後期の坏である。１のみ完形品。

第13表　第２号墳出土遺物観察表

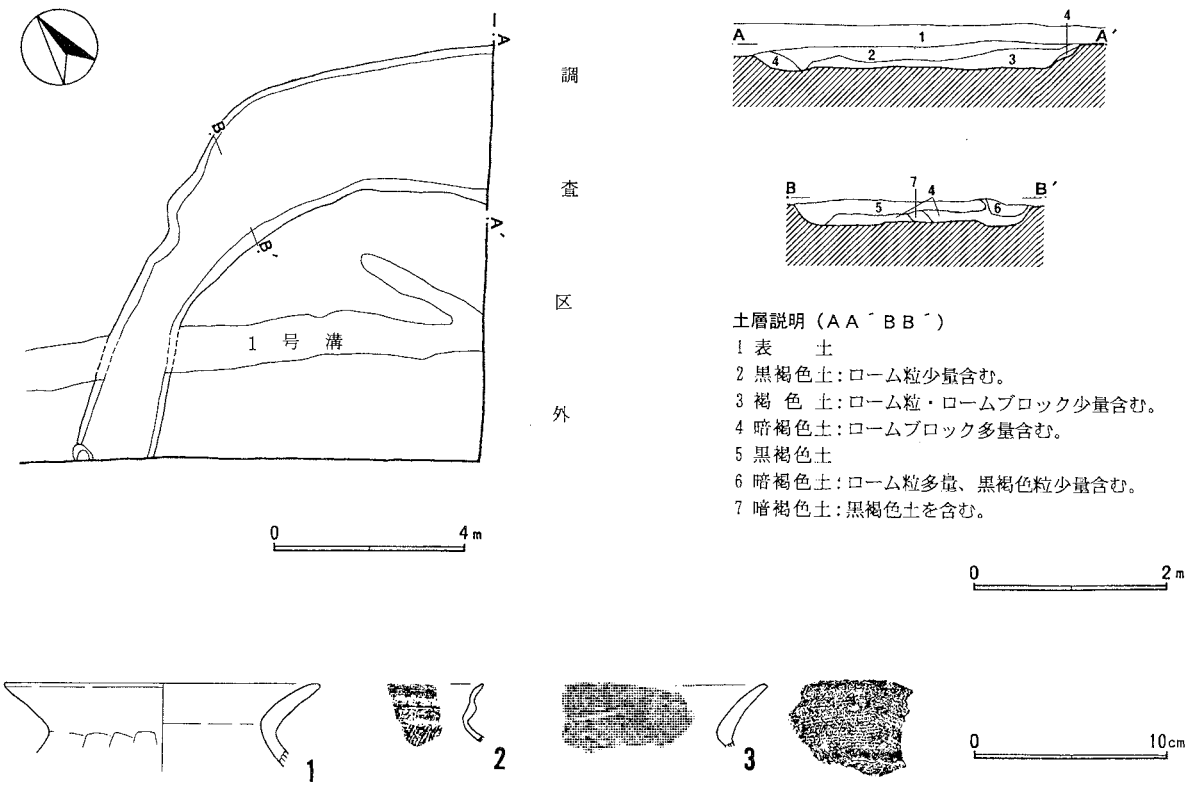
挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 23	土師器 坏	12.0 (5.2) －	外 口縁部横ナデ。底部横・斜位ヘラ削り。 内 横ナデ、ナデ。口縁部直立する。底部丸底。	白色粒　黒色粒 赤色粒　角閃石 密	橙　色	良好	完　形	
2 23	土師器 坏	(12.8) (5.3) －	外 口縁部横ナデ。底部横・斜位ヘラ削り。 内 横ナデ、ナデ。口縁部やや外反する。坏部稜有。底部丸底。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　密	明赤褐色	良好	口 45% 底 70%	

第３号墳（第22図）

調査地点２の南東端、Ｍ～Ｐ－１～３グリッドに位置し、北側１ｍには４号墳が隣接している。本古墳も墳丘が削平されている。周溝北側部分のみの検出であり、大半が調査区外にある。また、東西に走る１号溝により墳丘部、及び周溝の北西部が一部切られている。周溝のまわり具合からみて円墳と思われる。ブリッジの有無や内部主体等については不明である。

規模は調査区の関係上不明であるが、隣接する４号墳よりは圧倒的に大きい。周溝は総じて幅広であるが、西側と東側で幅に違いがみられる。西側は1.28mで狭く、東側は3.40mと広い。確認面からの深さはともに0.12m前後である。立ち上がりは内・外側とも緩やかな傾斜で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。覆土は他の古墳同様、ローム粒・ロームブロックを含む自然堆積層である。

出土遺物は少なく図示可能な遺物は３点のみである。いずれも土師器・甕。埴輪はみられなかった。第22図１・３は口縁部が「く」の字状、２は「Ｓ」字状を呈している。２・３は古墳時代前期の土



第22図　第３号墳・出土遺物

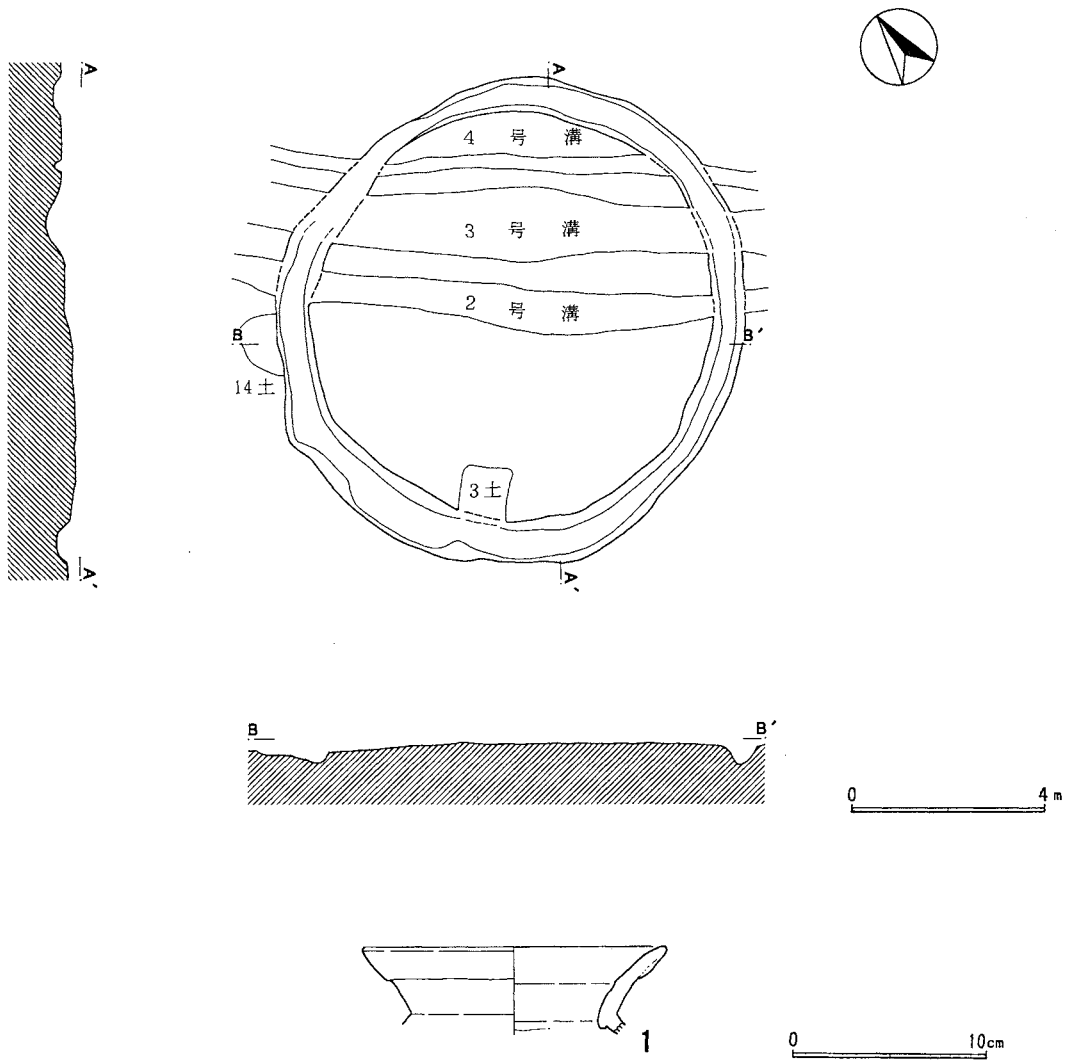
第14表　第３号墳出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 23	土師器 甕	(15.8) (4.4) －	外 口縁部横ナデ。胴部縦位ヘラ削り。 内 口縁部横ナデ。胴部横位ヘラナデ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　やや粗	外　にぶい橙 褐灰色 内　橙　色	良好	口縁部 20%	
2 －	土師器 甕	－ － －	外 口縁部横ナデ。胴部斜位ハケメ。 内 口縁部横ナデ。胴部横位ヘラナデ。口縁部「Ｓ」字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 密	外　にぶい橙 褐灰色 内　にぶい褐	良好	口縁部片	
3 －	土師器 甕	－ － －	外 口縁部斜位ハケメ。内 口縁部横位ハケメ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　やや粗	外　明赤褐色 内　にぶい橙 褐灰色	良好	口縁部片	

器で流れ込みである。

第４号墳（第23図）

調査地点２の南東、Ｌ～Ｎ－２～４グリッドに位置し、３号墳と６号墳の間に挟まれている。本古墳も墳丘は削平されており、また北側半分を東西に走る２～４号溝跡、周溝西の外側を14号土坑、南の内側を３号土坑により切られている。周溝が全周する円墳であり、ブリッジや内部主体はみられない。確認面での墳丘部規模は、周溝内側の立ち上がりで直径8.60～8.88mのほぼ正円形である。周溝は幅0.40～1.24mであり、確認面からの深さは0.16～0.36mである。周溝は逆台形状に掘り込まれている部



第23図　第４号墳・出土遺物

第15表　第４号墳出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 23	土師器 壺	(16.2) (4.6) —	内外ともに横ナデ。折り返し口縁。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　石英　密	外　にぶい赤褐 内　明赤褐色 灰褐色	良好	口縁部 20%	

分と、擂り鉢状に掘り込まれている部分があり、前者の底面は平坦である。本古墳は周溝を含めると直径は、9.68～10.52mになるが、他の古墳に比べると非常に小さい。

出土遺物は非常に少なく、図示可能な遺物は１点のみである。埴輪はみられなかった。

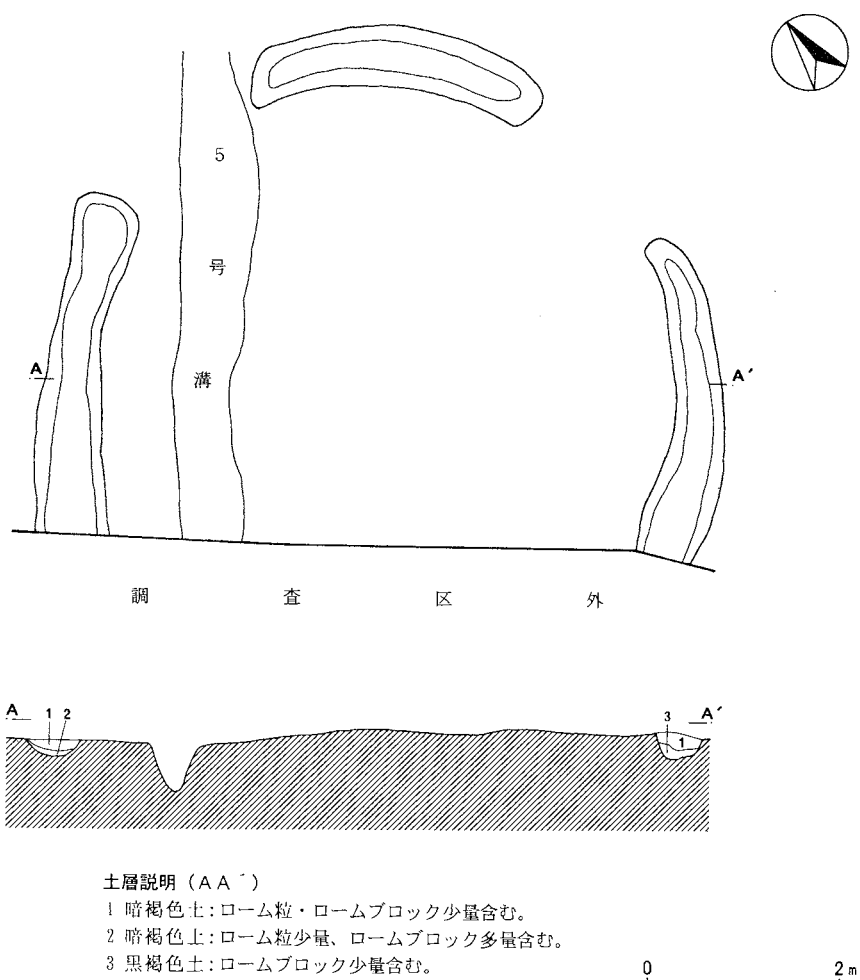
第23図１は土師器・壺の口縁部片。折り返し口縁を有する。古墳時代前期のもので流れ込みである。

第５号墳（第24図）

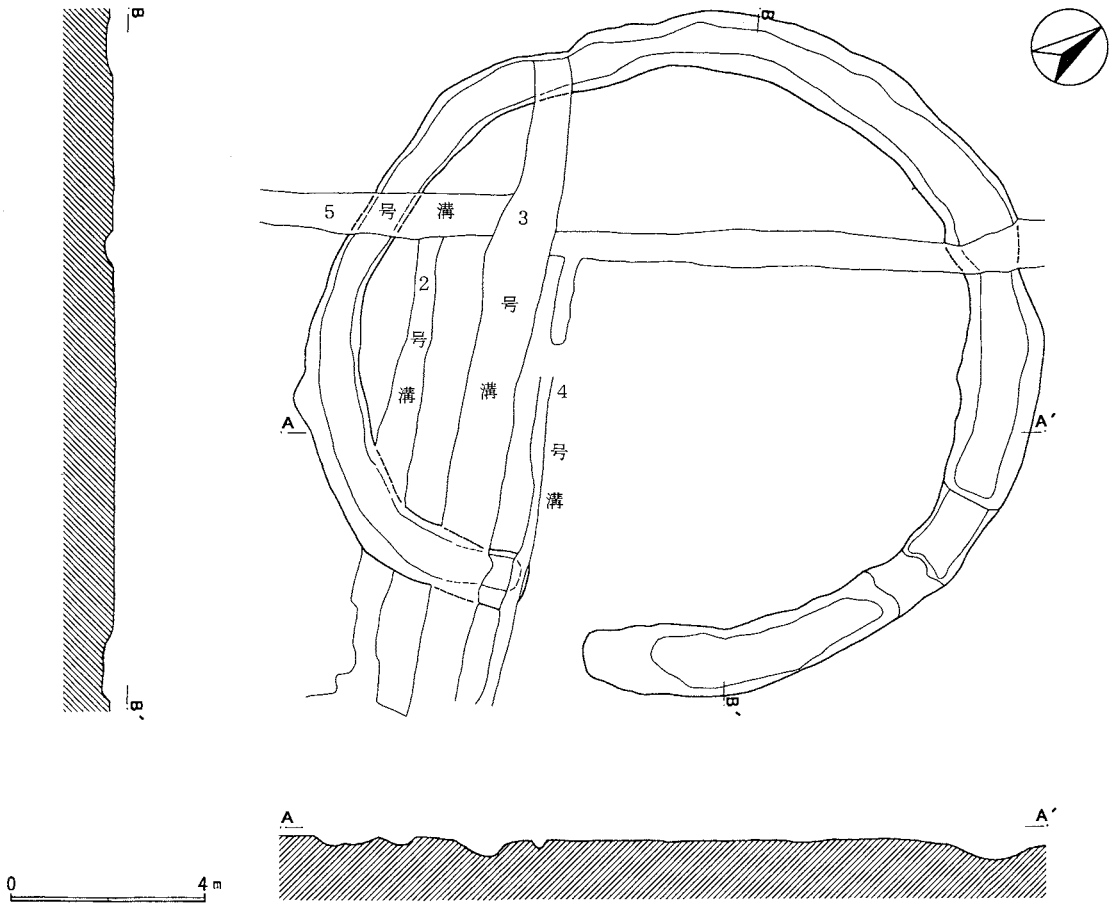
調査地点２の南端中央、Ｉ・Ｊ－１・２グリッドに位置し、北側1.5mには６号墳が隣接している。墳丘は削平されており、北側３分の２が検出された。残りの３分の１は調査区外にある。また、墳丘部西側は南西方向から北東方向へ走る５号溝に切られている。本古墳は円墳であり、ブリッジが北側と東側の２箇所にみられる。ブリッジ間はともに直線距離で1.84mある。内部主体はみられない。

確認面での墳丘規模は、周溝内側の立ち上がりで直径6.10mである。周溝は幅0.48～0.72mであり、確認面からの深さは0.20m前後である。台形状に掘り込まれた部分と船底状に掘り込まれた部分がみられる。周溝を含めると直径7.32mになる。覆土はローム粒・ロームブロックを含む自然堆積層である。

遺物はごく微量検出されたが、図示可能なものはみられない。



第24図　第５号墳



第25図　第６号墳

第６号墳（第25図）

調査地点２の中央よりやや南、Ｈ～Ｌ－３～６グリッドに位置し、４・５号墳と北東に位置する７号墳に挟まれている。墳丘は削平されており、南西部を２～４号溝跡に、北側を５号溝に切られている。円墳であり、南側にブリッジを持つ円墳である。内部主体はみられない。

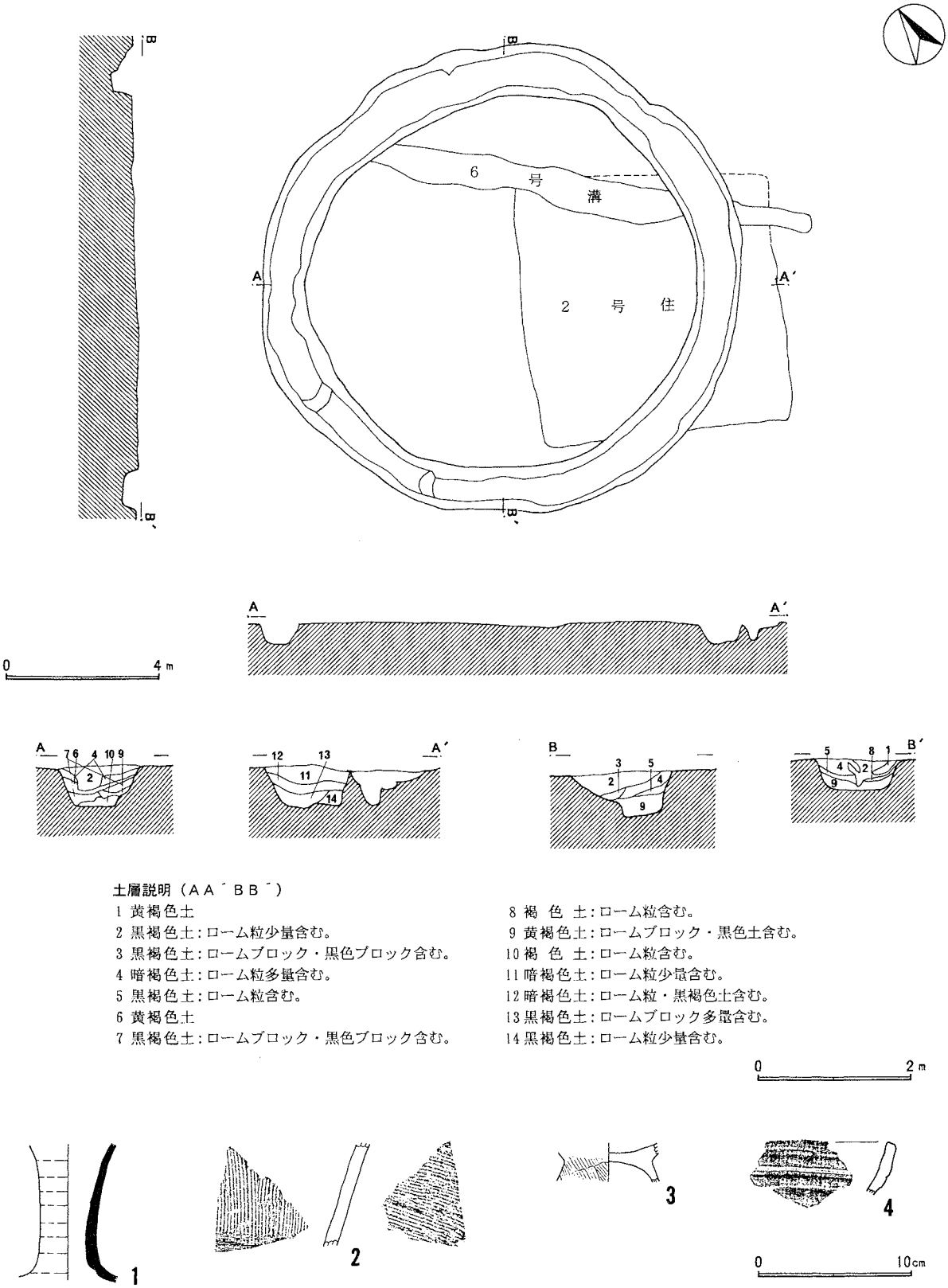
確認面での墳丘部規模は、周溝内側の立ち上がりで直径11.6～12.84mである。周溝は幅0.88～1.72mであり、確認面からの深さは0.20前後と非常に浅い。主に台形状に掘り込まれているが、船底状に掘り込まれた部分もみられる。本古墳は周溝を含めると直径14.72～16.12mになる。

ブリッジは周溝南側に設けられており、ブリッジを南とした場合の方位はN－33°－Wである。ブリッジ上面の幅は1.60mである。

遺物はごく微量検出されたが、図示可能なものはみられない。

第７号墳（第26図）

調査地点２の中央よりやや東、Ｋ～Ｎ－７～10グリッドに位置し、北５mには８号墳、西3.5mには６号墳が隣接している。墳丘は削平されており、東側は６号溝跡に切られている。また、南側では２号住居跡を切っている。周溝が全周する円墳であり、ブリッジや内部主体はみられない。



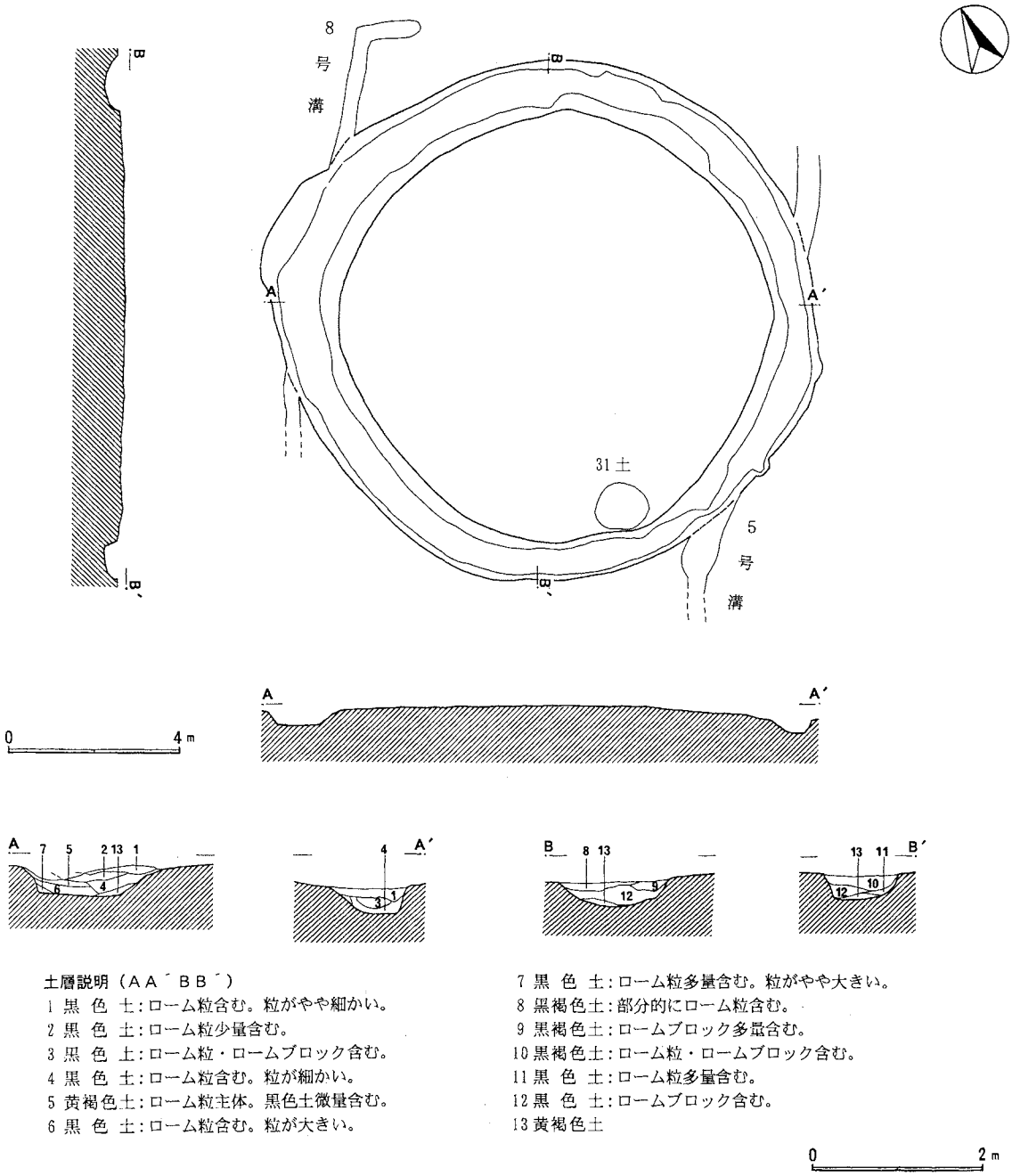
土層説明（ＡＡ´ＢＢ´）

1 黄褐色土
2 黒褐色土：ローム粒少量含む。
3 黒褐色土：ロームブロック・黒色ブロック含む。
4 暗褐色土：ローム粒多量含む。
5 黒褐色土：ローム粒含む。
6 黄褐色土
7 黒褐色土：ロームブロック・黒色ブロック含む。
8 褐 色 土：ローム粒含む。
9 黄褐色土：ロームブロック・黒色土含む。
10 褐 色 土：ローム粒含む。
11 暗褐色土：ローム粒少量含む。
12 暗褐色土：ローム粒・黒褐色土含む。
13 黒褐色土：ロームブロック多量含む。
14 黒褐色土：ローム粒少量含む。

第26図　第７号墳・出土遺物

第16表　第７号墳出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 23	須恵器 長頸瓶	－ (9.2) －	内外ともに回転ナデ。外面釉有。頸部ほぼ直線的。	白色粒　黒色粒 密	外　灰 ｵﾘｰﾌﾞ黒 暗 ｵﾘｰﾌﾞ色 内　灰白色	良好	頸部 100%	
2 －	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	にぶい褐色	良好	胴部片	
3 －	土師器 甕	－ (2.6) －	外 斜位ハケメ。内 横・斜位ヘラナデ。台付。	砂粒　白色粒 黒色粒 密	外　にぶい褐色 灰黄褐色 内　褐灰色	普通	接合部 100%	
4 －	内耳 土器	－ － －	内外ともに回転ナデ。口縁部内湾する。	白色粒　黒色粒 石英 密	外　ｵﾘｰﾌﾞ黒色 内　灰　色	良好	口縁部片	



土層説明（ＡＡ′ＢＢ′）

1 黒　色　土：ローム粒含む。粒がやや細かい。
2 黒　色　土：ローム粒少量含む。
3 黒　色　土：ローム粒・ロームブロック含む。
4 黒　色　土：ローム粒含む。粒が細かい。
5 黄褐色土：ローム粒主体。黒色土微量含む。
6 黒　色　土：ローム粒含む。粒が大きい。
7 黒　色　土：ローム粒多量含む。粒がやや大きい。
8 黒褐色土：部分的にローム粒含む。
9 黒褐色土：ロームブロック多量含む。
10 黒褐色土：ローム粒・ロームブロック含む。
11 黒　色　土：ローム粒多量含む。
12 黒　色　土：ロームブロック含む。
13 黄褐色土

第27図　第８号墳

確認面での墳丘規模は、周溝内側の立ち上がりで直径9.76～10.52mである。周溝は幅1.12～1.68mであり、確認面からの深さは0.20～0.30mである。ほぼ台形状に掘り込まれており、周溝を含めると直径12.64～13.12mになる。覆土はやはりローム粒・ロームブロックを含む自然堆積層である。

出土遺物は少なく、図示可能なものは４点のみである。土器を主体とするもののすべて流れ込みであり、古墳に伴う遺物は円筒埴輪１点のみである。いずれも破片。

第26図１は須恵器・長頸瓶の頸部。外面には緑色の自然釉が付着している。２は円筒埴輪の口縁部に近い胴部片。内外ともにハケメ整形である。３は台付甕の接合部。４は中世の内耳土器の口縁部片。

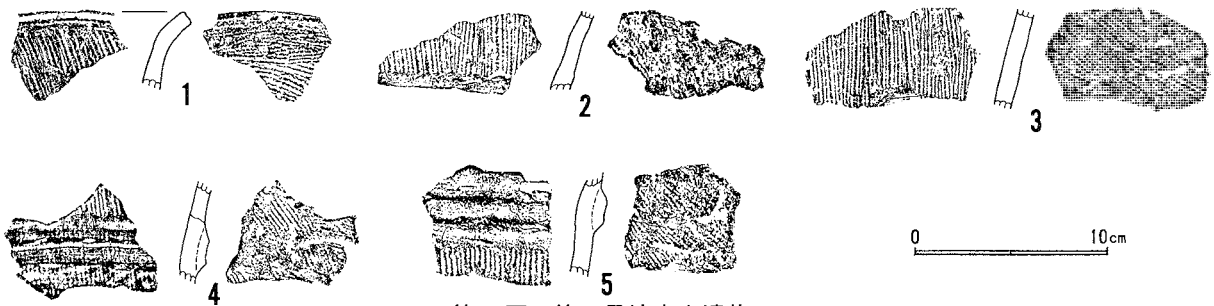
第８号墳（第27図）

調査地点２のほぼ中央、Ｇ～Ｊ－９～12グリッドに位置し、北２ｍには11号墳、東２ｍには10号墳が隣接している。墳丘は削平されており、周溝北側は８号溝跡、南側は５号溝跡、墳丘部南は31号土坑にそれぞれ切られている。周溝が全周する円墳であり、ブリッジや内部主体はみられない。

確認面での墳丘規模は、周溝内側の立ち上がりで直径9.78～10.40mである。周溝は幅0.78～2.06mと差がみられるが、平均的には1.30m前後である。確認面からの深さは0.28～0.30mで、逆台形状に掘り込まれている。周溝を含めると直径12.36～13.20mになる。覆土はローム粒・ロームブロックを含む自然堆積層である。

出土遺物は非常に少なく、円筒埴輪の破片が少量検出されたのみである。

第28図１・２は口縁部片、３～５は胴部片で、いずれも内外ともにハケメ整形である。胎土はやや粗雑で、赤褐色、ないし橙色のものが多い。４・５にはややM字状を呈する突帯が付されている。



第28図　第８号墳出土遺物

第17表　第８号墳出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 27・28	円筒 埴輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	にぶい褐色	普通	口縁部片	
2 27・28	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。口縁部直線的。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 やや粗	にぶい赤褐	良好	口縁部片	
3 27・28	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 角閃石　小石 密	にぶい橙色	良好	胴部片	
4 27・28	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。突帯低く、丸み帯びる。	砂粒　白色粒 小石 やや粗	明赤褐色	良好	胴部片	
5 27・28	円筒 埴輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 斜位ハケメ。突帯低く、丸み帯びる。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　やや粗	橙　色	良好	胴部片	

第９号墳（第29図）

調査地点２の北東端、Ｍ～Ｑ－13～15グリッドに位置する。北側には10号墳が隣接している。墳丘は削平されており、大半が調査区外にあるため全形は不明であるが、２つの周溝が同心円状に巡っているのが確認された。ブリッジの有無は定かではないが、内部主体はみられない。

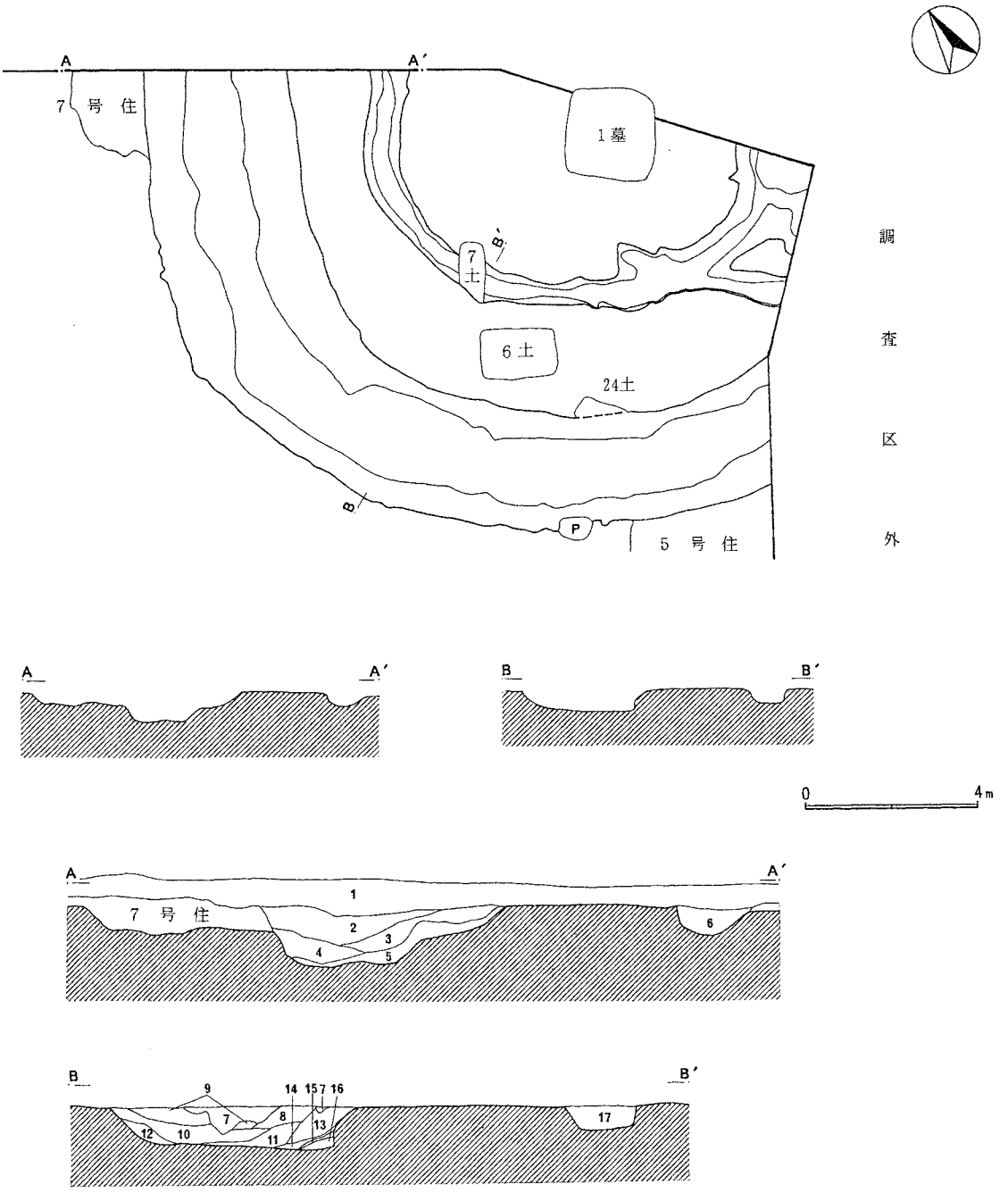
外側の周溝（外周溝）は、幅2.52～3.88m、確認面からの深さ0.52～0.68mで、幅広で緩やかな立ち上がりを有し、底面はほぼ平坦である。一方、内側の周溝（内周溝）は幅0.24～0.93m、確認面からの深さは0.30m前後で、幅が狭く台形状を呈している。両者が同心円状に位置し、溝の形態や隣接する10号墳にも同じ状況がみられたこと等から１基の古墳と判断した。両者に同時性が認められるかどうかは、周溝内覆土を観察したが新旧関係はつかめなかった。確認面での内周溝内墳丘規模は直径8.00m前後になり、周溝を含めると直径9.20m程になろう。内周溝と外周溝の間は1.56～2.60mあるが、2.00m前後が平均的な幅である。外周溝、及び内外周溝間の幅等を含めると本古墳の規模は直径20m程になろう。なお、外周溝は南西部で５号住、北西部では７号住を切っており、南西部の内側立ち上がりを24号土坑に切られている。内外周溝間には６号土坑がみられ、内周溝は西側で７号土坑、東側で近世の墓壙に切られている。また、調査区外南東方向へ延びる溝もみられたが、調査区の都合上、詳細については不明である。後世の遺構が重複している可能性も考えられる。

出土遺物は外周溝より多量の円筒埴輪が出土しており、土器も若干ではあるが検出されている。本古墳に伴う土器は坏のみであり、この他には古墳時代前期の土師器・坩、弥生時代中期の甕が検出されている。内周溝からの検出例は少なく、古墳時代前期の土師器・器台以外は円筒埴輪が少量検出されている。埴輪は胎土がさまざまで色調は主に橙色、ないし赤褐色である。内外ともにハケメ整形のものが主体となる。また、朝顔形と考えられるものもみられる。

第30図１～23、第31図24～34、第32図35～57は外周溝出土遺物。第30図１・２は土師器・坏。外周溝で唯一本古墳に伴う土器である。１は完形品。３～６は古墳時代前期の土器。５・７号住からの流れ込みであろう。７は弥生時代中期後半の甕・口縁部片である。

第30図９～23、第31図24～34、第32図35～57は円筒埴輪。胎土は密なものとやや粗雑なものがほぼ同じ割合でみられる。38以外はすべて外面にハケメ整形が施され、内面はハケメ調整とヘラナデ調整の２者がみられる。９～23は口縁部片。９と11の内面にはヘラによる線刻がみられる。９・10は朝顔形の可能性がある。24は胴～基底部まで残存する。本古墳出土遺物中、最も残りの良い円筒埴輪である。胴部中段にある透かし孔は対面に２箇所設けられている。底面には刻目がみられる。25～52は胴部片。24も含めて39までには突帯がみられる。断面形が台形状を呈するものとややM字状を呈するものの２者がみられるが、前者の方が多い。25・26・28・35・36・39・50には透かし孔がみられる。53～57は基底部片。いずれの底面にも刻目が施されている。

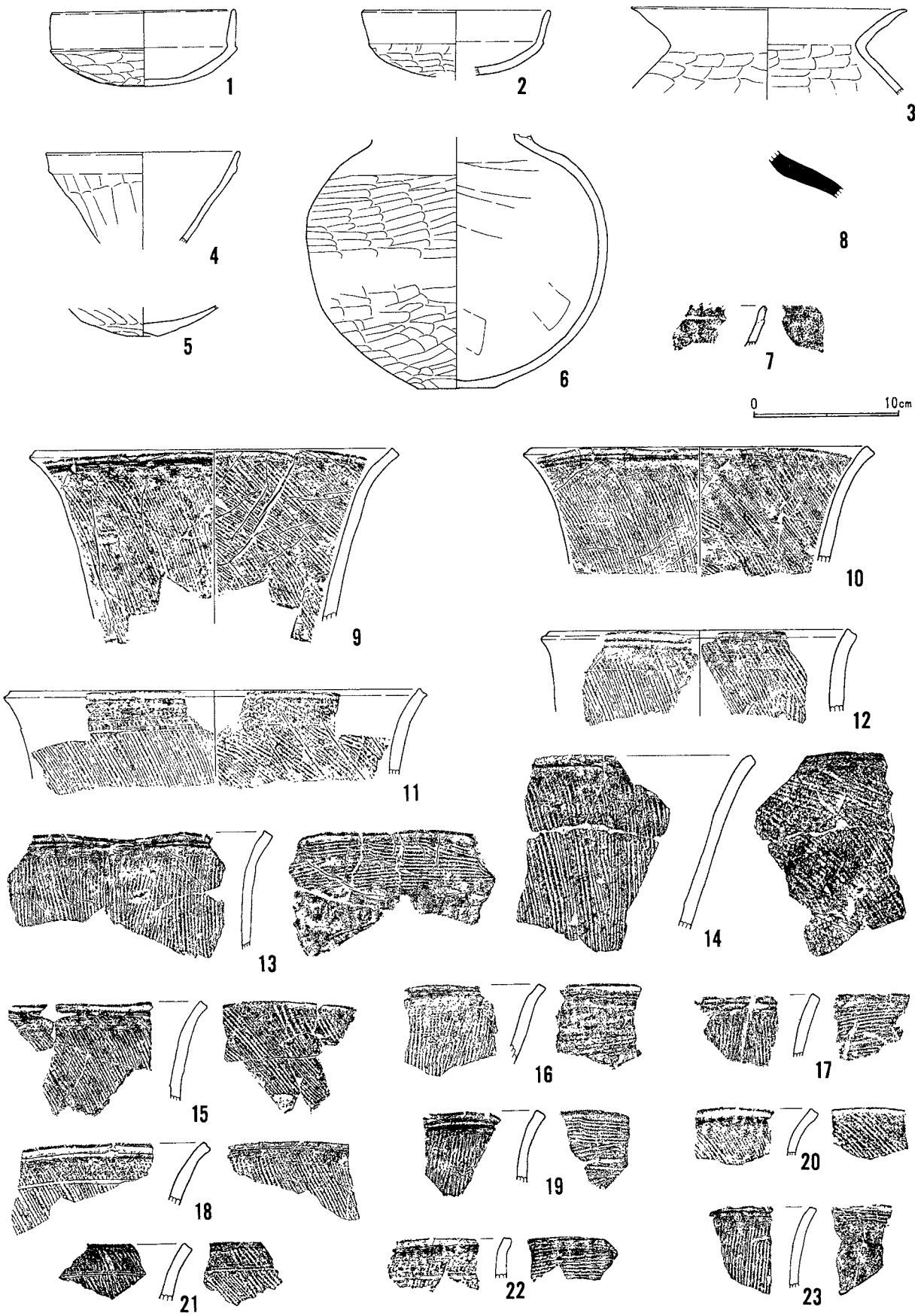
第33図１～８は内周溝出土の遺物である。１は土師器・器台の接合部片。古墳時代前期のもので流れ込みである。２～８は円筒埴輪。外面はすべてハケメ整形であるが、内面整形はハケメとヘラナデの２者がある。胎土はやや粗雑なものが多い。２は口縁部片、３～７は胴部片である。３の外面にはヘラによる線刻がみられる。５～７には突帯があり、すべて台形状を呈する。８は基底部片。底面には刻目がみられる。



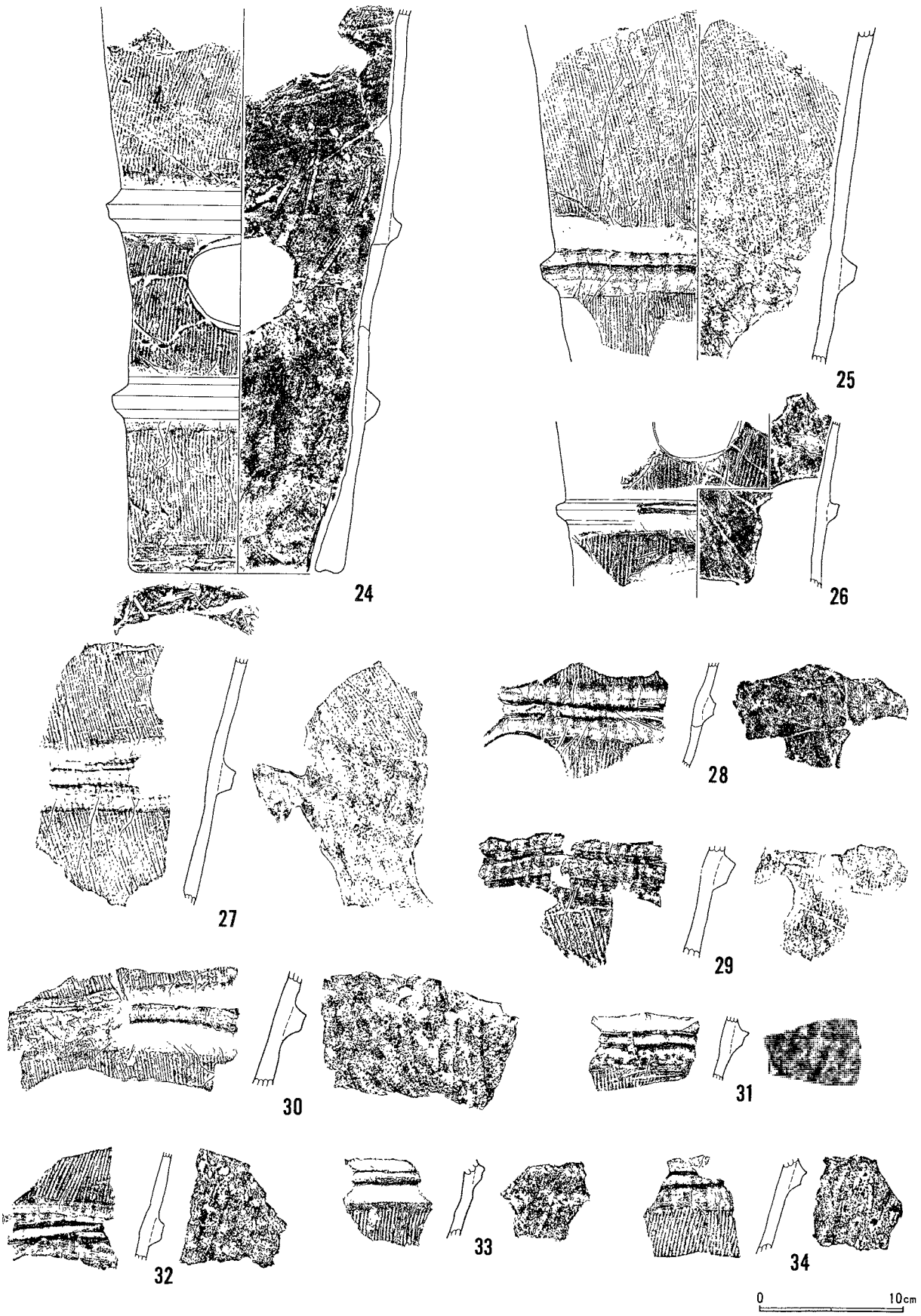
土層説明（ＡＡ′ＢＢ′）

1 表　　土
2 黒 色 土：暗褐色土含む。
3 黒 色 土：ローム粒・暗褐色土含む。
4 黒褐色土：ローム粒含む。
5 褐 色 土：ローム粒含む。
6 黒 色 土：ローム粒・暗褐色土含む。
7 灰褐色土：砂質。
8 褐 色 土：ローム粒含む。
9 黒褐色土：暗褐色土含む。
10 黒 色 土：暗褐色土含む。
11 黒褐色土：ローム粒・焼土粒含む。
12 暗褐色土：褐色土含む。
13 褐 色 土：ローム粒・炭化物・焼土粒含む。
14 暗黄褐色：ロームブロック含む。
15 黒褐色土
16 黄褐色土：ロームブロック多量含む。
17 黒褐色土：ローム粒多量含む。

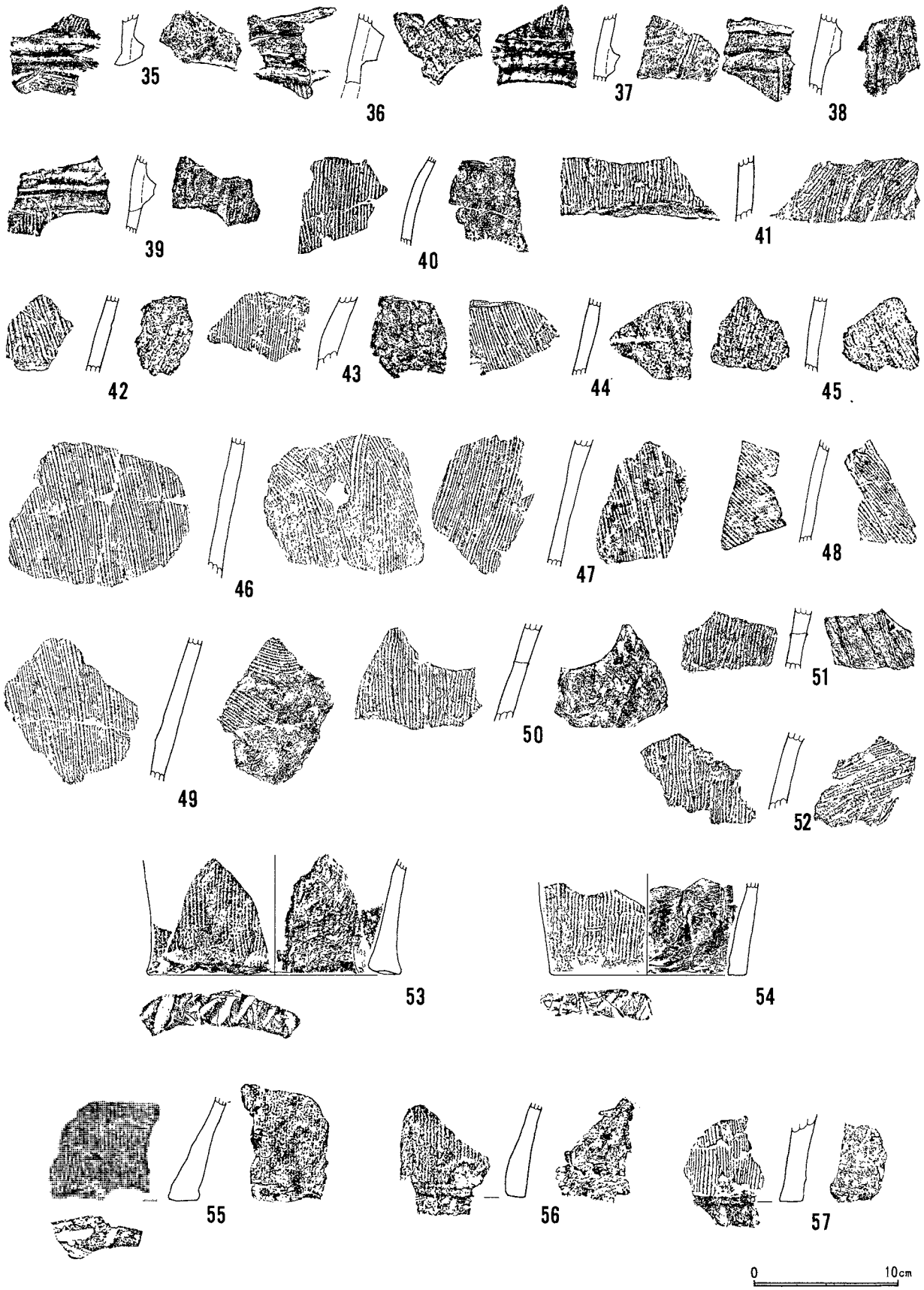
第29図　第９号墳



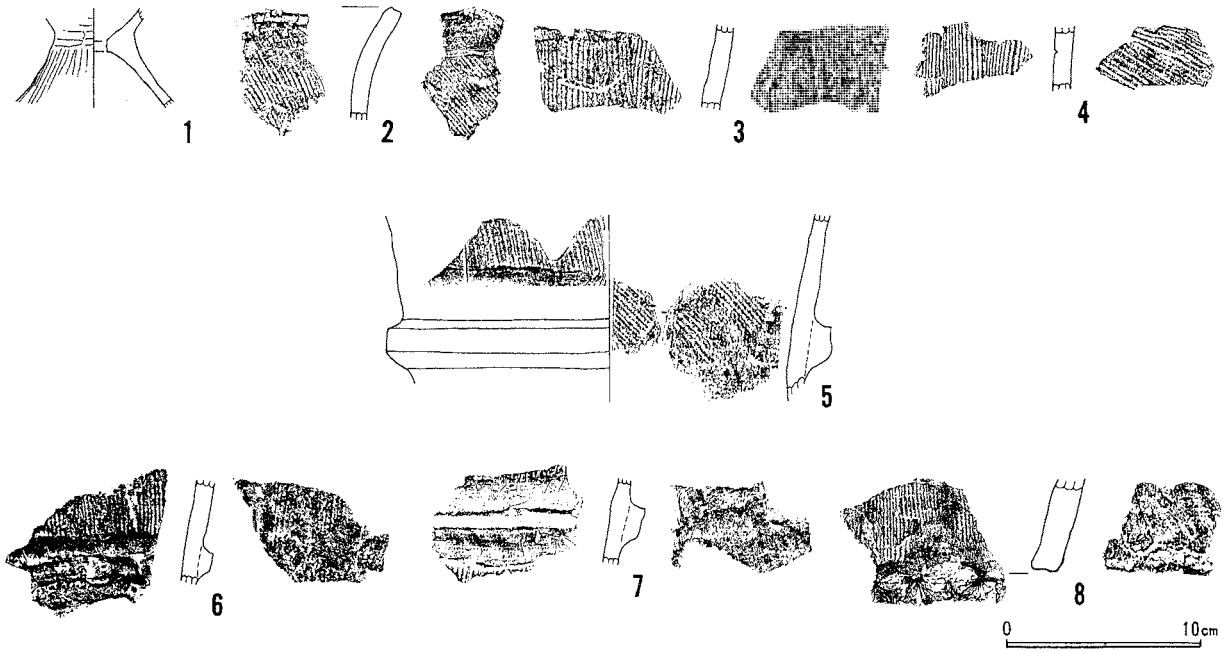
第30図　第９号墳外周溝出土遺物（1）



第31図　第９号墳外周溝出土遺物 (2)



第32図　第９号墳外周溝出土遺物 (3)



第33図　第９号墳内周溝出土遺物

第18表　第９号墳外周溝出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 23	土師器 坏	13.0 (5.3) —	外 口縁部横ナデ。底部横・斜位ヘラ削り。 内 横ナデ、ナデ。口縁部直立する。底部丸底。	砂粒　黒色粒 密	赤　色	良好	完　形	
2 23	土師器 坏	(13.2) (4.7) —	外 口縁部横ナデ。底部横位ヘラ削り。内横ナデ、ナデ。口縁部やや開く。底部丸底。	砂粒　赤色粒 密	橙　色	良好	口～底 25%	
3 —	土師器 甕	(19.4) (6.1) —	内外ともに口縁部横ナデ、胴部横位ヘラナデ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　密	外　にぶい橙色 内　にぶい橙色 灰褐色	普通	口縁部 20%	
4 —	土師器 壺	(13.6) (6.5) —	外 口縁部横ナデ、縦・斜位ヘラナデ。 内 横ナデ。折り返し口縁。口縁部やや内湾する。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 粗	にぶい橙色	普通	口縁部 20%	
5 —	土師器 坩	— (2.2) 2.0	外 斜・横位ミガキ。内 横・斜位ヘラナデ。底部上げ底。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　密	外　赤褐色 内　にぶい褐色	良好	底　部 100%	
6 23	土師器 坩	— (17.9) 5.4	外 胴部横ナデ、横位ミガキ、斜位ヘラナデ。内 胴部横・斜位ヘラナデ。胴部球形。底部平底。	砂粒　黒色粒 密	橙　色	良好	胴～底 90%	
7 —	須恵器 甕	— — —	内外ともに回転ナデ。	白色針状物質 白色粒　黒色粒 赤色粒　密	外　灰黄色 灰白色 内　灰黄色	良好	肩部片	
8 —	弥　生 甕	— — —	外 横・縦位ヘラナデ。内 横位ハケメ後横位ヘラナデ。口唇部刻目有。外面輪積痕有。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 密	外　灰褐　橙 内　にぶい褐色 橙　色	良好	口縁部片	
9 27・28	朝顔形 円筒 埴輪？	(26.0) (12.4) —	外 斜位ハケメ。内 斜位ハケメ。口縁部外反する。内面線刻有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	外　褐灰色 橙　色 内　にぶい赤褐	良好	口縁部 30%	
10 27・28	朝顔形 円筒 埴輪？	(24.6) (8.2) —	内外ともに斜位ハケメ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	外　橙　色 内　にぶい褐色	良好	口縁部 25%	
11 29・30	円筒 埴輪	(29.6) (6.2) —	内外ともに斜位ハケメ。口縁部やや外反する。内面線刻有。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 密	橙　色	良好	口縁部 20%	
12 29・30	円筒 埴輪	(22.1) (5.7) —	内外ともに斜位ハケメ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	橙　色	良好	口縁部 25%	
13 29・30	円筒 埴輪	— — —	外 縦位ハケメ。内 横位ハケメ下横・斜位ヘラナデ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	橙　色	良好	口縁部片	

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
14 29・30	朝顔形 円筒 埴輪？	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。口縁部直線的に開く。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　密	外　橙　色 内　にぶい橙色 橙　色	良好	口縁部片	
15 29・30	円　筒 埴　輪	－ － －	内外ともに斜位ハケメ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒 密	外　橙　色 内　灰　色	良好	口縁部片	
16 29・30	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦・斜位ハケメ。内 横位ヘラナデ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	橙　色	良好	口縁部片	
17 29・30	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部直線的に開く。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	橙　色	良好	口縁部片	
18 29・30	円　筒 埴　輪	－ － －	内外ともに斜位ハケメ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 やや粗	外　にぶい橙色 内　にぶい褐色	普通	口縁部片	
19 29・30	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	外　明赤褐色 内　橙　色	普通	口縁部片	
20 29・30	円　筒 埴　輪	－ － －	内外ともに斜位ハケメ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	橙　色 にぶい褐色	良好	口縁部片	
21 29・30	円　筒 埴　輪		内外ともに斜位ハケメ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　密	灰褐色 にぶい橙色	良好	口縁部片	
22 29・30	円　筒 埴　輪		外 縦位ハケメ。内 横位ハケメ。下横・斜位ヘラナデ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 赤色粒 密	外　明赤褐色 褐灰色 内　橙　色	良好	口縁部片	
23 29・30	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部やや開く。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　小石　密	外　にぶい赤褐 褐灰色 内　橙　色	良好	口縁部片	
24 24	円　筒 埴　輪	－ (39.5) 14.2	外 縦・斜位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。一部斜位ハケメ。突帯台形状呈する。透孔有。底面刻目有。	砂粒　黒色粒 赤色粒 密	外　にぶい赤褐 橙　色 内　にぶい赤褐	良好	胴～基底 40%	
25 31・32	円　筒 埴　輪	－ (23.5) －	外 斜・縦位ハケメ。内 斜位ハケメ、突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	にぶい赤褐 橙　色	良好	胴　部 45%	
26 31・32	円　筒 埴　輪	－ (11.6) －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ、ヘラナデ。突帯台形状呈する。透孔有。	砂粒　黒色粒 赤色粒 密	橙　色 明赤褐色	普通	胴　部 45%	
27 31・32	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 斜位ハケメ、ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　粗	外　褐灰色 橙　色 内　明褐色	良好	胴部片	
28 31・32	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦・斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。透孔有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　密	外　明赤褐色 内　橙　色	良好	胴部片	
29 31・32	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 赤色粒　小石 粗	外　橙　色 内　明赤褐色	良好	胴部片	
30 33・34	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦・斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。内面輪積痕有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　粗	外　褐灰色 橙　色 内　褐灰色	良好	胴部片	
31 33・34	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦・斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　黒色粒 赤色粒 やや粗	外　褐灰色 橙　色 内　橙　色	良好	胴部片	
32 33・34	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	橙　色	良好	胴部片	
33 33・34	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　密	橙　色	普通	胴部片	
34 33・34	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	橙　色	良好	胴部片	
35 33・34	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 縦・斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。透孔有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　密	橙　色	良好	胴部片	
36 33・34	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。透孔有。	砂粒　白色粒 小石 やや粗	橙　色	良好	胴部片	

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
37 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	外　橙　色 内　にぶい褐色	良好	胴部片	
38 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	内外ともに縦位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	外　橙　色 内　灰赤褐色	良好	胴部片	
39 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。突帯台形状呈する。透孔有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	橙　色	良好	胴部片	
40 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	橙　色	良好	胴部片	
41 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	外　赤　色 内　明赤褐色	良好	胴部片	
42 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 斜位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。内面輪積痕有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　やや粗	橙　色 明赤褐色	良好	胴部片	
43 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 赤色粒 密	褐灰色 橙　色 灰黄褐色	良好	胴部片	
44 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 斜位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。内面輪積痕有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	外　灰黄褐色 にぶい黄色 内　明赤褐色	良好	胴部片	
45 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	外　にぶい黄褐 橙　色 内　橙　色	良好	胴部片	
46 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	内外ともに斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	外　橙　色 内　にぶい褐色	良好	胴部片	
47 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 小石 やや粗	外　明赤褐色 内　橙　色	良好	胴部片	
48 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	内外ともに斜位ハケメ。内面線刻有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　密	外　橙　色 内　褐灰色	良好	胴部片	
49 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ、ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　やや粗	外　橙　色 内　明赤褐色	良好	胴部片	
50 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。透孔有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	外　明赤褐色 内　橙　色	良好	胴部片	
51 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。透孔有。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 やや粗	明赤褐色	良好	胴部片	
52 33・34	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 密	にぶい赤褐色	良好	胴部片	
53 35・36	円筒 埴輪	― (8.4) (17.8)	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。底面刻目有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　やや粗	橙　色	良好	基底部 20%	
54 35・36	円筒 埴輪	― (6.6) (13.8)	外 縦位ハケメ。内 縦・斜位ヘラナデ。底面刻目有。	砂粒　黒色粒 赤色粒 密	橙　色	良好	基底部 30%	
55 35・36	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 縦・斜位ヘラナデ。底面刻目有。	砂粒　白色粒 赤色粒　石英 小石　やや粗	外　にぶい赤褐 内　暗灰黄色	良好	基底部片	
56 35・36	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。底面刻目有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	外　橙　色 内　明赤褐色	良好	基底部片	
57 35・36	円筒 埴輪	― ― ―	外 縦位ハケメ。内 横位ヘラナデ。底面刻目有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　粗	外　橙　色 内　にぶい赤褐	良好	基底部片	

第19表　第９号墳内周溝出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 ―	土師器 器　台	― (5.2) ―	外 接合部横・縦位ミガキ。内 口縁部縦位ミガキ、台部縦位ヘラナデ。赤彩。底面透孔有。	砂粒　黒色粒 石英 密	にぶい赤褐色	普通	接100% 台 10%	

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
2 35・36	円筒 埴輪	－ － －	内外ともに斜位ハケメ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	橙　色	良好	口縁部片	
3 35・36	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。外面線刻有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　やや粗	赤　色	良好	胴部片	
4 35・36	円筒 埴輪	－ － －	内外ともに斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　長石　密	にぶい赤褐色	普通	胴部片	
5 35・36	円筒 埴輪	－ (10.0) －	内外ともに斜位ハケメ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	赤　色	普通	胴部片	
6 35・36	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 横・斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	橙　色	良好	胴部片	
7 35・36	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	橙　色	普通	胴部片	
8 35・36	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。斜・横位ヘラナデ。底面刻目有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	外　橙　色 内　にぶい橙色	良好	底部片	

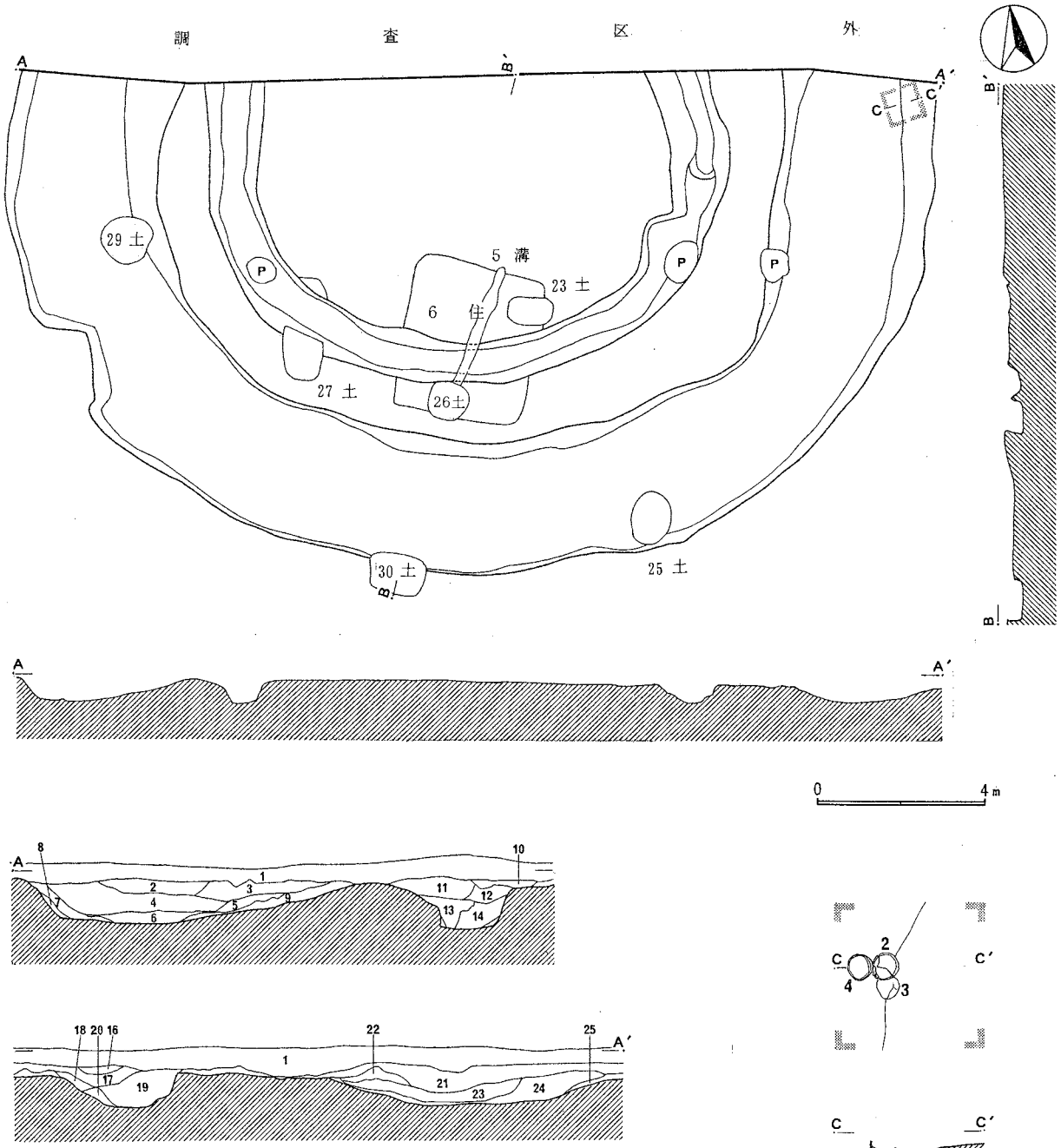
第10号墳（第34図）

調査地点２の北端中央、G～M－12・15グリッドに位置する。本古墳も９号墳同様、二重に周溝を持つ。西0.5mには11号墳が隣接している。本古墳も墳丘は削平されており、北側大半が調査区外にある。また、所々で他の遺構と重複している。外周溝は西側で29号土坑、南側では外側立ち上がりを25号土坑、東側では内側立ち上がりをピットにそれぞれ切られている。内周溝は南側中央で６号住を切っており、南西部では27号土坑、南東部ではピットにそれぞれ切られている。ブリッジの有無は不明であり、内部主体はみられない。

外周溝の幅は2.60～3.84mで、確認面からの深さは0.30～1.00mである。立ち上がりは緩やかな傾斜で掘り込まれており、底面は平坦である。内周溝は幅1.00～1.48m、確認面からの深さは0.40～0.50mで、逆台形状を呈する部分と幅広の「U」字状を呈する部分がみられる。本古墳も両者が同心円状に位置することから９号墳同様、１基の古墳とした。また、両者の同時性についても９号墳同様、新旧関係はつかめなかった。内周溝内墳丘規模は直径10m程度であり、周溝を含めると直径12.5m前後になる。内周溝と外周溝の間は0.24～2.24mあるが、1.20m前後が平均的な幅である。外周溝、及び内外周溝間の幅等を含めると本古墳の規模は直径22.48～22.80mになり、今回報告する中で最も大きいものである。

遺物は内外周溝ともに少ないが、内側に比べると外側の方が多い。ただし、古墳時代前期の流れ込みである土器片が多く検出されている。本古墳に伴う遺物は土師器・坏と円筒埴輪のみであるが検出数は非常に少ない。特に埴輪は破片が数点出土したのみである。

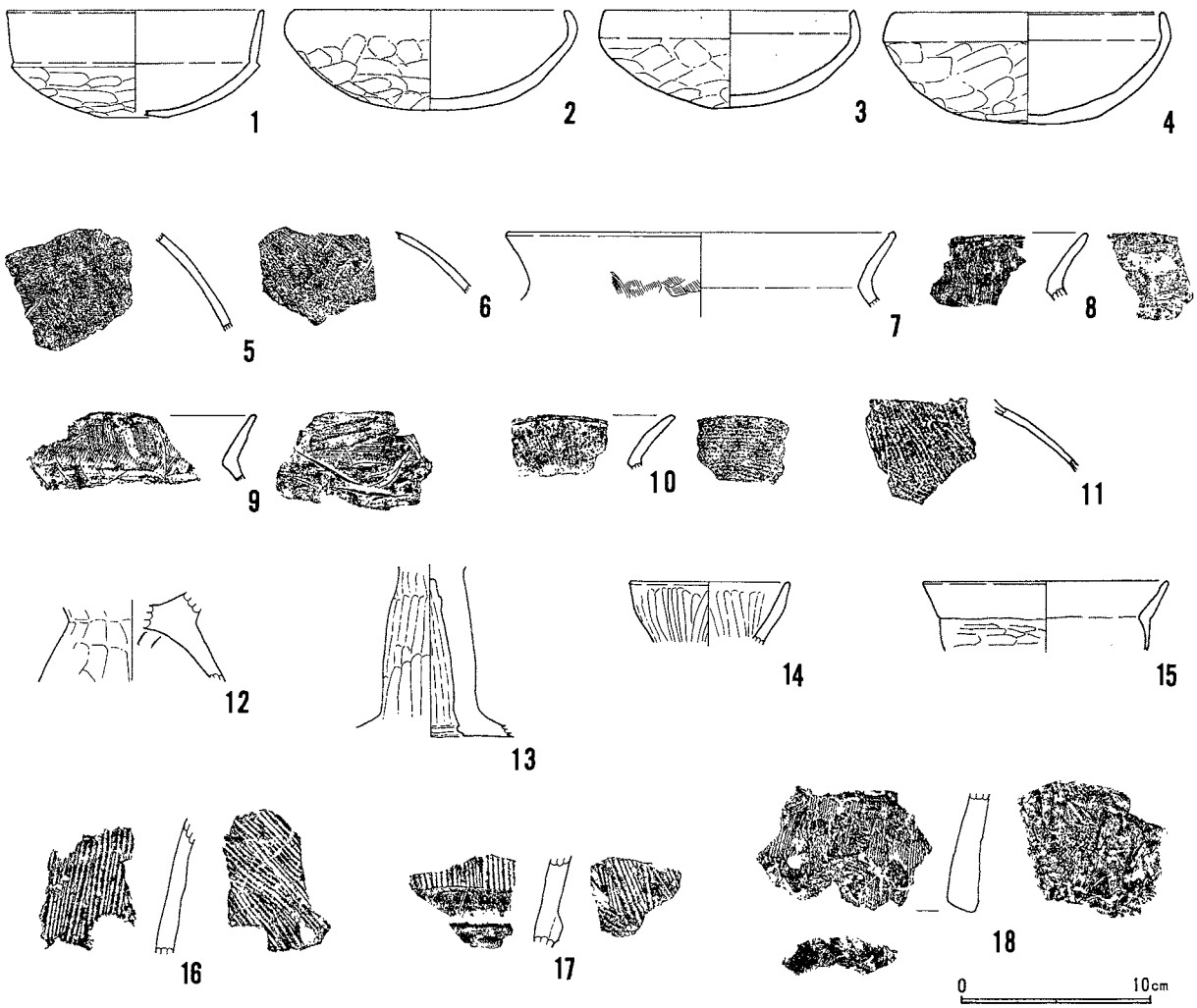
第35図１～18は外周溝出土遺物。１～４は土師器・坏。２～４が外周溝内東端よりまとまって検出された。１のみ有稜坏で、２～４は口縁部が内湾し、底部が丸底である。いずれも内外面に赤彩が施されている。５～15は古墳時代前期の土器。５・６は壺の肩部片。７～12は甕。11は器壁が薄く、やや粗目のハケメ調整がなされていることから「S」字状口縁を有する甕の肩部片である。13は高坏の脚部。14は坩の口縁部。15は口縁部が短く、器高が低いことから椀とした。内外面に赤彩が施されている。



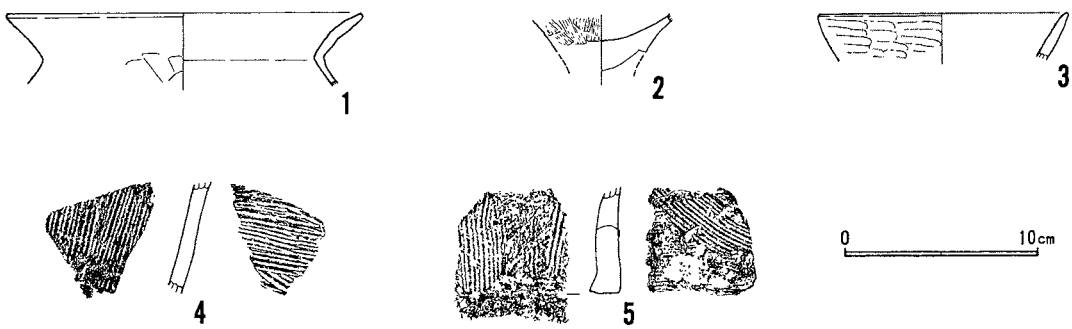
土層説明（ＡＡ´）

1 表　　土
2 暗褐色土
3 暗褐色土：ローム粒少量含む。
4 黒　色　土：ローム粒含む。
5 黒褐色土：ローム粒含む。
6 黒褐色土：ローム粒多量含む。
7 暗褐色土：ローム粒含む。
8 褐　色　土：ローム粒多量含む。
9 褐　色　土：ローム粒・黒色粒含む。
10 黒褐色土：ローム粒含む。
11 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック含む。
12 黄褐色土：黒褐色土含む。
13 暗褐色土：ローム粒・黒色粒含む。
14 黒　色　土：褐色土含む。
15 褐　色　土
16 暗褐色土：ローム粒含む。
17 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック含む。
18 黒　色　土：ロームブロック含む。
19 黒褐色土：ローム粒・褐色土含む。
20 黒　色　土：褐色土含む。
21 暗褐色土：ローム粒含む。
22 暗褐色土：ローム粒含む。21層より暗い。
23 黒　色　土：ローム粒・褐色土含む。
24 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック含む。
25 褐　色　土：ロームブロック含む。

第34図　第10号墳



第35図　第10号墳外周溝出土遺物



第36図　第10号墳内周溝出土遺物

16～18は円筒埴輪。16・17は胴部片。ともに内外面ハケメ整形のものである。18は基底部片。外面ハケメ、内面ヘラナデ整形で底面には押圧痕がみられる。

第36図１～５は内周溝出土遺物。１は土師器・甕の口縁部片。「く」の字状を呈する。２・３は古墳時代前期の土器で、２は台付甕の接合部、３は坩の口縁部片である。流れ込み。４・５は円筒埴輪。４は胴部片、５は基底部片である。ともに内外面ハケメ整形である。５の底面には押圧痕がみられる。

第20表　第10号墳外周溝出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 24	土師器 坏	(13.6) (5.8) —	外 口縁部横ナデ、底部横位ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。赤彩。口縁部やや開く。底部やや上げ底。	砂粒　白色粒 黒色粒　密	外　にぶい橙色 赤　灰黄褐 内　赤　色	良好	口 10% 体 25% 底 35%	
2 24	土師器 坏	14.8 (5.4) —	外 口縁部横ナデ。体部ユビオサエ。底部横・斜位ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。赤彩。口縁部内湾する。底部丸底。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　にぶい褐色 赤　色 内　赤　色	普通	完　形	
3 24	土師器 坏	13.2 (5.3) —	外 口縁部横ナデ。体部ユビオサエ。底部横・斜位ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。赤彩。口縁部内湾する。底部丸底。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　やや粗	外　赤　色 内　赤　色 にぶい赤色	良好	完　形	
4 24	土師器 坏	14.6 (6.1) —	外 口縁部横ナデ。体～底部横・斜位ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。赤彩。口縁部内湾する。底部丸底。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英	外　橙　色 赤　色 内　にぶい橙色	良好	完　形	
5 —	土師器 壺	— — —	外 横・斜位ハケメ。内 横位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　にぶい褐色 明赤褐色 内　黒褐色	良好	肩部片	
6 —	土師器 壺	— — —	外 斜位細かいハケメ。内 横位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　にぶい黄褐 褐灰色 内　にぶい黄褐	普通	肩部片	
7 —	土師器 甕	26.0 (4.1) —	外 口縁部横ナデ、斜位ハケメ。内 口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　黒色粒 赤色粒　小石 密	暗褐色 にぶい褐色	良好	口縁部 20%	
8 —	土師器 甕	— — —	外 縦位ハケメ。 内 横位ハケメ。 口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　黒色粒 赤色粒 密	外　橙　色 内　褐灰色	良好	口縁部片	
9 —	土師器 甕	— — —	外 口縁部斜位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 密	外　暗灰色 内　にぶい黄橙	普通	口縁部片	
10 —	土師器 甕	— — —	外 斜位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部やや外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　小石　やや粗	外　灰褐　黄灰 内　にぶい橙色 橙　色	良好	口縁部片	
11 —	土師器 甕	— — —	外 斜位粗いハケメ。内 横・斜位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石 石英 やや粗	外　にぶい褐色 内　明赤褐色	良好	胴部片	
12 —	土師器 甕	— (4.8) —	内外ともに縦・斜位ヘラナデ。台付。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 やや粗	外　暗灰黄色 内　橙　色	普通	接合部 45%	
13 —	土師器 高 坏	— (9.2) —	外 脚部縦位ミガキ、裾部横ナデ。内 縦位粗いヘラナデ。脚部やや膨らむ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　にぶい赤褐 内　にぶい橙色 赤　色	普通	脚　部 100%	
14 —	土師器 坩	(8.8) (3.5) —	内外ともに口縁部縦位ミガキ。口縁部やや内湾する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　にぶい褐色 内　にぶい橙色	良好	口縁部 15%	
15 —	土師器 椀	(13.2) (3.8) —	内外ともに横位ミガキ。口縁部直線的に開く。体部球形状を呈する。	砂粒　黒色粒 密	外　赤褐色 内　明赤褐色	普通	口縁部 20%	
16 35・36	円　筒 埴　輪	— — —	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　にぶい褐色 内　にぶい橙色	良好	胴部片	
17 35・36	円　筒 埴　輪	— — —	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 密	橙　色	良好	胴部片	
18 35・36	円　筒 埴　輪	—	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。底面押圧痕	砂粒　白色粒 黒色粒　長石 石英　粗	外　にぶい赤褐 内　明赤褐色	良好	基底部片	

第21表　第10号墳内周溝出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 —	土師器 甕	(18.8) (3.7) —	外 口縁部横ナデ。胴部縦位ヘラ削り。内 口縁部横ナデ。胴部横位ヘラナデ。口縁部「く」の字状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 粗	にぶい赤褐 にぶい褐色	普通	口縁部 10%	
2 —	土師器 甕	— (3.0) —	外 縦・斜位のハケメ。内 横・斜位のヘラナデ。	砂粒　白色粒 赤色粒 やや粗	外　明赤褐色 内　褐灰色	良好	接合部 100%	
3 —	土師器 坩	(13.3) (2.6) —	外 横位ミガキ。内 ミガキ。口縁部直線的に開く。赤彩。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　密	明赤褐色	良好	口縁部 20%	内面摩耗顕著。

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
4 35・36	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 密	外　橙　色 内　にぶい黄橙	良好	胴部片	
5 35・36	円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。底面押圧痕有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　粗	橙　色	良好	基底部片	

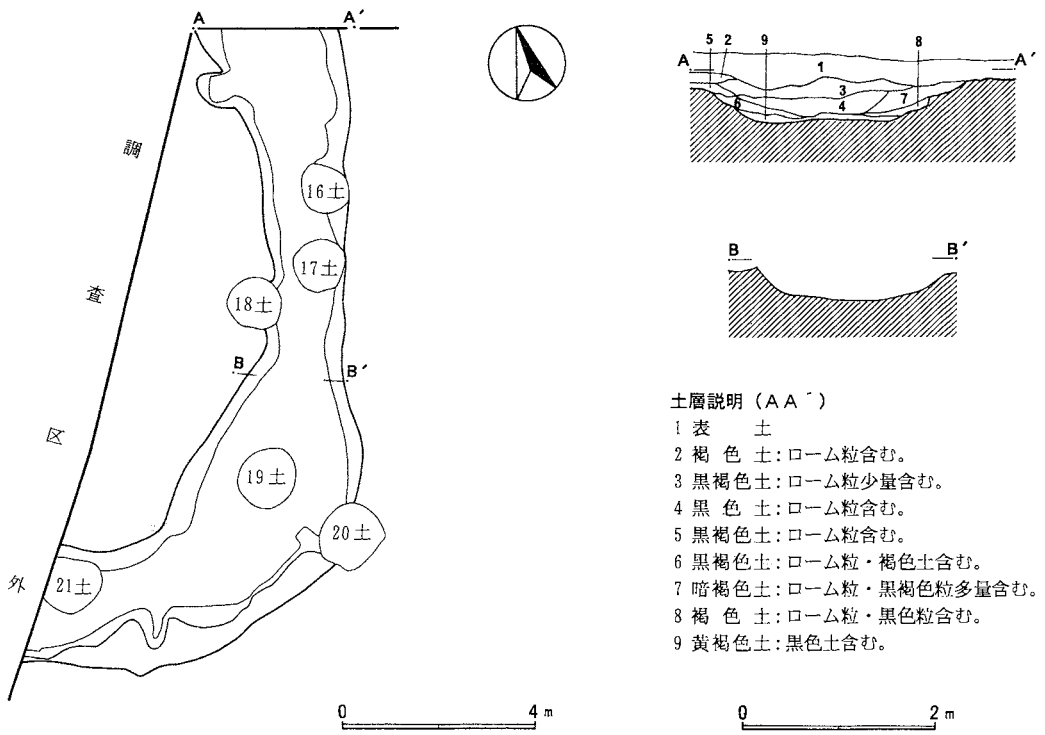
第11号墳（第37図）

調査地点２の北西端、Ｆ・Ｇ－11～14グリッドに位置し、南２ｍには８号墳、東0.5ｍには10号墳が隣接している。墳丘は削平されており、周溝南東部のみの検出である。大半が調査区外にある。また、周溝内外において16～21号土坑に切られている。本古墳は周溝のまわり具合からみて円墳と思われるが、ブリッジの有無や内部主体等については不明である。

規模は調査区の関係上不明であるが、周溝の幅からみてやや大きいものと推測される。周溝は総じて幅広だが、非常に狭い箇所もみられる。狭い部分では1.48m、広い部分では3.84mある。確認面からの深さはほぼ一定しており0.76mである。周溝の立ち上がりは内・外側とも緩やかな傾斜で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。覆土は他の古墳同様、ローム粒・ロームブロックを含む自然堆積層である。

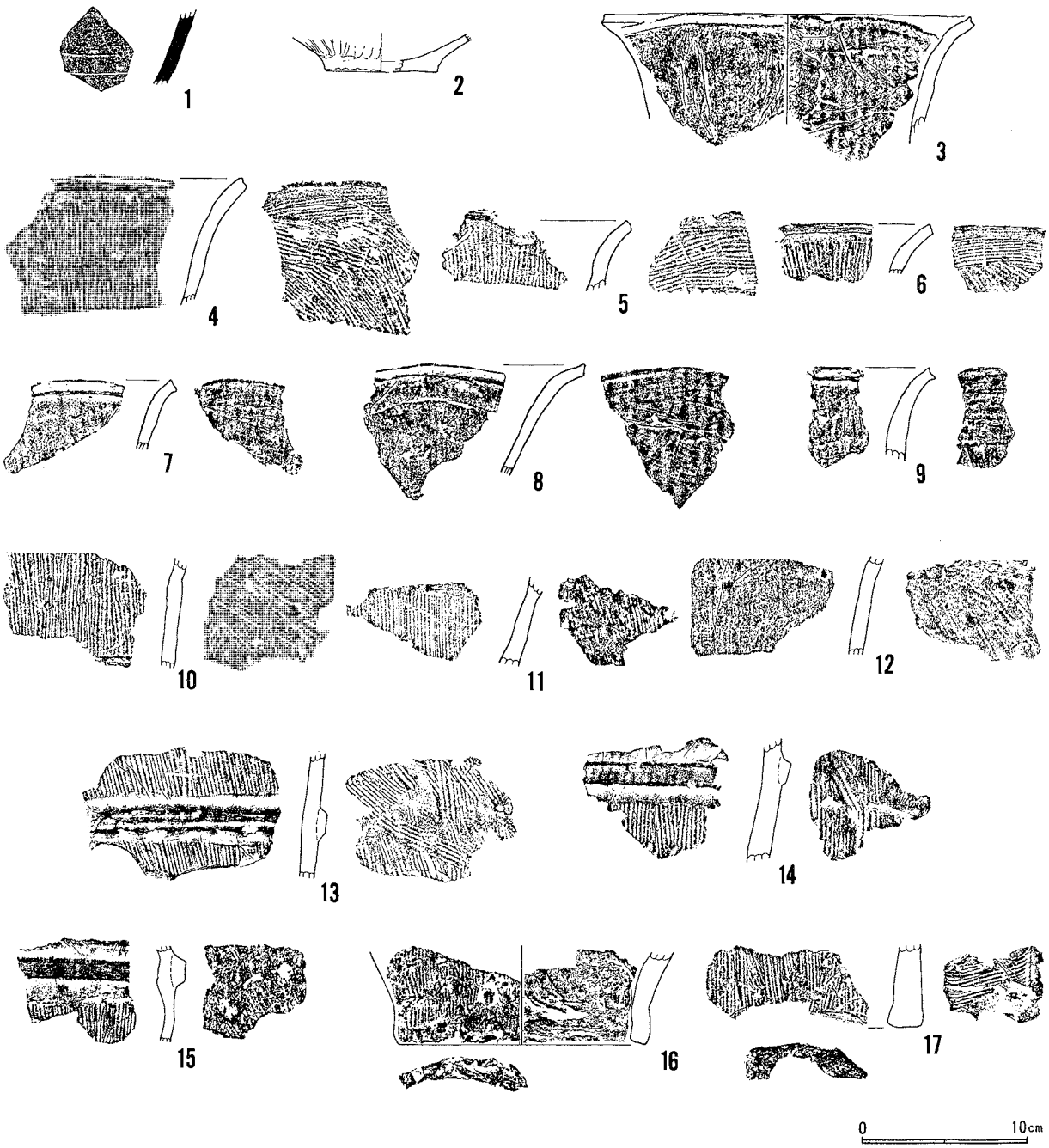
遺物は円筒埴輪を主体に土器も若干検出されている。いずれも破片での検出である。円筒埴輪はハケメ整形（４～６・10・11・13～17）とヘラナデ整形（３・７～９・12）の２者がみられ、後者は朝顔形であろう。検出された埴輪の胎土、色調はともに様々である。

第38図１は須恵器・甕の胴下部片。２は土師器・壺の底部片。ともに流れ込みである。３～17は円



第37図　第11号墳

筒埴輪。３～９は口縁部片。いずれも外反している。３・７～９は朝顔形であろう。10～15は胴部片。12以外はハケメ整形である。12は内外ともにヘラナデ整形で、朝顔形の口縁直下部分である。13～15には突帯がみられる。13は低く、14は上端が高く下端が低い、15はややM字状を呈するものである。16・17は基底部片。いずれも外面はハケメ整形である。底面は16が刻目を有するが、17には何も施されていない。



第38図　第11号墳出土遺物

第22表　第11号墳出土遺物観察表

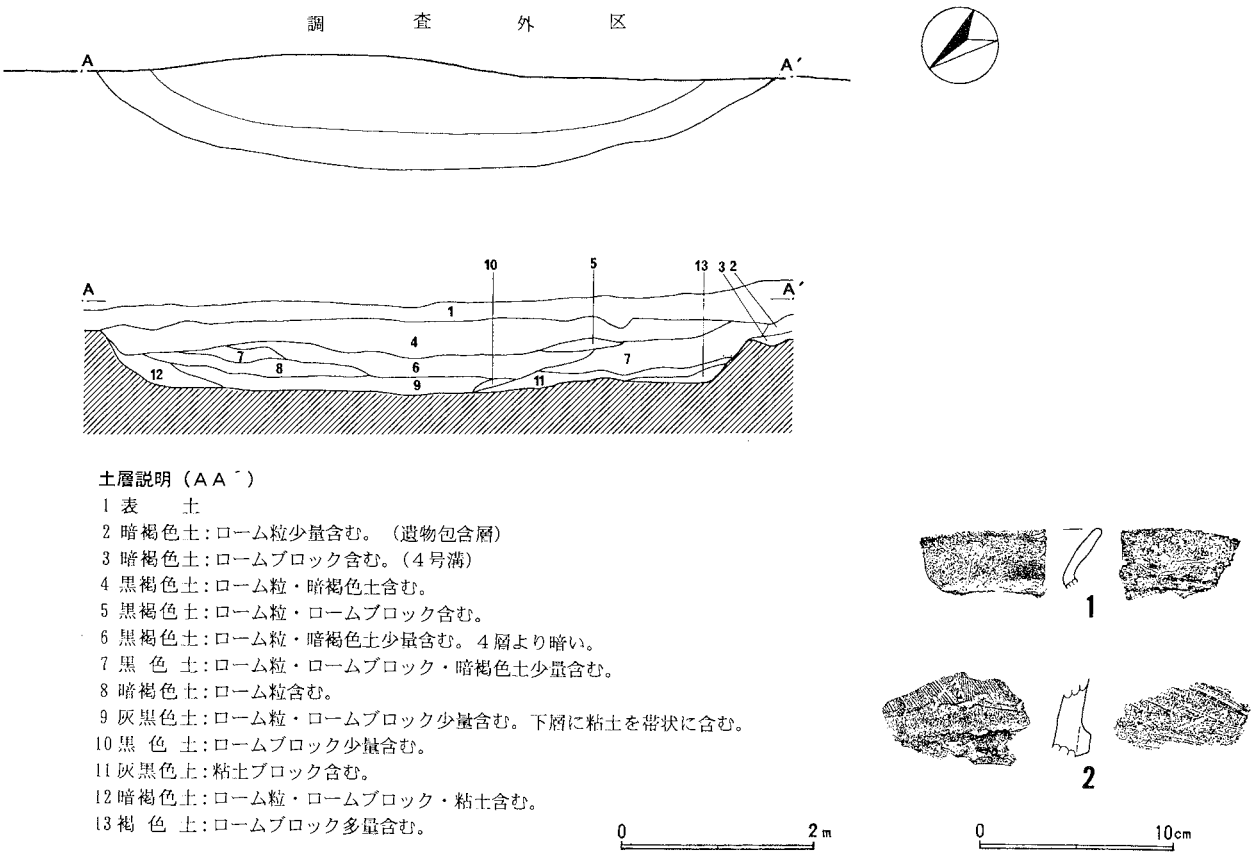
挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 –	須恵器 甕	– – –	内外ともに回転ナデ。	黒色粒 密	黄灰色	良好	胴部片	
2 –	土師器 壺	– (2.4) (7.0)	外 縦位粗いミガキ。内 横・斜位ヘラナデ。底部平底。	砂粒　黒色粒 赤色粒 密	にぶい橙色	良好	底 部 40%	
3 37・38	朝顔形 円筒 埴輪	(22.8) (7.9) –	外 縦位ヘラナデ。内 斜位ヘラナデ。口縁部大きく外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 やや粗	明赤褐色	良好	口縁部 35%	
4 37・38	円 筒 埴 輪	– – –	外 縦位ハケメ。内 横・斜位ハケメ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	にぶい赤褐色	良好	口縁部片	
5 37・38	円 筒 埴 輪	– – –	外 縦位ハケメ。内 横位ハケメ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　やや粗	明赤褐色	良好	口縁部片	
6 37・38	円 筒 埴 輪	– – –	外 縦位ハケメ。内 横・斜位ハケメ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 密	橙　色	良好	口縁部片	
7 37・38	朝顔形 円筒 埴輪	– – –	外 縦位ヘラナデ。内 斜位ヘラナデ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒 やや粗	明赤褐色	良好	口縁部片	
8 37・38	朝顔形 円筒 埴輪	– – –	外 縦位ヘラナデ。内 横・斜位ヘラナデ。口縁部大きく外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒 やや粗	明赤褐色	良好	口縁部片	
9 37・38	朝顔形 円筒 埴輪	– – –	外 縦位ヘラナデ。内 横位ヘラナデ。 口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒 粗	外　にぶい褐色 内　褐灰色	普通	口縁部片	
10 37・38	円 筒 埴 輪	– – –	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　粗	にぶい褐色	普通	胴部片	
11 37・38	円 筒 埴 輪	– – –	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒 やや粗	にぶい赤褐色	良好	胴部片	
12 37・38	朝顔形 円筒 埴輪	– – –	外 縦位ヘラナデ。内 斜位ヘラナデ。	黒色粒　赤色粒 小石 やや粗	にぶい橙色	良好	胴部片	
13 37・38	円 筒 埴 輪	– – –	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　密	外　暗灰黄色 橙　色 内　橙　色	良好	胴部片	
14 37・38	円 筒 埴 輪	– – –	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。突帯台形状呈する。	黒色粒　赤色粒 石英　小石 やや粗	にぶい橙色	良好	胴部片	
15 37・38	円 筒 埴 輪	– – –	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	白色粒　石英 小石 密	赤褐色	良好	胴部片	
16 37・38	円 筒 埴 輪	– (5.7) (15.0)	外 縦位ハケメ。内 斜・横位ヘラナデ。底面刻目有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　小石　粗	にぶい橙色	良好	底 部 20%	
17 37・38	円 筒 埴 輪	– – –	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。底面未調整。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　小石　粗	橙　色	良好	基底部片	

第12号墳（第38図）

調査地点２の南東端、Ｐ－４・５グリッドに位置し、南東４ｍには３号墳が隣接する。周溝西の外側立ち上がりのみの検出である。検出された周溝は弧を描いていることから円墳であろう。周溝は確認面から0.48ｍである。外側の立ち上がりはやや急な傾斜で掘り込まれている。覆土は他の古墳同様、ローム粒・ロームブロックを含む自然堆積層である。この他、詳細については全く不明である。

出土遺物は非常に少ない。図示可能な遺物は２点のみである。

第39図１は土師器・甕の口縁部。古墳時代前期のものであり、流れ込みである。２は円筒埴輪・胴部片。ハケメ整形であるが、ハケメの単位が非常に細かい。突帯は台形状を呈している。



第39図　第12号墳・出土遺物

第23表　第12号墳出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 —	土師器 甕	— — —	内外ともに横ナデ。口縁部「く」の字呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 石英　　密	外　明黄褐色 黄橙色 内　黄橙色	良好	口縁部片	
2 —	円　筒 埴　輪	— — —	外 縦・斜位ハケメ。内 斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 小石 やや粗	橙　色	良好	胴部片	

第13号墳（第40図）

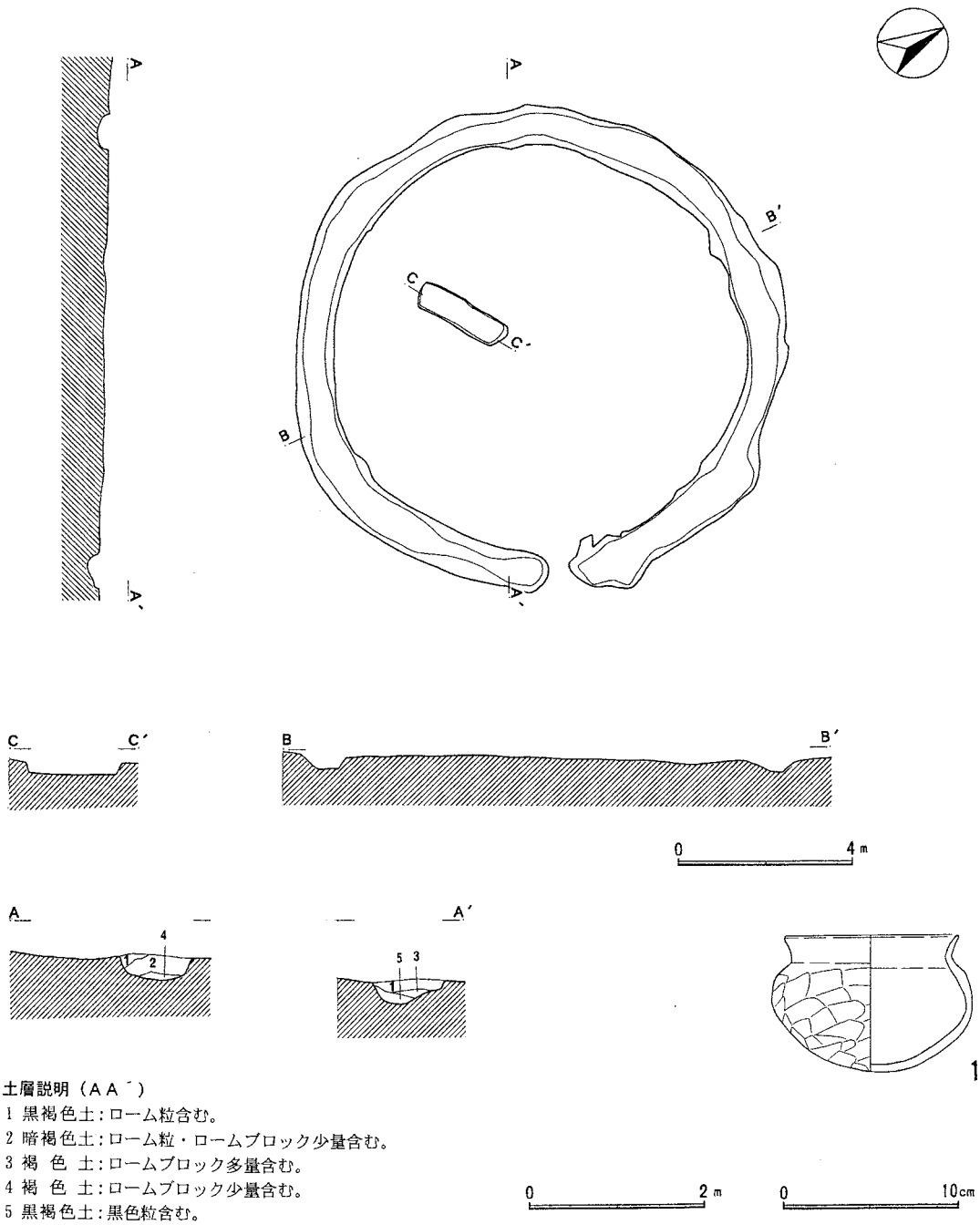
調査地点1から唯一検出された遺構で、調査区南東端に位置する。本古墳は全形を検出できたが、墳丘はやはり確認面段階で削平されていた。周溝南東にブリッジを持つ円墳である。

確認面での墳丘規模は、周溝内側の立ち上がりで直径9.64mで、墳形は円形である。周溝は幅0.72～1.24mであり、確認面からの深さは0.35m前後である。ほぼ逆台形状に掘り込まれており、周溝を含めると直径11.52mになる。覆土はやはりローム粒・ロームブロックを含む自然堆積層である。ブリッジは南東部に設けられており、ブリッジを南とした場合の方位はN－64°－Wである。上面の幅は0.40m。

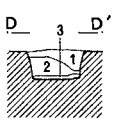
墳丘部中央から西側寄りには長方形の掘り込みがみられる。長軸2.28m、短軸0.68m、深さ0.64mである。その位置から内部主体かどうかは疑問であるが、とりあえず本古墳のものとして掲載した。

出土遺物は周溝西側において土師器・椀が1点検出されたのみである。

第40図1は西側周溝底面よりやや浮いて検出された。完形品。



土層説明（ＡＡ´）
1 黒褐色土：ローム粒含む。
2 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック少量含む。
3 褐　色　土：ロームブロック多量含む。
4 褐　色　土：ロームブロック少量含む。
5 黒褐色土：黒色粒含む。



土層説明（ＤＤ´）
1 暗褐色土：ロームブロック少量含む。
2 褐　色　土：ローム粒・ロームブロック多量含む。
3 黒褐色土：黒色粒含む。

第40図　第13号墳・出土遺物

第24表　第13号墳出土観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 24	土師器 椀	10.0 7.9 －	外 口縁横ナデ。胴～底横・斜ヘラナデ。内 口縁横ナデ。胴～底横・斜ヘラナデ。口縁やや外反する。胴～底倒卵形。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 やや粗	外　赤　赤灰 内　にぶい橙色 橙　色	良好	完　形	

3　その他の遺構と遺物

（1）　溝　跡

第１号溝跡（第41・42図）

調査地点２の南東端、Ｌ～Ｐ－１グリッドに位置する。本溝跡は調査区南東端付近で２つに分かれており、１つは北方向、もう一方は南西方向へ走っているが、前者は分岐点から約2.5m先で途切れている。なお、分岐点のある調査区南東端では３号墳の墳丘部、及び周溝を切っている。北方向へ走る溝の幅は0.40m前後で、確認面からの深さは0.10m程度である。断面形は船底状を呈する。南西方向へ走る溝は幅0.64～1.00m、確認面からの深さは0.50m程度である。断面形は逆台形を呈しており、しっかりした掘り込みである。

出土遺物はみられなかった。

第２号溝跡（第41・42図）

調査地点２の南東、Ｊ～Ｐ－３グリッドに位置する。調査区沿いに南東方向から北西方向へ走っており、北側には３・４号溝跡が併走している。そして、Ｉ－３グリッド付近で南西方向から北東方向へ走る５号溝跡に接続している。５号溝跡との新旧関係は不明である。なお、Ｌ～Ｎ－３グリッドでは４号墳、Ｉ～Ｋ－３グリッドでは６号墳を切っているが、これは北側を併走する３・４号溝跡も同様である。本溝跡の幅は0.45～0.90m、確認面からの深さは0.13mと浅い。立ち上がりは緩やかな傾斜で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。

出土遺物はみられなかった。

第３号溝跡（第41・42図）

調査地点２の南東、Ｈ～Ｐ－３・４グリッドに位置し、南東方向から北西方向へ走る２・４号溝跡の間を併走している。本溝跡、及び２・４号溝跡はＩ－４グリッド付近で５号溝跡と接続するが、本溝跡のみ５号溝跡以西にも延び、Ｈ－４グリッド付近で途切れている。２号溝跡同様、４・６号墳を切っているが、５号溝跡との新旧関係は不明である。本溝跡の幅は0.80～1.62m、確認面からの深さは0.22mで２・４号溝跡よりは深い。断面形は船底状を呈する部分と台形状を呈する部分がみられる。

出土遺物はみられなかった。

第４号溝跡（第41・42図）

調査地点２の南東、Ｊ～Ｐ－４グリッドに位置し、２・３号溝跡の最北側を南東方向から北西方向に併走している。Ｊ－４グリッド付近で一旦途切れるが、0.7m先で再び現れ、５号溝跡へ接続する。２・３号溝跡同様、４・６号墳を切っている。また、Ｏ－４グリッドでは５号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。本溝跡の幅は0.20～0.40mで、確認面からの深さは0.05mと非常に浅い。断面形は船底状になる部分と「U」字状になる部分がみられる。

出土遺物はみられなかった。

第５号溝跡（第41・42図）

調査地点２のほぼ中央、Ｉ・J－１～14グリッドを南西方向から北東方向へ走っている。Ｉ・Ｊ－３・４グリッドにおいて２～４号溝跡と接続しているが、新旧関係は不明である。本溝跡は調査区南端では５・６号墳、中央部では８号墳を切っている。溝の幅は0.55～1.00m、確認面からの深さは mである。立ち上がりは「V」字状を呈する。

出土遺物はみられなかった。

第６号溝跡（第41・42図）

調査地点２の東、Ｋ～Ｐ－８～11グリッドに位置する。北側には７号溝跡がほぼ軸を同じくして北方向に走っている。本溝跡は「コ」の字状に巡っており、南側では７号墳を切っている。また、確認面からは非常に浅いため、７号墳と重複する箇所より以西は確認できなかった。本溝跡の幅は0.40～1.05m、確認面からの深さは0.14mで浅い。立ち上がりは幅広の「V」字状を呈する。

出土遺物はみられなかった。

第７号溝跡（第41・42図）

調査地点２の北東、Ｌ～O－11・13グリッドに位置する。溝跡は５号住の西側から確認され、ほぼ北に向って走る。そして、10号墳外周溝を横切るが、10号墳外周溝の内側からは検出されなかったため、Ｌ－13グリッド付近で途切れるものと思われる。また、Ｎ－12グリッドで28号土坑と重複しているが、新旧関係は判断できなかった。溝跡の幅は0.55～0.80m、確認面からの深さは0.09mと非常に浅い。断面形は６号溝跡同様、幅広の「V」字状を呈する。

出土遺物はみられなかった。

第８号溝跡（第41・42図）

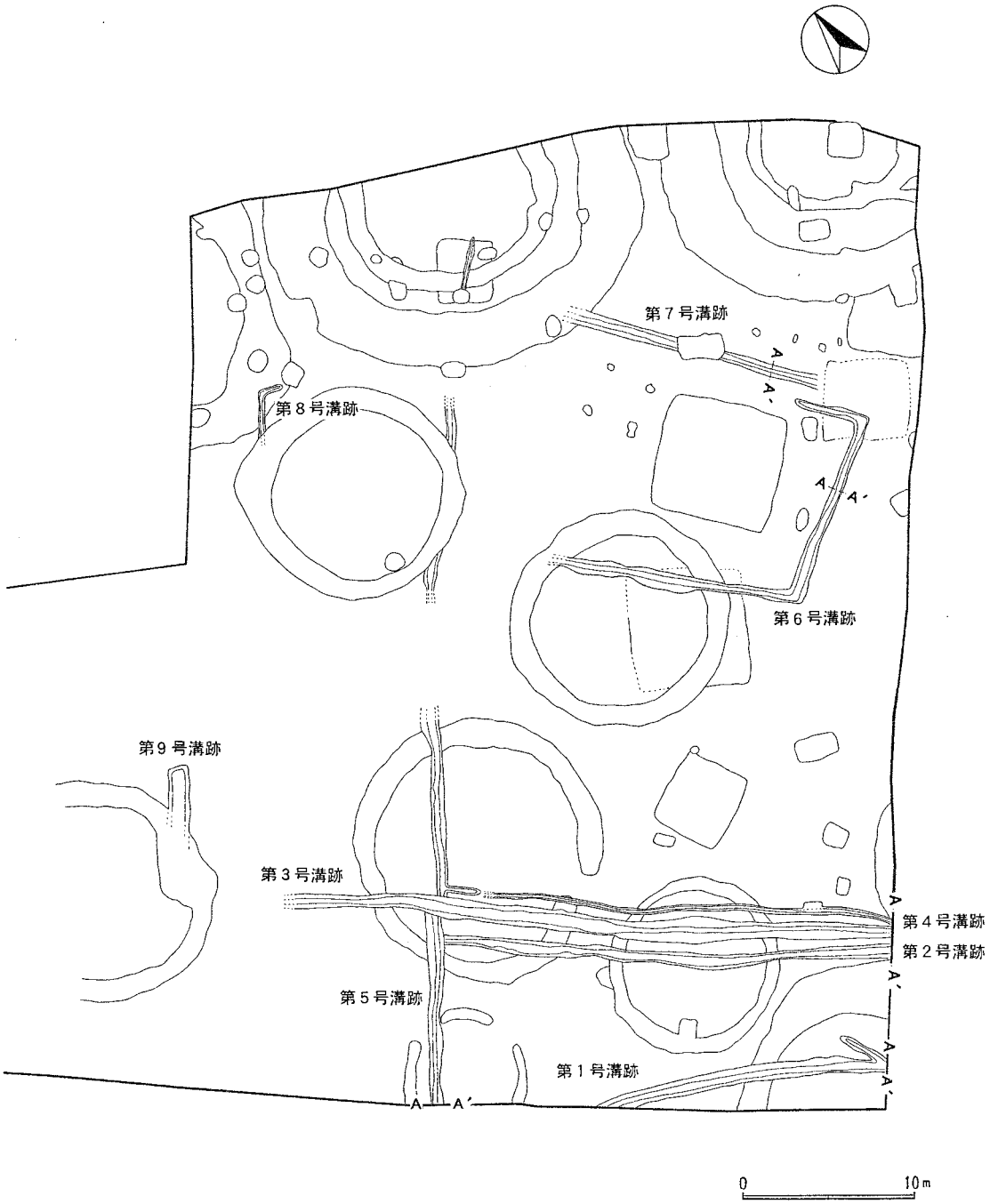
調査地点２の北西、Ｇ・Ｈ－11・12グリッドに位置する。８号墳の北側を北東方向から南西方向へ走るが、Ｇ－12グリッドで南東方向へ直角に曲がっている。本溝跡は８号墳周溝を切っているが、周溝西側では検出されていないため、周溝内で途切れるものと思われる。溝跡の幅は0.30～0.40m、確認面からの深さは0.30m程度であり、８号墳周溝底面までの深さとあまり変わらない。断面形は「U」字状を呈している。

出土遺物はみられなかった。

第９号溝跡（第41・42図）

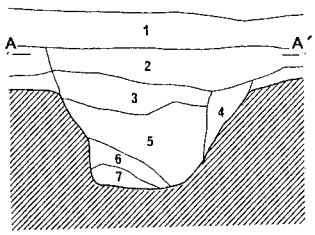
調査地点２の北西、Ｆ－５・６グリッドに位置する。２号墳の周溝北東部を切って、北東方向から南西方向へ走っているが、周溝南西側では確認されなかった。土坑の可能性も考えられる。溝跡の幅は0.30m前後、確認面からの深さは0.40m前後である。深さは２号墳周溝底面までとあまり変わらない。立ち上がりはやや急な傾斜で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。

出土遺物はみられなかった。


第７号溝跡
第８号溝跡
第６号溝跡
第９号溝跡
第３号溝跡
第４号溝跡
第２号溝跡
第５号溝跡
第１号溝跡
A
A′
0
10m

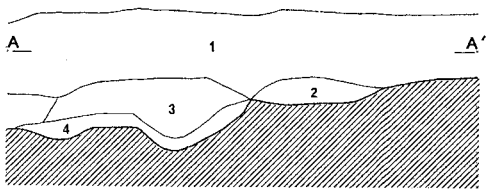
第41図　第１～９号溝跡

第１号溝跡



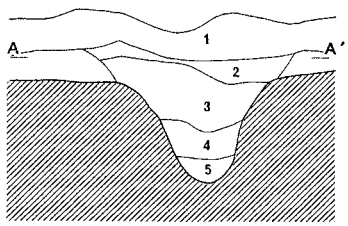
土層説明（ＡＡ´）
1 表　　土
2 暗褐色土：ローム粒少量含む。
3 暗褐色土：ロームブロック帯状に含む。
4 黄褐色土
5 暗褐色土：ローム粒少量含む。
6 褐　色　土：ローム粒含む。
7 黒褐色土：ローム粒少量含む。

第２・３・４号溝跡



第２～４号溝跡
土層説明（ＡＡ´）
1 表　　土
第２号溝跡
2 暗褐色土：ロームブロック多量含む。
第３・４号溝跡
3 暗褐色土：ローム粒少量含む。
4 暗褐色土：ロームブロック含む。

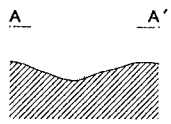
第５号溝跡



土層説明（ＡＡ´）
1 表　　土
2 暗褐色土：ローム粒少量含む。
3 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック含む。

第６号溝跡

第７号溝跡



第42図　溝跡断面図

（2）土 坑

第１号土坑（第43図）

調査地点２の南西端、Ａ・Ｂ－３・４グリッドに位置する。１号墳の周溝外側の立ち上がりを切っている。長軸は不明であるが、短軸は0.86m、確認面からの深さは0.53mである。下場すべてがオーバーハングしており、断面形はフラスコ状を呈している。底面はほぼ平坦である。平面プランは長辺の長い隅丸長方形になろう。

出土遺物は１号墳からの流れ込みである円筒埴輪の口縁部片(第47図１)が検出されたのみである。

第２号土坑（第43図）

調査地点２の南東端、Ｏ－５グリッドに位置する。長軸1.12m、短軸1.35m、確認面からの深さ0.17mである。立ち上がりは緩やかな傾斜の部分とやや急な傾斜の部分がみられるが、底面はほぼ平坦である。平面プランは隅丸の長方形である。

出土遺物はみられなかった。

第３号土坑（第43図）

調査地点２の南東端、Ｍ－２グリッドに位置する。４号墳の墳丘部南側にあり、周溝内側の立ち上がりを切っている。長軸は不明であるが、短軸は1.10m、確認面からの深さは0.36mである。立ち上がりは急な傾斜で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。平面プランは長方形になろう。

出土遺物はみられなかった。

第４号土坑（第43図）

調査地点２の南東、Ｏ－６グリッドに位置する。長軸2.55m、短軸1.45mで、確認面からの深さは0.35mである。立ち上がりは急な傾斜で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。平面プランは長辺中央がやや膨らむ長方形である。

出土遺物はみられなかった。

第５号土坑（第43図）

調査地点２の南東、Ｏ－４グリッドに位置する。本土坑の南側は４号溝と接しているが、両者の新旧関係は確認できなかった。長軸1.24m、短軸0.93mで、確認面からの深さは0.17mである。立ち上がりは土坑西側から南東部にかけては緩やかな傾斜、その他は急な傾斜で掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。平面プランは長方形である。

出土遺物はみられなかった。

第６号土坑（第43図）

調査地点２の北東端、Ｏ－14グリッドに位置し、９号墳の内側周溝と外側周溝の間にある。長軸1.85m、短軸1.24m、確認面からの深さは0.20mである。立ち上がりは急な傾斜で掘り込まれており、底面は一部やや凹凸がみられるもののほぼ平坦である。平面プランは長方形である。

出土遺物はみられなかった。

第７号土坑（第43図）

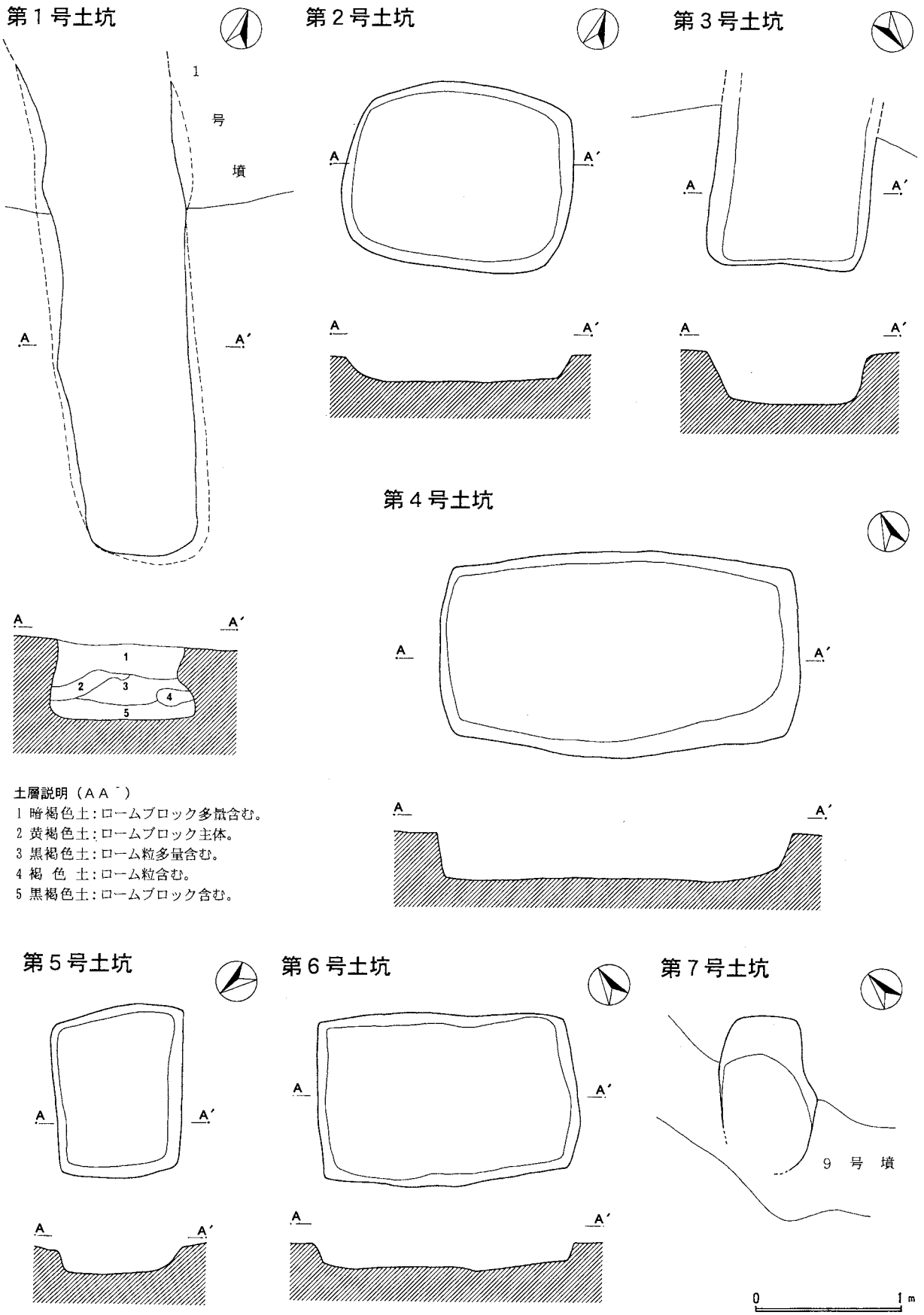
調査地点２の北東端、Ｏ－14・15グリッドに位置する。９号墳内側周溝の立ち上がりを切っている。長軸は不明であるが、短軸は0.68mである。立ち上がりはやや緩やかな傾斜で掘り込まれている。平面プランはややいびつな長方形になろうか。

出土遺物はみられなかった。

第８号土坑（第44図）

調査地点２の南西、Ｃ－４グリッドに位置する。２号墳周溝外側の立ち上がりを切っているが東側の立ち上がりははっきりしない。径は不明であるが、確認面からの深さは0.12mである。立ち上がりは緩やかな傾斜で掘り込まれており、底面は凹凸がみられる。平面プランは不整円形になろうか。

出土遺物はみられなかった。


第１号土坑
1
号
墳
A
A′
第２号土坑
A
A′
第３号土坑
A
A′
第４号土坑
A
A′
1
2
3
4
5
土層説明（ＡＡ´）
1 暗褐色土：ロームブロック多量含む。
2 黄褐色土：ロームブロック主体。
3 黒褐色土：ローム粒多量含む。
4 褐 色 土：ローム粒含む。
5 黒褐色土：ロームブロック含む。
第５号土坑
第６号土坑
第７号土坑
9 号 墳
0
1 m

第43図　第１～７号土坑

第９号土坑（第44図）

調査地点２の南西、Ｃ－６グリッドに位置する。南１ｍには２号墳がある。長軸は1.20m、短軸は0.80mで、確認面からの深さは0.16mである。立ち上がりは緩やかな傾斜で掘り込まれており、底面はやや凹凸がみられるもののほぼ平坦である。平面プランは瓢箪状とでもいうべき形態である。

本土坑からは多数の円筒埴輪(第47図２～13・第48図14～17)がまとまって検出された。胎土はやや粗雑で、色調は橙色、内外面ともにハケメ整形のものが多くみられる。

第47図２は口縁～胴部片。大型で外面には赤彩が施されている。３～５は口縁部片。４の外面にも赤彩がみられる。６～13は胴部片。６～９・12には突帯がみられ、台形状を呈するもの（８）とややM字状を呈するもの（６・７・９・12）の２者がある。第48図14～17は胴下～基底部片。突帯はいずれもややM字状を呈するタイプのもので、底面には刻目と押圧痕の２者がみられる。

第10号土坑（第44図）

調査地点２の南西、Ｅ－３グリッドに位置する。２号墳周溝の外側を若干切っている。径1.30m前後の不整円形状を呈する。立ち上がりは緩やかな傾斜で掘り込まれている。

出土遺物はみられなかった。

第11号土坑（第44図）

調査地点２の東端中央、Ｐ・Ｑ－10グリッドに位置する。土坑西側は調査区外にある。正確な規模は不明であるが、南北は1.27mある。径1.30m前後の隅丸正方形になると思われる。確認面からの深さは0.60mである。立ち上がりはほぼ垂直であり、底面はほぼ平坦である。

出土遺物はみられなかった。

第12号土坑（第44図）

調査地点２の東端中央、Ｑ－11グリッドに位置する。南側には11号土坑が隣接している。11号土坑同様、土坑の西側は調査区外にある。正確な規模は不明であるが南北の径は1.00mある。確認面からの深さは0.59mで、立ち上がりはほぼ垂直である。底面はほぼ平坦である。平面プランは隅丸の正方形になろうか。

出土遺物はみられなかった。

第13号土坑（第44図）

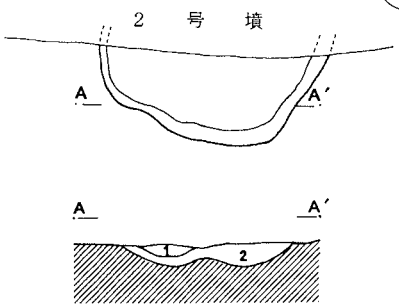
調査地点２の東中央、Ｏ－11グリッドに位置する。長軸は1.32m、短軸は0.83mで、確認面からの深さは0.25mである。立ち上がりはほぼ垂直であり、底面は平坦である。平面プランは長方形である。

出土遺物はみられなかった。

第14号土坑（第44図）

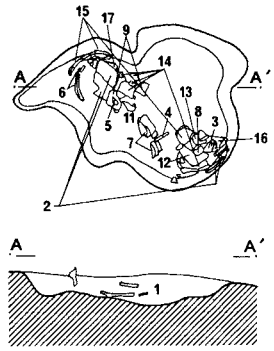
調査地点２の南東、Ｍ－５グリッドに位置する。北側には１号住が隣接している。長軸1.22m、短軸

第８号土坑



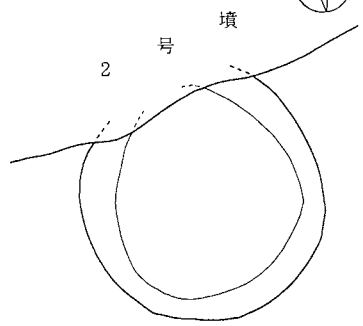
土層説明（ＡＡ´）
1 褐 色 土：ローム粒含む。
2 黒褐色土：ロームブロック含む。

第９号土坑

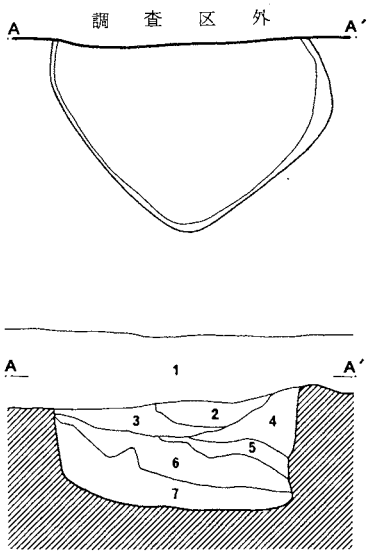


土層説明（ＡＡ´）
1 黒褐色土：ローム粒含む。

第 10 号土坑



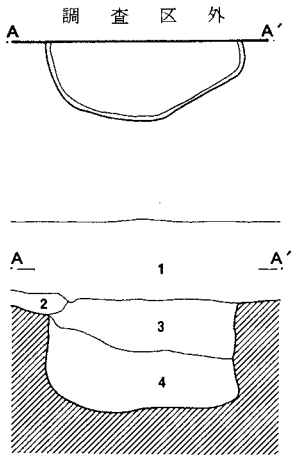
第 11 号土坑



土層説明（ＡＡ´）
1 表　　土
2 黒褐色土：ローム粒少量含む。
3 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック少量含む。
4 黒褐色土：ローム粒・ロームブロック少量含む。
5 暗褐色土：ローム粒少量、ロームブロック多量含む。
6 黒褐色土：ローム粒少量、ロームブロック多量含む。
7 黄褐色土：ローム粒、ロームブロック多量、黒色ブロック少量含む。

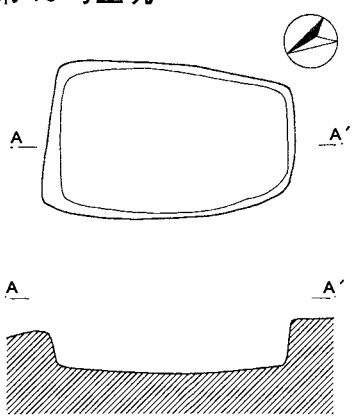
0　　1 m

第 12 号土坑

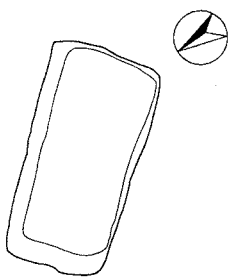


土層説明（ＡＡ´）
1 表　　土
2 暗褐色土：ローム粒含む。
3 黒褐色土：ローム粒・ロームブロック少量含む。
4 黒褐色土：ローム粒少量、ロームブロック多量含む。

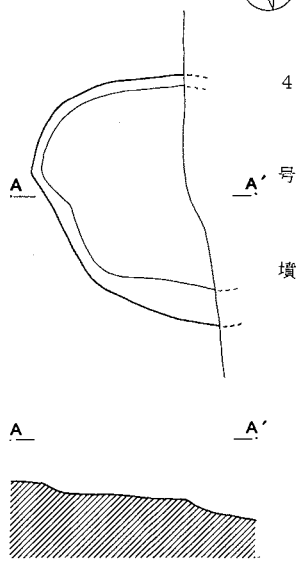
第 13 号土坑



第 14 号土坑



第 15 号土坑



第44図　第８～15号土坑

0.62mである。立ち上がりは南側、及び西側が垂直であるが、その他はやや急な傾斜で掘り込まれている。平面プランは長方形である。

出土遺物はみられなかった。

第15号土坑（第44図）

調査地点２の中央より南、Ｌ－３グリッドに位置する。北側には２～４号溝跡が東西に走っている。本土坑は４号墳の周溝外側を切っている。正確な規模は不明であるが、南北は1.37mある。立ち上がりは緩やかな傾斜で掘り込まれており、底面は４号墳に向ってやや下っている。確認面からの深さは最も深い所で0.08mである。平面プランは不整円形になろうか。

出土遺物はみられなかった。

第16号土坑（第45図）

調査地点２の北西端、Ｇ－14グリッドに位置する。本土坑の南側には同タイプの土坑が多数集中してみられる。11号墳周溝を切っており、南東側の立ち上がりは11号墳周溝外側の立ち上がりと重なっている。長軸は1.17m、短軸は1.00mで、確認面からの深さは0.42mである。立ち上がりは急な傾斜で掘り込まれており、底面は平坦である。平面プランは不整円形である。

遺物は11号墳からの流れ込みである埴輪片が微量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

第17号土坑（第45図）

調査地点２の北西端、Ｇ－13グリッドに位置し、18号土坑の東側に隣接している。本土坑も11号墳周溝を切っており、周溝外側の立ち上がりと接している。径1.10m前後、確認面からの深さは0.34mである。立ち上がりはほぼ垂直であり、底面は平坦である。平面プランは円形である。

遺物は11号墳からの流れ込みである埴輪片が微量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

第18号土坑（第45図）

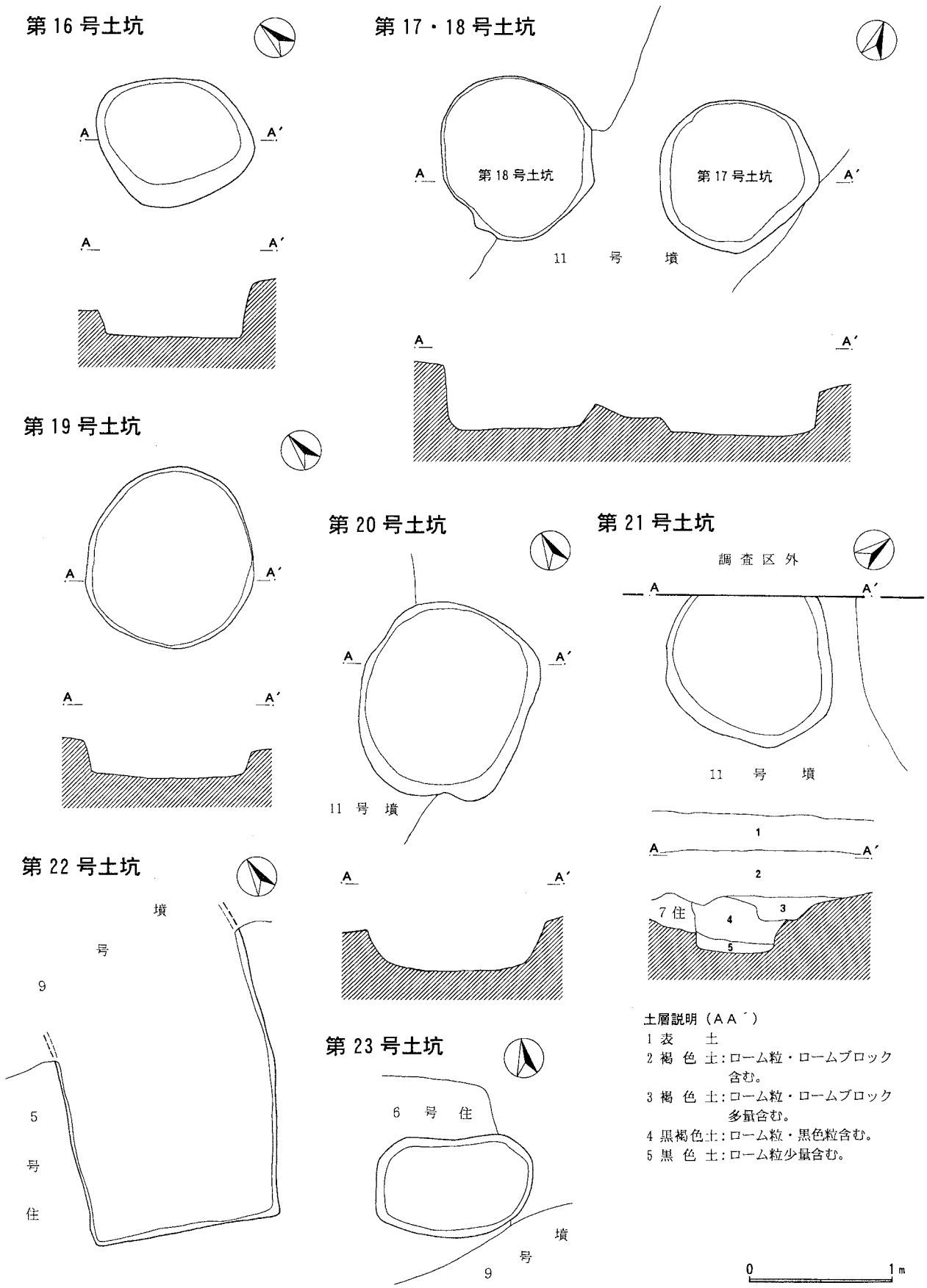
調査地点２の北西端、Ｇ－13グリッドに位置する。11号墳墳丘部を切っており、東側には17号土坑が隣接している。径1.15m前後、確認面からの深さは0.35mである。立ち上がりは東側がやや傾斜をもっているが、その他はほぼ垂直であり、底面は平坦である。平面プランは円形に近い。

遺物は11号墳からの流れ込みである埴輪片が微量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

第19号土坑（第45図）

調査地点２の北西端、Ｇ－12グリッドに位置する。11号墳の周溝を切っており、南側には20号土坑が隣接している。径1.25m前後、確認面からの深さは0.23mである。立ち上がりは垂直、もしくは急な傾斜で掘り込まれており、底面は平坦である。平面プランは円形である。

遺物は11号墳からの流れ込みである埴輪片が微量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。



第45図　第16～23号土坑

第20号土坑（第45図）

調査地点２の北西端、Ｇ・Ｈ－12グリッドに位置する。11号墳周溝の外側立ち上がりを切っている。北側には19号土坑が隣接している。径1.30m前後、確認面からの深さは0.32mである。立ち上がりはやや急な傾斜で掘り込まれており、底面は平坦である。平面プランは南北にやや長い円形である。

遺物は11号墳からの流れ込みである埴輪片が微量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

第21号土坑（第45図）

調査地点２の北西端、Ｆ－11・12グリッドに位置する。11号墳周溝内側の立ち上がりを切っている。土坑西側の立ち上がりは調査区外にあるが、南北は1.18mあり、径1.20m前後の円形になろうか。確認面からの深さは0.42mである。立ち上がりは調査区沿い北側では墳丘部側がやや急な傾斜で掘り込まれているのに対し、西側ではほぼ垂直に掘り込まれているのが確認された。底面は平坦である。

遺物は11号墳の流れ込みである埴輪片が微量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

第22号土坑（第45図）

調査地点２の北東、Ｑ－13グリッドに位置する。９号墳外周溝、及び６号住を切っている。長軸は不明であるが、短軸は1.54mで、立ち上がりはほぼ垂直である。平面プランは長方形になろうか。

遺物は９号墳外周溝からの流れ込みである円筒埴輪片が微量検出されたが、図示可能なものは１点のみである。

第48図18は円筒埴輪・胴部片。朝顔形と思われ、内外ともにヘラナデ整形である。

第23号土坑（第45図）

調査地点２の北ほぼ中央、Ｊ・Ｋ－14グリッドに位置する。７号住の東側の床面、壁を切っている。本土坑の南側には10号墳外周溝がある。長軸1.14m、短軸は0.72mである。立ち上がりはやや緩やかな傾斜で掘り込まれている。平面プランは豆形状を呈している。

遺物は７号住からの流れ込みである土器片が微量検出されたが、図示可能なものはみられなかった。

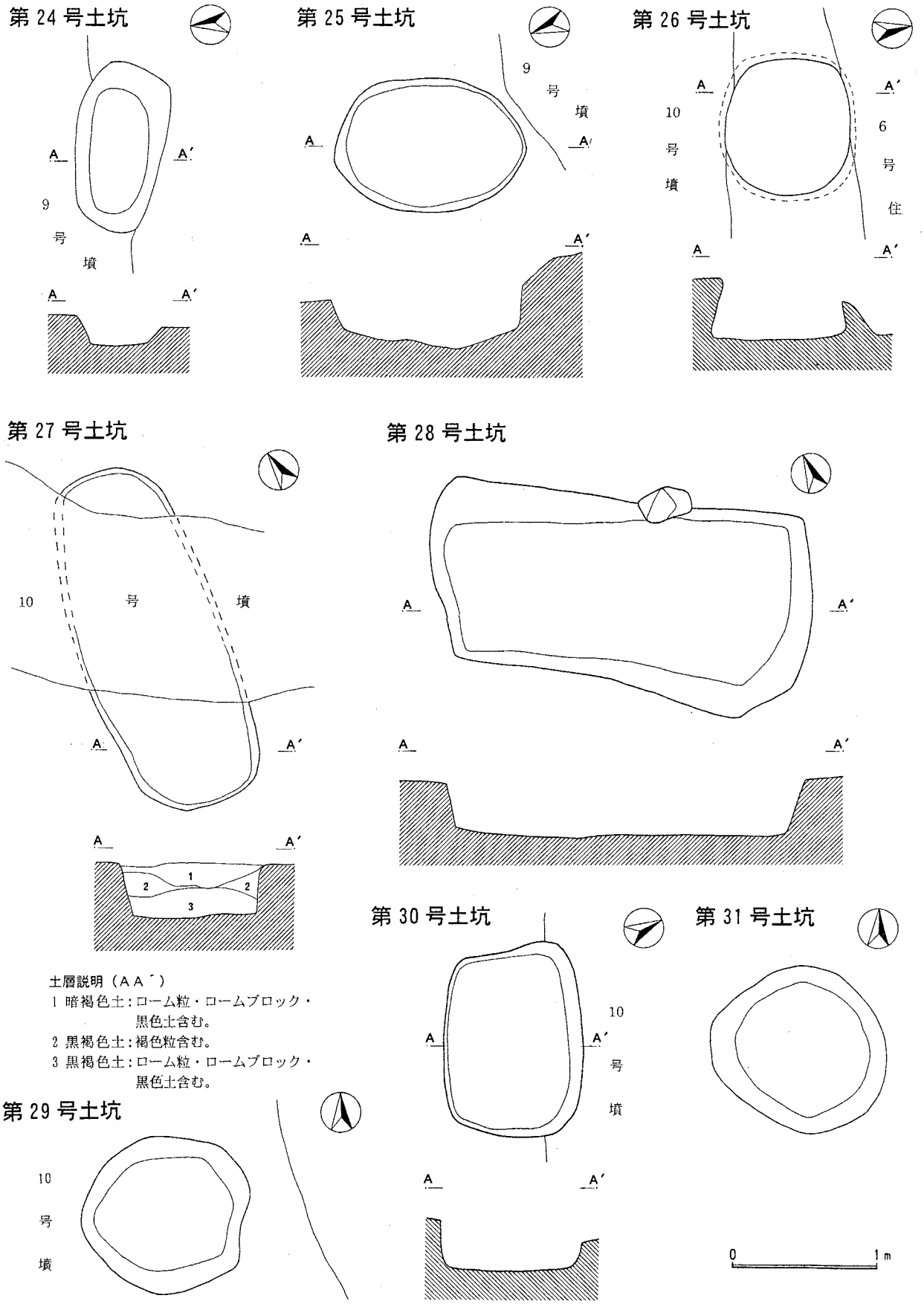
第24号土坑（第46図）

調査地点２の北東端、Ｐ－13・14グリッドに位置する。９号墳外周溝の内側を切っている。北側には６号土坑が隣接している。長軸1.22m、短軸0.64mで、確認面からの深さは0.22mである。立ち上がりはやや急な傾斜で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。平面プランはややいびつな楕円形状を呈する。

出土遺物はみられなかった。

第25号土坑（第46図）

調査地点２の北ほぼ中央、Ｋ・Ｌ－13グリッドに位置する。10号墳の外周溝底面より検出されたが、周辺の土坑の存在から考えて10号墳を切って構築されたと思われる。長軸1.36m、短軸0.96m、確認



土層説明（ＡＡ´）
1 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック・黒色土含む。
2 黒褐色土：褐色粒含む。
3 黒褐色土：ローム粒・ロームブロック・黒色土含む。

第46図　第24～31号土坑

面からの深さは0.66mである。立ち上がりは急な傾斜で掘り込まれており、底面には凹凸がみられる。平面プランは楕円形である。

出土遺物はみられなかった。

第26号土坑（第46図）

調査地点２の北ほぼ中央、Ｊ－13グリッドに位置する。北側では10号墳内周溝を、南側では７号住を切っている。径0.90m前後の円形に近い形状をしており、確認面からの深さは0.44mである。下場すべてがオーバーハングしており、断面形はフラスコ状を呈している。底面はほぼ平坦である。

出土遺物はみられなかった。

第27号土坑（第46図）

調査地点２の北中央、Ｉ－13グリッドに位置する。10号墳内周溝を南北に切っている。長軸2.51m、短軸0.97m、確認面からの深さは0.40mである。立ち上がりはほぼ垂直、もしくは急な傾斜で掘り込まれている。底面は平坦である。平面プランは楕円形である。

出土遺物はみられなかった。

第28号土坑（第46図）

調査地点２の北東、Ｍ・Ｎ－12グリッドに位置する。土坑上面を南北に７号溝が走っているが、両者の新旧関係については確認できなかった。また、北東側中央にピットがみられるが、これについても新旧は確認できなかった。長軸2.77m、短軸1.49mで、確認面からの深さは0.39mである。立ち上がりは急な傾斜で掘り込まれており、底面は平坦である。平面プランは長方形状を呈する。

遺物は円筒埴輪の破片が１点のみ検出されている。

第 48図19は円筒埴輪の胴部片。台形状の突帯を有する。

第29号土坑（第46図）

調査地点２の北端、Ｈ－14グリッドに位置する。10号墳外周溝底面より検出されたが、他の土坑同様、10号墳を切って構築されたと思われる。土坑の北側はトレンチによって破壊されているため、詳細については不明である。平面プランは円形になろうか。

出土遺物はみられなかった。

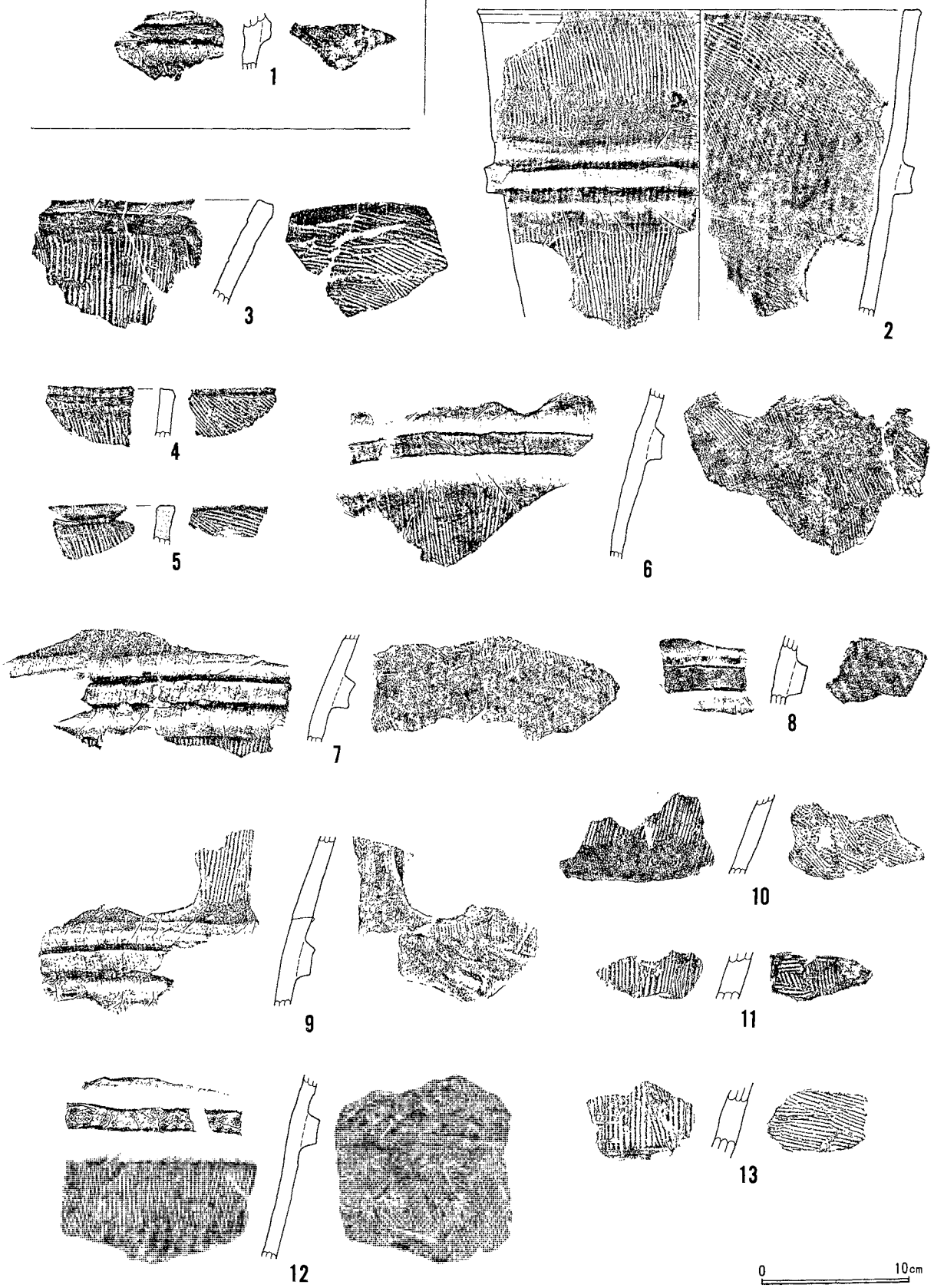
第30号土坑（第46図）

調査地点２の中心よりやや北、Ｊ－12グリッドに位置する。10号墳外周溝の立ち上がりを切っている。長軸1.40m、短軸0.98mで、確認面からの深さは0.27mである。立ち上がりはほぼ垂直で、底面は平坦である。平面プランは長方形状をしている。

出土遺物はみられなかった。

第１号土坑

第９号土坑

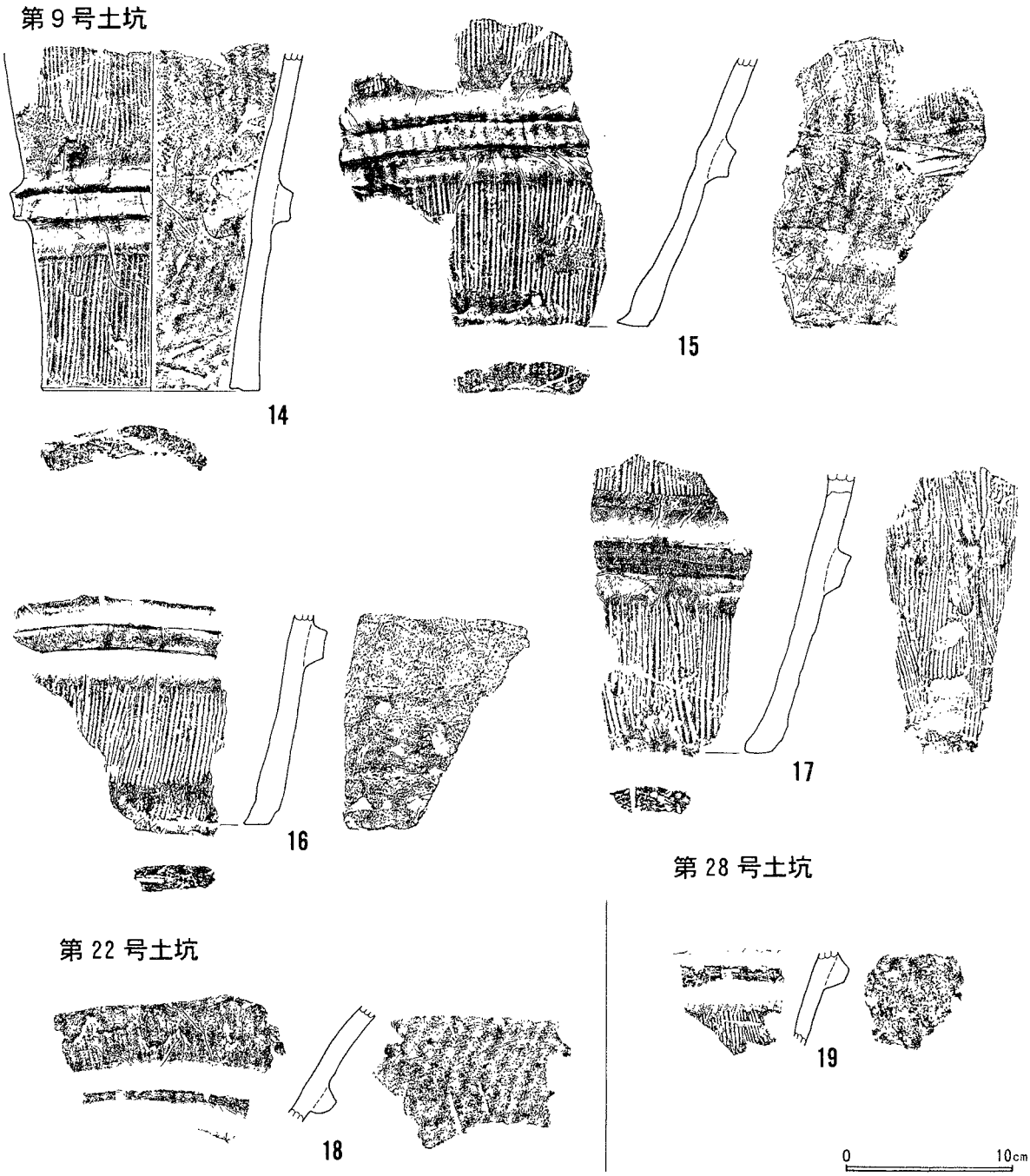


第47図　土坑出土遺物（1）

第31号土坑（第46図）

調査地点２のほぼ中央、Ｉ－９グリッドに位置する。ちょうど８号墳墳丘部南側にある。規模は径1.40m前後の円形である。立ち上がりは緩やかに掘り込まれており、底面は平坦である。

出土遺物はみられなかった。



第48図　土坑出土遺物（2）

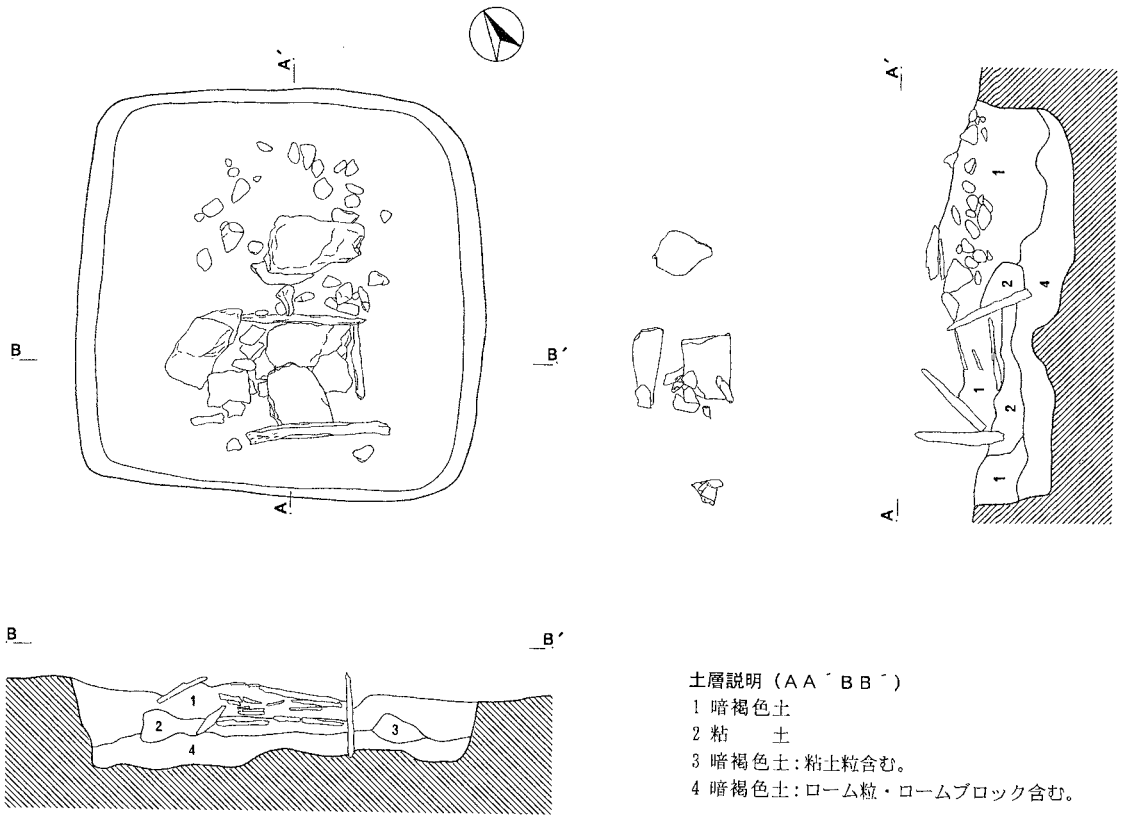
第25表　土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 37・38	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ヘラナデ。内 斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	白色粒　黒色粒 小石 やや粗	橙　色	良好	口縁部片	第1号土坑出土
2 39・40	円　筒 埴　輪	(30.4) (21.2) －	外 縦・斜位ハケメ。内 斜位ハケメ。口縁部やや開く。突帯台形状呈する。透孔有。	砂粒　黒色粒 赤色粒　小石 やや粗	赤　色	良好	口～胴 20%	第9号土坑出土
3 37・38	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 横・斜位ハケメ。口縁部直線的に開く。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　小石　やや粗	外　浅黄橙色 赤　色 内　にぶい橙色	良好	口縁部片	第9号土坑出土
4 37・38	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。口縁部ほぼ直立する。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 小石　密	にぶい橙色	良好	口縁部片	第9号土坑出土
5 37・38	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。口縁部ほぼ直立する。	砂粒　黒色粒 赤色粒　小石 密	橙　色	良好	口縁部片	第9号土坑出土
6 37・38	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ、横位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 小石　粗	橙　色	良好	胴部片	第9号土坑出土
7 37・38	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ、縦・斜位ハケメ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　小石　やや粗	外　橙　色 内　にぶい橙色	良好	胴部片	第9号土坑出土
8 37・38	円　筒 埴　輪	－ － －	内 斜位ヘラナデ、縦位ハケメ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　小石　やや粗	外　にぶい橙色 内　橙　色	良好	胴部片	第9号土坑出土
9 39・40	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ヘラナデ、一部ハケメ。突帯台形状呈する。透孔有。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 角閃石　やや粗	外　にぶい橙色 内　橙　色	良好	胴部片	第9号土坑出土
10 39・40	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　赤色粒 石英　小石 やや粗	橙　色	良好	胴部片	第9号土坑出土
11 39・40	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦・斜位ハケメ。内 縦・横位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	外　にぶい赤褐 橙　色 内　橙　色	良好	胴部片	第9号土坑出土
12 39・40	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦・斜位ハケメ。内 斜位ハケメ、横位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　黒色粒 石英　小石 やや粗	にぶい橙色	良好	胴部片	第9号土坑出土
13 39・40	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	外　橙　色 内　にぶい橙色	良好	胴部片	第9号土坑出土
14 39・40	円　筒 埴　輪	－ (20.6) 13.2	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ、ヘラナデ。突帯台形状呈する。底面刻目有。	砂粒　黒色粒 赤色粒　石英 小石　密	にぶい橙色	良好	胴～底 20%	第9号土坑出土
15 39・40	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ハケメ、斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。底面押圧痕有。	砂粒　白色粒 黒色粒　角閃石 小石　やや粗	外　にぶい橙色 橙　色 内　橙　色	良好	底部片	第9号土坑出土
16 39・40	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 横位ヘラナデ、一部斜位ハケメ。突帯台形状呈する。底面押圧痕有。	砂粒　黒色粒 赤色粒　小石 やや粗	外　橙　色 内　黄橙色	良好	底部片	第9号土坑出土
17 39・40	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ハケメ。突帯台形状呈する。底面刻目有。	黒色粒　石英 小石 やや粗	橙　色	良好	底部片	第9号土坑出土
18 39・40	朝顔形 円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ヘラナデ。内 横・斜位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 石英　小石　やや粗	外　にぶい赤褐 内　明赤褐色	良好	胴部片	第22号土坑出土
19 39・40	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦・横位ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	外　橙　色 内　明赤褐色	良好	胴部片	第28号土坑出土

（3）墓　壙

第１号墓壙（第49図）

調査地点２の北東端、P－15グリッドに位置し、９号墳内周溝を切っている。遺構は確認面段階で石材が既に露出した状態であった。検出時には既に崩れた状態であったが、箱型に積み上げた構造であることは確認できた。組み合わさった石材のまわりからは長軸2.17m、短軸2.14m、確認面からの深さ0.57m



第49図　第１号墓壙

の掘り込みがみられた。土層断面の観察からみると、石材は掘り込みの底面までほとんどは到達しておらず、ある程度土を埋めた段階で設置したものと推察される。石材には主に緑泥片岩を使用しており、その周辺、特に北側にに川原石を敷き詰めてあった。なお、墓壙の東側0.8m離れた箇所にも石材が検出されたが、これは削平を受けた際に散ったものと思われる。

出土遺物は江戸時代の磁器類が若干検出されたが、小片であり図示不可能であった。

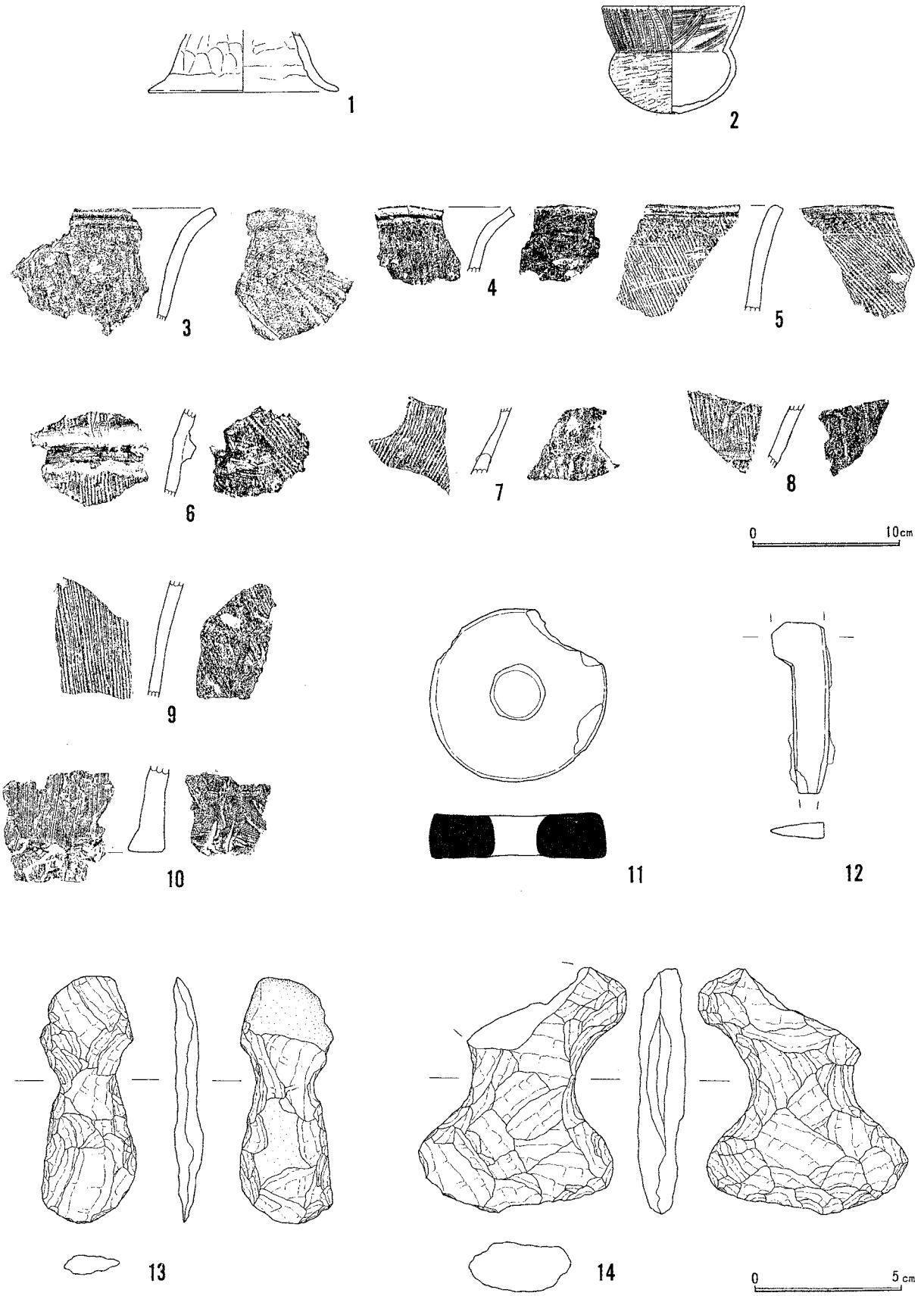
（4） ピット

ピットは調査地点２から計９基が検出された。主に調査区北東部に集中しており、７号溝跡の北側に等間隔でみられることから７号溝跡に付随するものであろう。その他にも調査区内には点在しているが、単独での検出であり、規則的に並ぶものはみられない。

出土遺物はみられなかった。

（5）遺構外出土遺物

掲載した遺物はすべて調査地点２から検出されたものである。遺構が多数検出された古墳時代前・後期の土器、円筒埴輪が主体となる。また、遺構は検出されていないものの、遺物のみ検出された他時代のものもみられる。検出された遺物には、土器（土師器）、埴輪、土製品、鉄製品、石器等がある。



第50図　遺構外出土遺物

第50図１・２は土師器。１は高坏の脚部片。２は坩で、内外面とも丁寧なミガキと赤彩が施されている。３～10は円筒埴輪の破片。３～５は口縁部片であるが、４・５は外反度が強く、ヘラナデ整形であることから朝顔形であろう。６～９は胴部片で、７には透かし孔がみられる。10は基底部片である。11は径６㎝前後、厚さ1.4～1.6㎝の円形状の須恵器である。中心部分には径1.9㎝の孔が設けられている。紡錘車と思われる。部分的に欠損箇所がみられる。12は刀子。両端を欠く。13・14は縄文時代の打製石斧。ともに分胴形であるが、抉りが13は浅く、14は深い。13の片面には自然面を残す。

第26表　遺構外出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	器　種	口径 器高 底径	技法・形態の特徴	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1 －	土師器 高　坏	－ 4.2 (13.0)	外 脚部縦位ヘラナデ。裾部横ナデ。内 脚部横位ヘラナデ。裾部横ナデ。輪積痕有。脚部膨らむ。裾部緩やかに広がる。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 やや粗	外　灰褐色 内　赤　色 灰褐色	良好	脚部 40%	
2 －	土師器 坩	(10.0) 7.4 1.2	外 口縁横・縦ミガキ。胴横ミガキ。内 口縁横・斜ミガキ。胴横ヘラナデ。赤彩。口縁直線的に開く。胴部球形。上げ底。	砂粒　黒色粒 角閃石 密	赤褐色	良好	口 50% 胴 80% 底100%	
3 41・42	朝顔形 円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ヘラナデ。内 斜位ヘラナデ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　やや粗	赤　色	良好	口縁部片	A－６G出土。
4 41・42	朝顔形 円筒 埴輪	－ － －	外 縦位ヘラナデ。内 横位ヘラナデ。口縁部外反する。	砂粒　白色粒 赤色粒　小石 密	外　赤褐色 内　橙　色	良好	口縁部片	
5 41・42	円　筒 埴　輪	－ － －	内外ともに斜位ハケメ。口縁部やや開く。	白色粒　黒色粒 赤色粒　小石 やや粗	外　にぶい橙色 内　にぶい褐色	良好	口縁部片	
6 41・42	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 斜位ハケメ、ヘラナデ。突帯台形状呈する。	砂粒　白色粒 黒色粒　赤色粒 小石　粗	明赤褐色	良好	胴部片	
7 41・42	円　筒 埴　輪	－ － －	外 斜位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。透孔有。	砂粒　白色粒 赤色粒　小石 やや粗	外　にぶい橙色 内　にぶい褐色	良好	胴部片	
8 41・42	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　小石 密	浅黄橙色	良好	胴部片	J－12G出土。
9 41・42	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 横・斜位ヘラナデ。	白色粒　黒色粒 赤色粒　石英 やや粗	橙　色	良好	胴部片	
10 41・42	円　筒 埴　輪	－ － －	外 縦位ハケメ。内 縦位ヘラナデ。	砂粒　白色粒 黒色粒　石英 小石　やや粗	外　にぶい橙色 灰褐色 内　にぶい赤褐	良好	基底部片	

第27表　遺構外出土土製品・鉄製品・石器観察表

No.	種 別	最大長(㎝)	最大幅(㎝)	最大厚(㎝)	重量(g)	備　　考
11	紡錘車	(6.2)	5.0	4.0	－	須恵器。
12	刀　子	－	1.8	0.55	－	両端欠。I－８G出土。
13	打製石斧	(6.2)	5.0	4.2	－	
14	打製石斧	(6.2)	5.0	4.3	－	一部欠。

V 調査のまとめ

瀬戸山遺跡、及び瀬戸山古墳群は、今回報告する昭和57年度の調査以前にも発掘調査が行われている（熊谷市 1963）（貞末 1973）（熊谷市教委 1978）。これらについては正式な報告がほとんどないため、内容については不明な点が多いことと思う。また今回報告する分については「吉岡配水場遺跡」、「吉岡中学校校庭遺跡」、あるいは「前原遺跡」等様々な形で呼称されてきたため、混乱を招いたことと思われる。発掘調査から大分経ってしまったが、今回ようやく報告できることとなり、名称を正式に「瀬戸山遺跡」、及び「瀬戸山古墳群」として公表するものである。

瀬戸山遺跡は縄文時代中期を上限として、古墳時代、奈良・平安時代、江戸時代と続く複合遺跡である。遺跡範囲南東部での過去の発掘調査（貞末 1973）では、古墳時代前期の遺構が検出されており、今回の報告分と合わせて主体となるのは古墳時代前期の集落跡である。

瀬戸山古墳群は古墳時代後期の群集墳であり、今回報告する古墳13基と調査地点１・２の中間に位置する古墳１基、瀬戸山遺跡の範囲南東部に所在する古墳 19基を合わせて現在までに33基が確認されている。南東部の古墳群についても過去数回にわたって発掘調査が行われており、その内容の一端が明らかとなっている（熊谷市 1963）（貞末 1973）（熊谷市教委 1978）。

では以下、調査のまとめとして遺跡の主体となる古墳時代前期と古墳時代後期の古墳群について簡単にまとめてみたい。

古墳時代前期

今回報告する調査地点から検出された遺構は竪穴住居跡８軒で、すべて調査地点２より検出された。後世の遺構や削平により破壊状況が著しく、残存状態の悪いものがほとんどであったが、第１・５号住居跡からは良好な資料が得られた。ともに住居跡南東隅にある貯蔵穴、及びその周辺からまとまって土器が出土しており、土師器・壺、甕、高坏、器台、坩、椀、ミニチュア土器等バラエテイーがみられる。中でも高坏や器台、坩等の割合が多くみられ、このうち高坏は口縁部が大きく開き、坏部には稜を有し、直立に近い脚部とほぼ平坦の裾部を持つタイプのものであることから、古墳時代中期の所謂和泉式土器に近い。また完形品はみられないものの、Ｓ字状を呈する口縁や折り返した台部を持つ器壁の薄い甕の破片が検出されており、外来系土器もみられる。器種構成や高坏の特徴、及び外来系土器の存在等を踏まえると、１・５号住居跡は古墳時代前期でも新しい段階に位置づけられる。

住居跡は調査区の東側に集中しており、１号住と６号住を結ぶラインより以東に集落跡が広がっていたと思われる。集落跡の南限、及び東限は不明であるが、昭和47年に行われた遺跡範囲南東部における発掘調査では同段階の住居跡が検出されている（貞末 1973）。詳細は不明であるため断定はできないが、このことからするとかなり大規模な集落跡になる可能性が考えられる。また、北西約1.5km に所在する万吉下原遺跡では盛土を有する方形周溝墓が３基検出されており、墓域と考えられる。

本遺跡の所在する江南台地や、台地南側の比企丘陵上では古墳時代前期の遺跡は非常に少ない。こうした中、本遺跡は大規模集落跡の可能性が考えられ、かつ墓域も存在することが確認されており、希有な存在といえる。今後はまず集落、及び墓域の具体的な広がり、存続期間等の確認が課題となろう。

古墳時代後期

瀬戸山古墳群中、南東部において確認されている古墳群は現在19基あり、過去３回の調査によって計５基が発掘調査されている（熊谷市 1963）（貞末 1973）（熊谷市教委 1978）。

昭和38年の調査では、本古墳群唯一の前方後円墳である伊勢山古墳が調査されている（熊谷市 1963）。全長41m、主体部は凝灰岩を使用した片袖式の横穴式石室である。出土遺物には直刀・刀子・鉄鏃・鉄製轡・金環・円筒埴輪・土器などがみられる。築造年代は６世紀後半と考えられており、本古墳群中で最も古いものとされる。

昭和47年の調査では２基が発掘調査されている（貞末 1973）。１号墳は径28mの円墳、２号墳は破壊状況が著しいため不明である。主体部はいずれも凝灰岩の載石を用いた横穴式石室である。出土遺物は鉄鏃・玉類等だけであり、埴輪はみられない。石室の構造や出土遺物中に埴輪がないこと等から、これらの古墳には７世紀前半の年代が与えられている。

昭和52年の調査では２基が発掘調査されている（熊谷市教委 1978）。これらの古墳群は「楊井薬師寺古墳」という名称で呼ばれ、開発予定地内では３基の古墳が確認されたが、このうちの２基（１・３号墳）が破壊を免れず調査の対象となった。１号墳は径32mの円墳、３号墳は破壊状況が著しいが径10m程の円墳である。主体部はいずれも凝灰岩の載石を用いた横穴式石室である。出土遺物に埴輪はなく、１号墳の石室から鉄製品・直刀の破片が検出されているのみである。これらの古墳群は７世紀末～８世紀初頭の年代が想定されている。

以上、南東部の古墳群は６世紀後半から７世紀末～８世紀初頭頃まで築造されたと想定されている。

一方、今回報告する古墳群は計13基である。このうち12基が検出された調査地点２では調査区全面から検出されたが、調査地点１では調査区南東端から１基（13号墳）が検出されたのみである。現時点では13号墳が最北となる。墳丘はいずれも削平されていたため、検出できたのは周溝のみである。明確な主体部と呼べるものは検出されていないが、過去の調査例や周辺の古墳群からみると、同じく凝灰岩の載石による横穴式石室であろう。墳形は調査区の関係から全形を知り得るものは少ないが円墳が主体となる。ただし、二重に周溝を持つ９・10号墳については、同じ二重周溝をもつ類例として群馬県尾島町に所在する世良田諏訪下遺跡・11号墳がある（尾島町教委 1998）。11号墳は全長23.8mの帆立貝式の前方後円墳であり、二重に巡る周溝の特徴が９・10号墳のそれと非常に似通った状況を呈していることから、９・10号墳も帆立貝式の前方後円墳になる可能性も考えられる。

古墳から出土した遺物には土器・埴輪がみられるが、各古墳によりその内容・量に違いがみられた。遺物が検出されたのは１・９・11号墳である。１号墳からは唯一形象埴輪・馬が、９号墳からは破片であるが多量の埴輪が、11号墳からは土師器・坏がまとまって検出された。一方、遺物がほとんど検出されなかったのは２～８・10・12・13号墳であり、すでに埴輪を持たない古墳群と考えられる。

このことからすると、唯一形象埴輪が検出された１号墳を最古として９・11号墳が続き、そして埴輪を持たない古墳群が続くという図式が考えられ、概ね南東部の古墳群と同じ年代が考えられる。よって、本古墳群は６世紀後半から７世紀末～８世紀初頭段階まで築造された群集墳といえる。

本古墳群を含めて周辺には無数の古墳群が確認されているものの、これらの古墳群にみあう集落跡は見当たらない。今後は同段階の集落跡の確認が課題として挙げられよう。

引用・参考文献

大里郡市町村文化財担当者会　1992　「大里地域の遺跡」　『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会

川本町遺跡調査会　2000　『百済木－くだらぎ－ 凸版印刷(株)川本工場内発掘調査の概要』

熊谷市　1963　『熊谷市史 』前編

熊谷市教育委員会　1978　『楊井薬師寺古墳発掘調査報告書』

群馬県新田郡尾島町教育委員会　1998　『世良田諏訪下遺跡　歌舞妓遺跡』　尾島町埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会　1996　『千代遺跡群 縄文時代編』

1998　『千代遺跡群 弥生・古墳時代編』

江南町教育委員会　1988　『本田 東台 上前原』　江南町文化財調査報告 第８集

1996　『丸山遺跡』　江南町文化財調査報告 第11 集

1999　『塩古墳群 狸塚27号墳発掘調査報告書』　江南町文化財調査報告 第12集

埼玉県教育委員会　1983　「吉岡中学校校庭遺跡」　『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和57年度

1983　「吉岡配水場遺跡」　『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和57年度

1991　『万吉下原遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査報告 第18集

1994　『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1992　『白草遺跡Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第118集

1992　『新屋敷遺跡－Ｂ区－』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第123集

1993　『白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第129集

1994　『大野田西遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第138集

1994　『新屋敷遺跡－Ａ区－』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第140集

貞末堯司　1973　「熊谷市瀬戸山遺跡の調査」　『第6 回遺跡発掘調査報告会』

嵐山町遺跡調査会　1987　『古里古墳群』　嵐山町遺跡調査会報告２

写　真　図　版

図版 1

調査地点 1 遠景

調査地点 1 作業風景

調査地点 2 周辺風景

調査地点 2 全景

図版 3

第 1 号竪穴住居跡

第 1 号竪穴住居跡遺物出土状況（1）

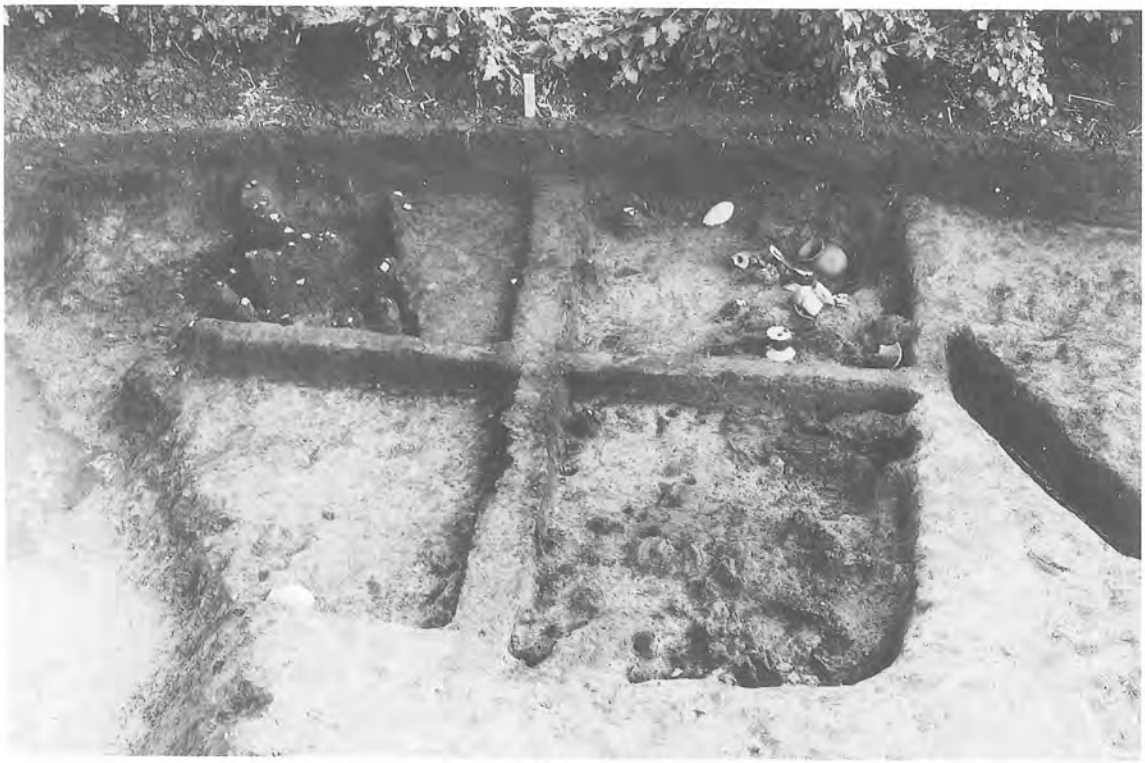
第 1 号竪穴住居跡遺物出土状況（2）

第 2 号竪穴住居跡

第 3 号竪穴住居跡

図版 5

第 4 号竪穴住居跡



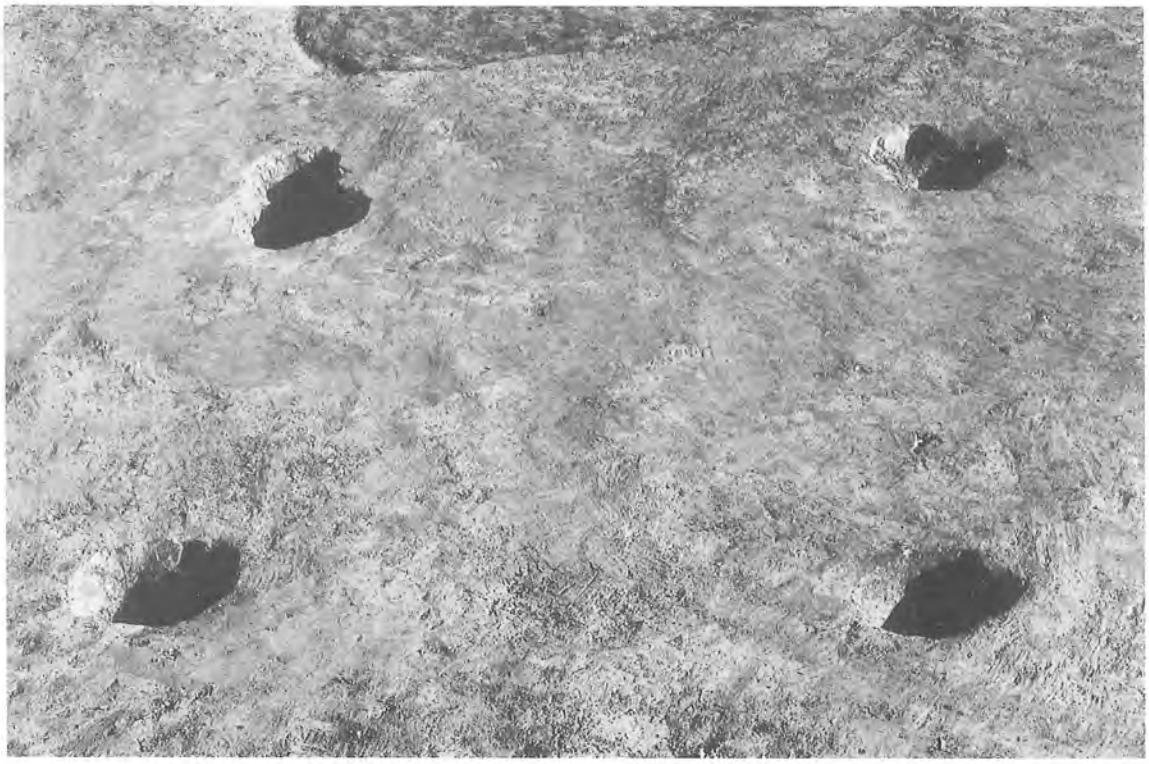
第 5 号竪穴住居跡

第 5 号竪穴住居跡遺物出土状況

第 6 号竪穴住居跡

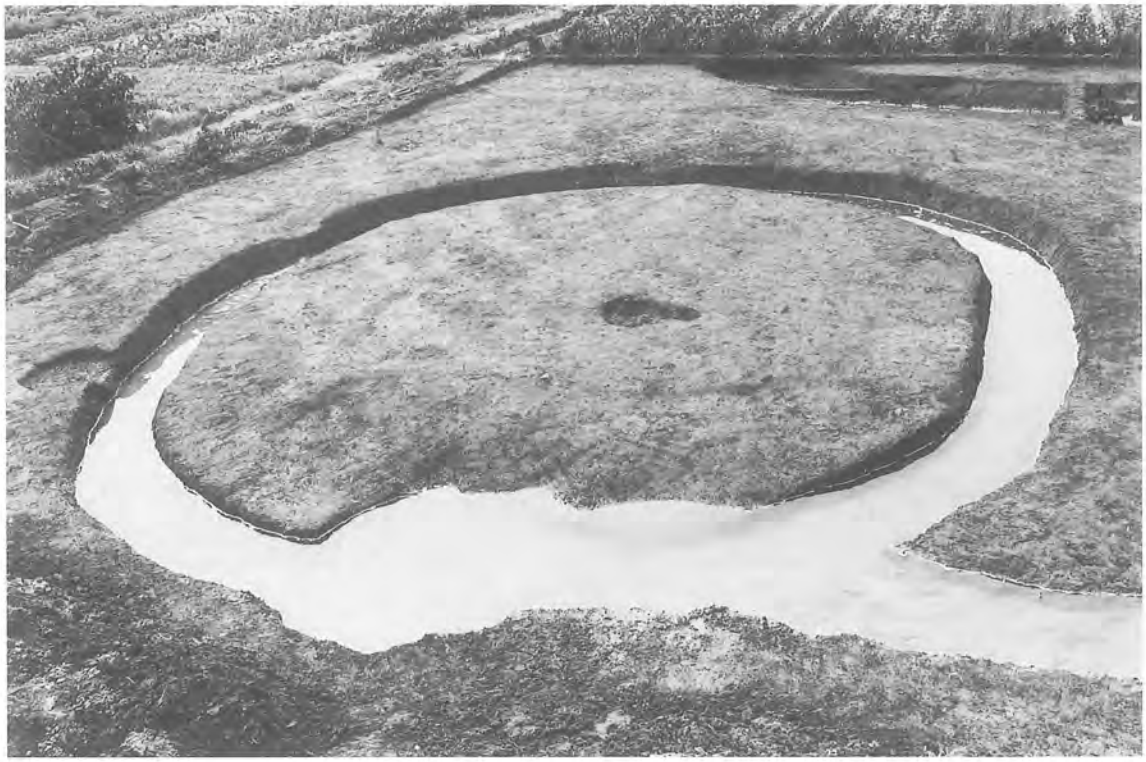
図版 7

第 7 号竪穴住居跡



第 8 号竪穴住居跡

第1号墳



第2号墳

図版 9

第 2 号墳遺物出土状況（1）

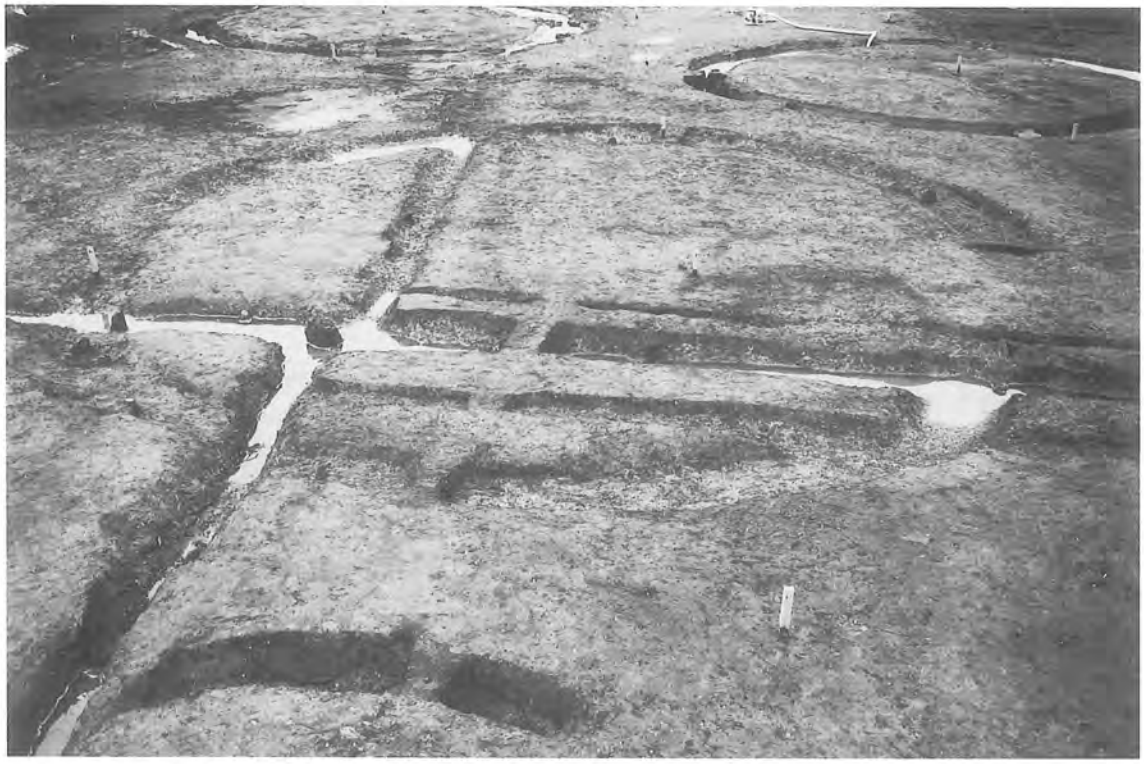
第 2 号墳遺物出土状況（2）

第 3 号墳

第４号墳・第２～４号溝跡

第５号墳・第５号溝跡

図版11



第6号墳・第2～5号溝跡

第7号墳

第8号墳

第9号墳

図版13

第10号墳

第10号墳西側周溝

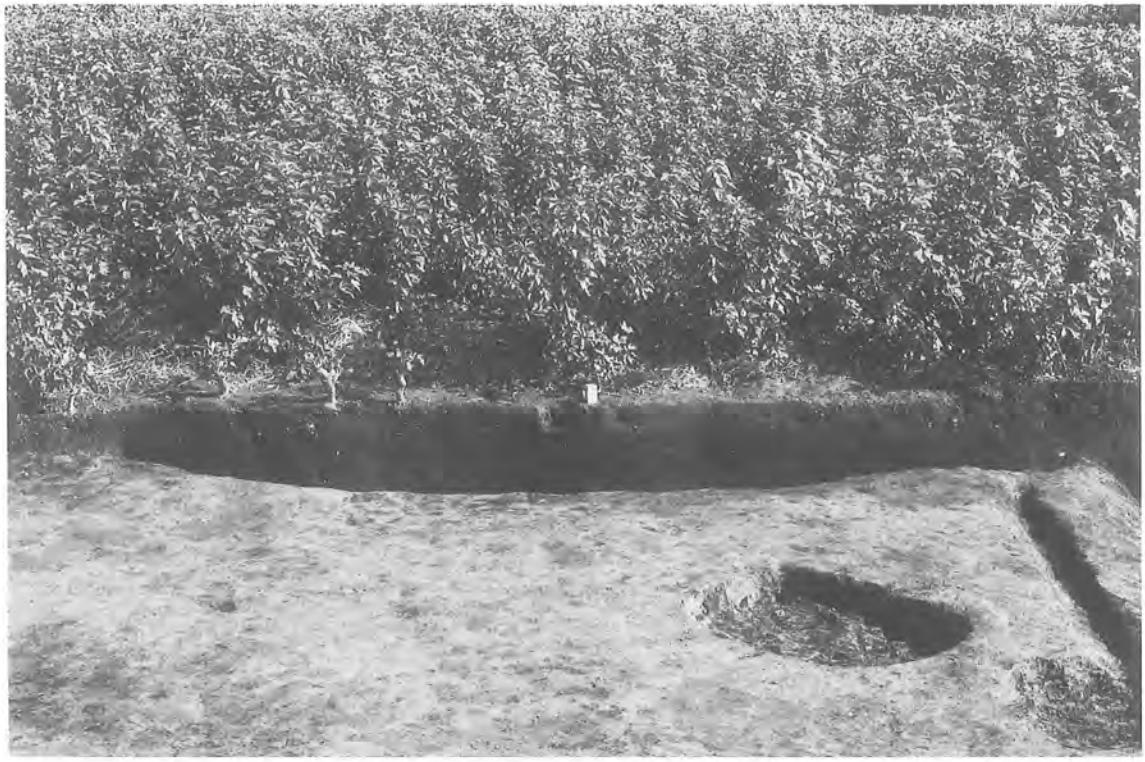
第10号墳東側周溝

第10号墳外周溝遺物出土状況（1）

第10号墳外周溝遺物出土状況（2）

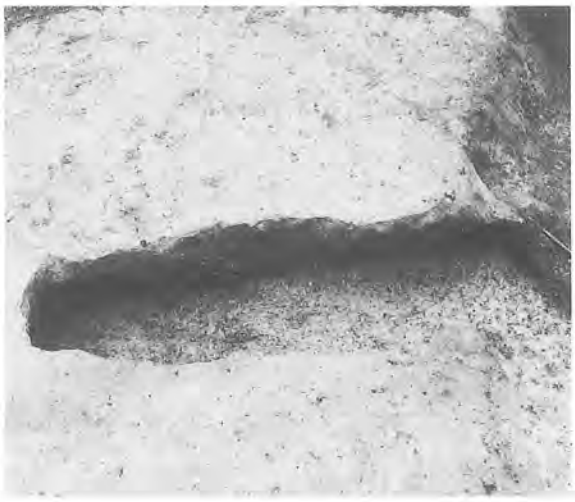
第11号墳

図版15



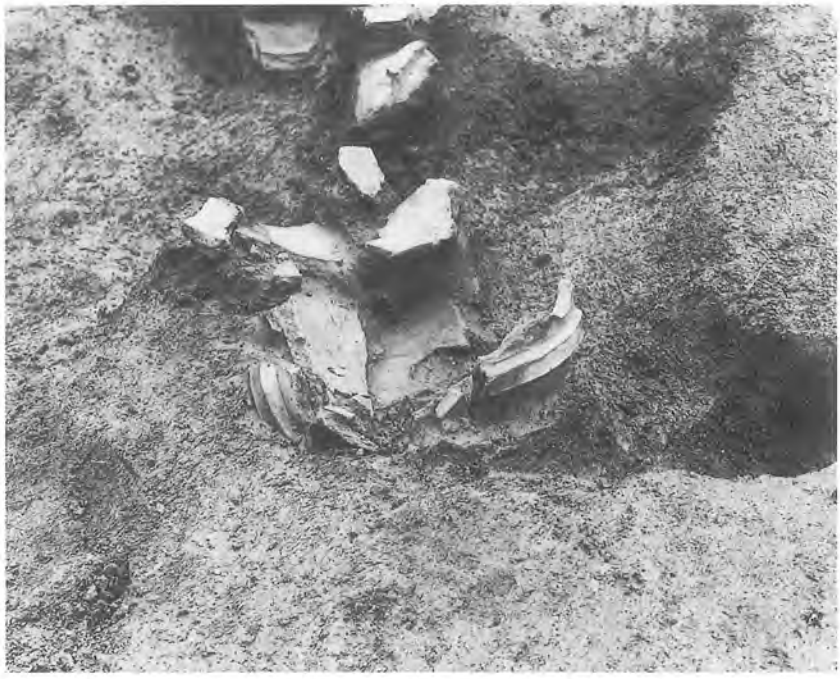
第12号墳

第１号溝跡



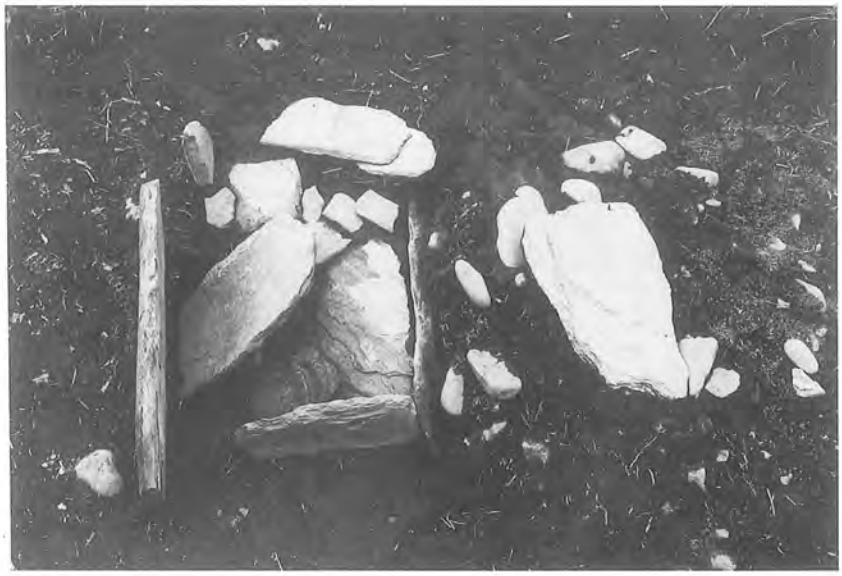
第１号土坑

第９号土坑遺物出土状況（1）



第９号土坑遺物出土状況（2）

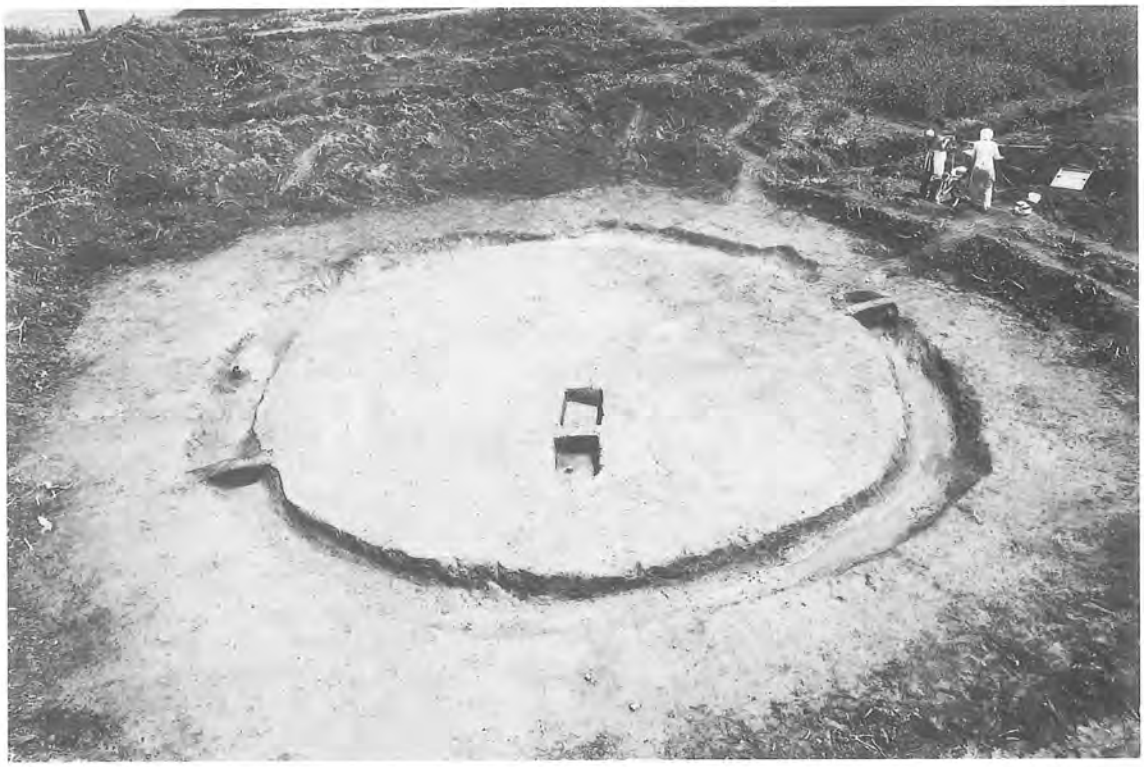
図版17



第１号墓壙（東から）

第１号墓壙（西から）

第１号墓壙本体（東から）



第13号墳

第13号墳遺物出土状況

図版19

第１号竪穴住居跡１

第１号竪穴住居跡３

第１号竪穴住居跡４

第１号竪穴住居跡５

第１号竪穴住居跡７

第１号竪穴住居跡11

第１号竪穴住居跡12

第１号竪穴住居跡13

第１号竪穴住居跡18

第１号竪穴住居跡19

第１号竪穴住居跡20

第１号竪穴住居跡22

第１号竪穴住居跡23

第１号竪穴住居跡24

第１号竪穴住居跡25

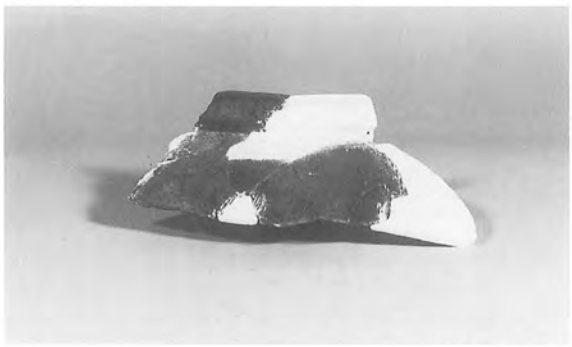
第１号竪穴住居跡26

図版21

第２号竪穴住居跡１

第２号竪穴住居跡２

第３号竪穴住居跡２



第３号竪穴住居跡４

第３号竪穴住居跡９

第５号竪穴住居跡１

第５号竪穴住居跡２

第５号竪穴住居跡３

第５号竪穴住居跡４

第５号竪穴住居跡５

第５号竪穴住居跡６

第５号竪穴住居跡７

第５号竪穴住居跡８

第５号竪穴住居跡９

第６号竪穴住居跡１

第６号竪穴住居跡２

図版23

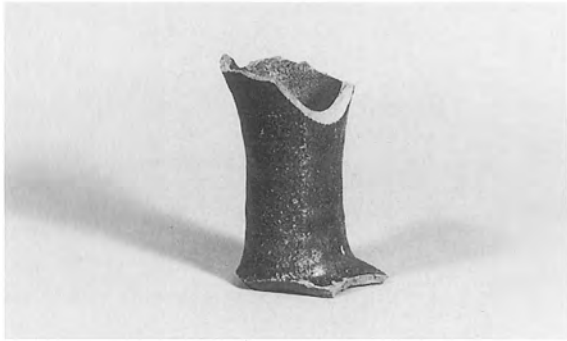
第１号墳１

第２号墳１

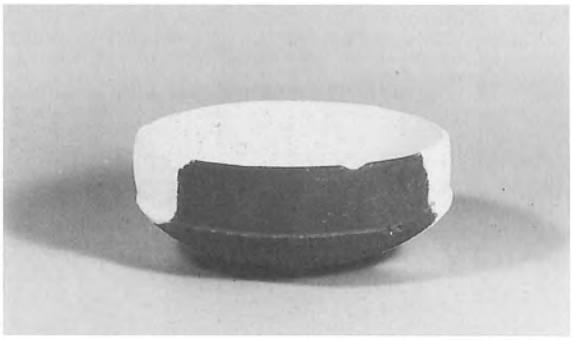
第２号墳２

第３号墳１

第４号墳１



第７号墳１



第９号墳外周溝１

第９号墳外周溝２

第９号墳外周溝６

第10号墳外周溝１

第９号墳外周溝24

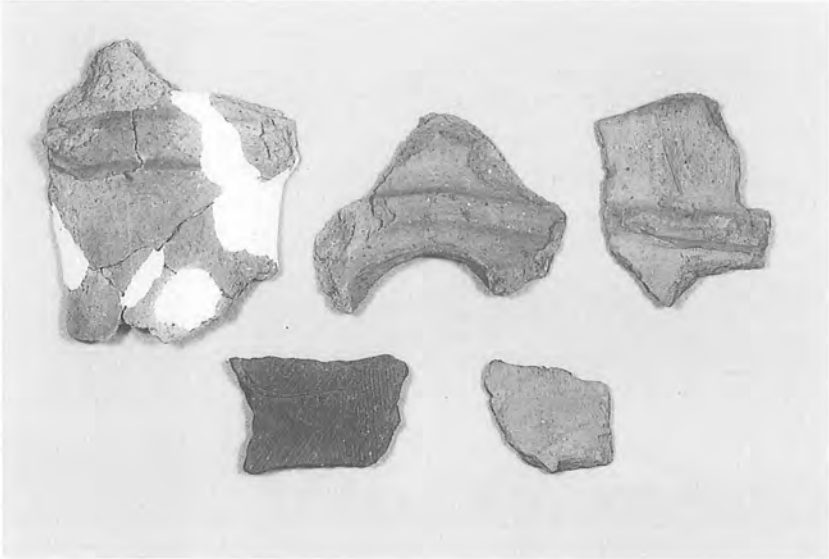
第10号墳外周溝２

第10号墳外周溝３

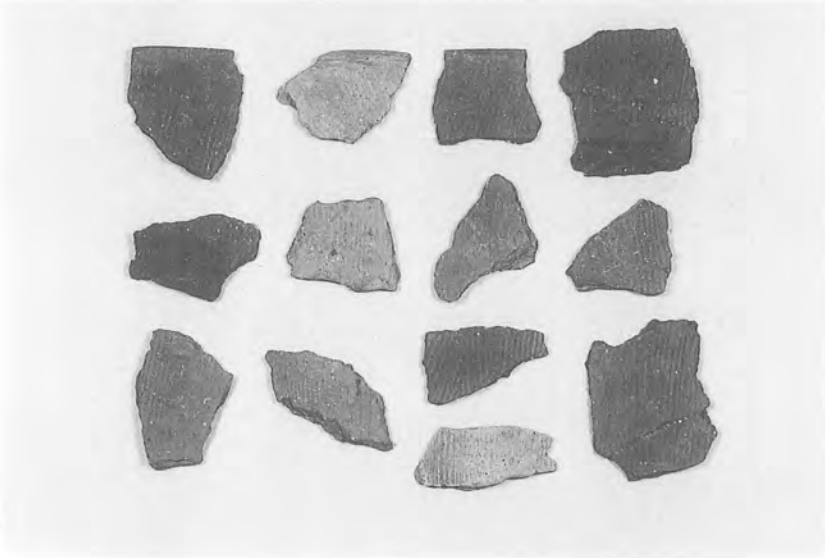
第10号墳外周溝４

第13号墳１

図版25



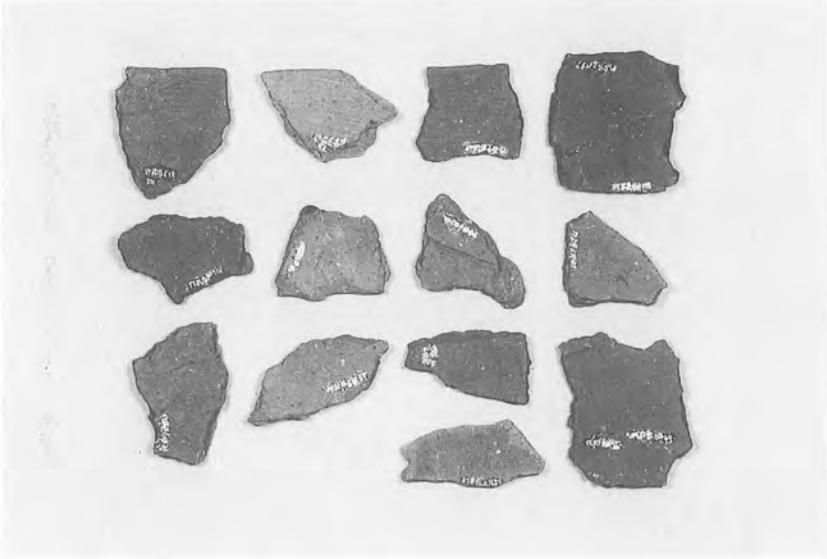
第１号竪穴住居跡29～33　表



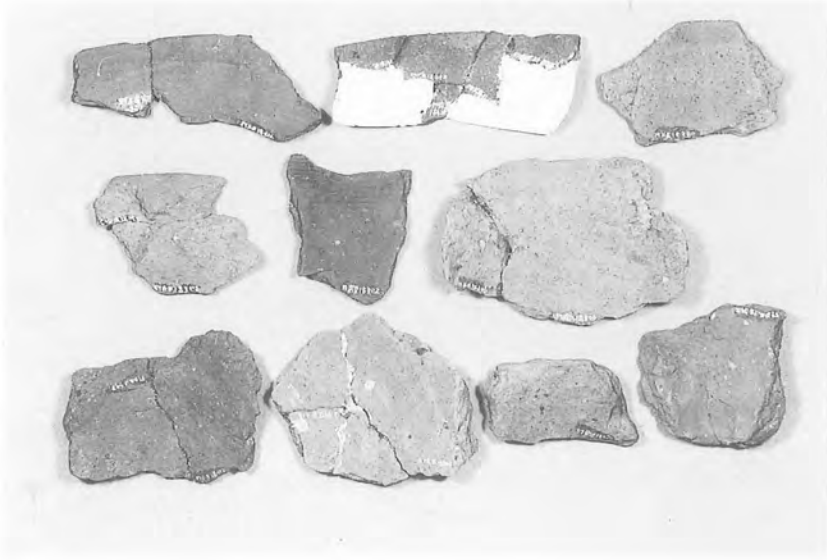
第５号竪穴住居跡10～22　表

第１号墳３～12　表

第１号竪穴住居跡29～33　裏

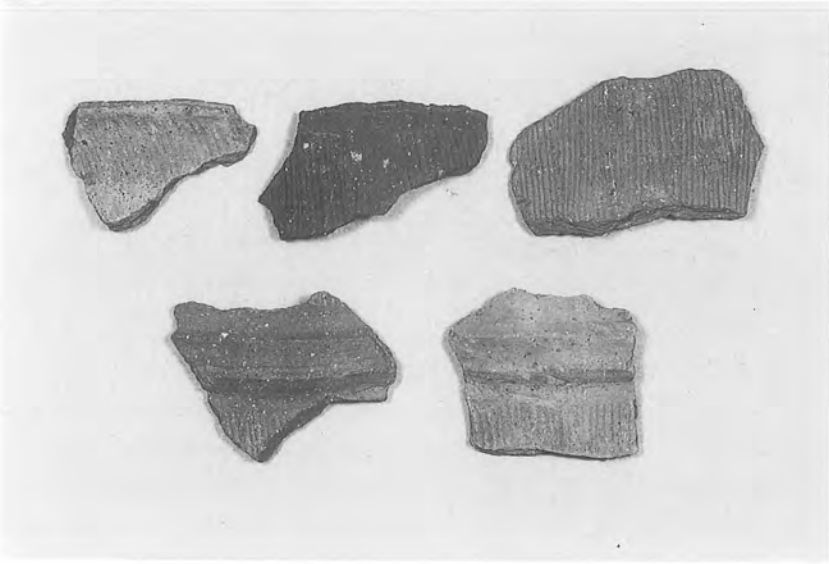


第５号竪穴住居跡10～22　裏

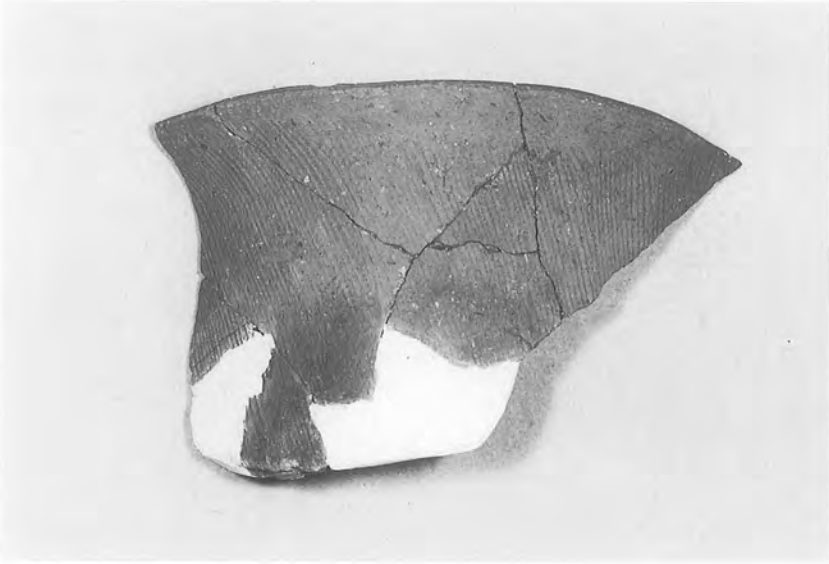


第１号墳３～12　裏

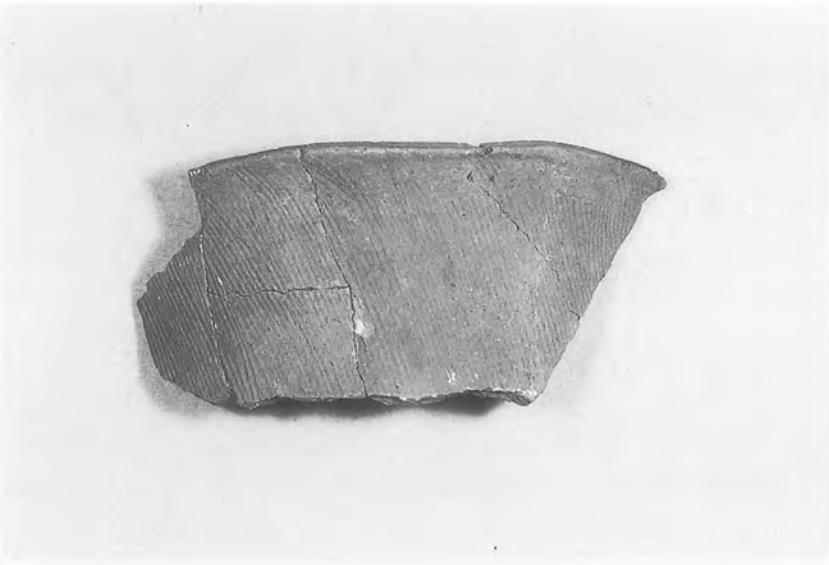
図版27



第８号墳１～５　表

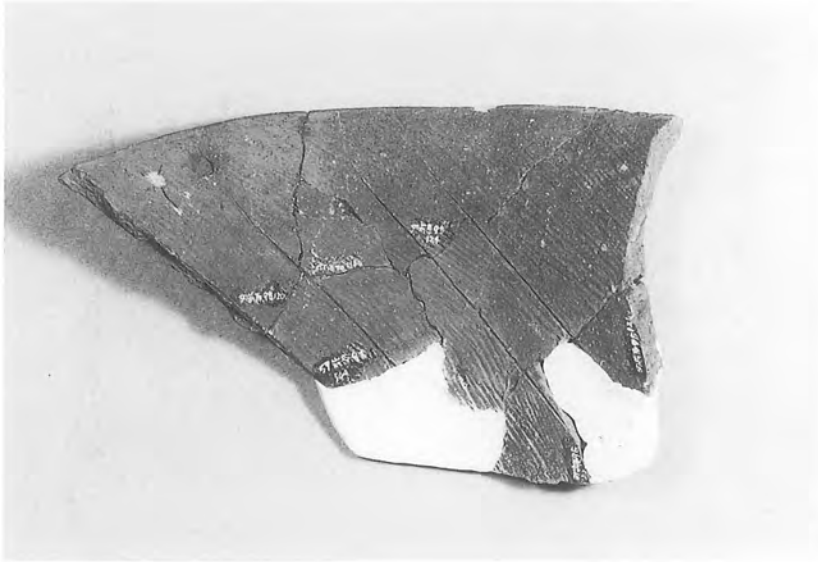


第９号墳外周溝９　表



第９号墳外周溝10　表

第８号墳１～５　裏



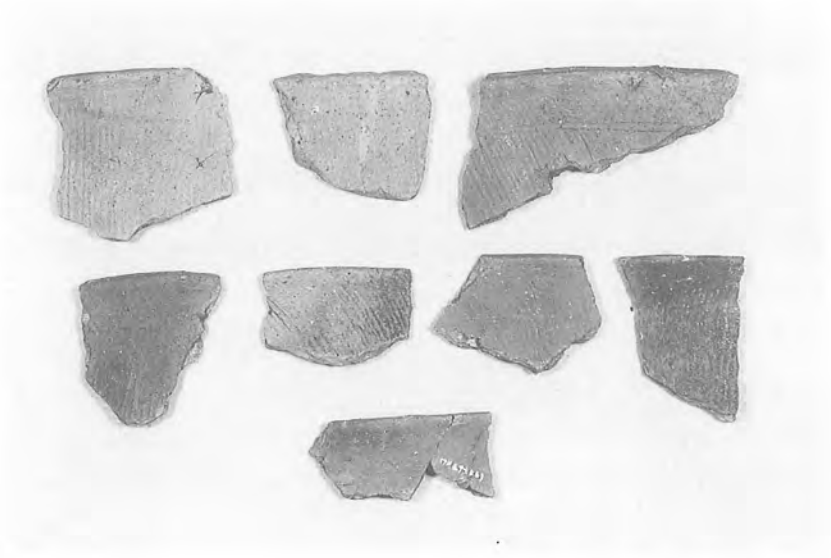
第９号墳外周溝９　裏

第９号墳外周溝10　裏

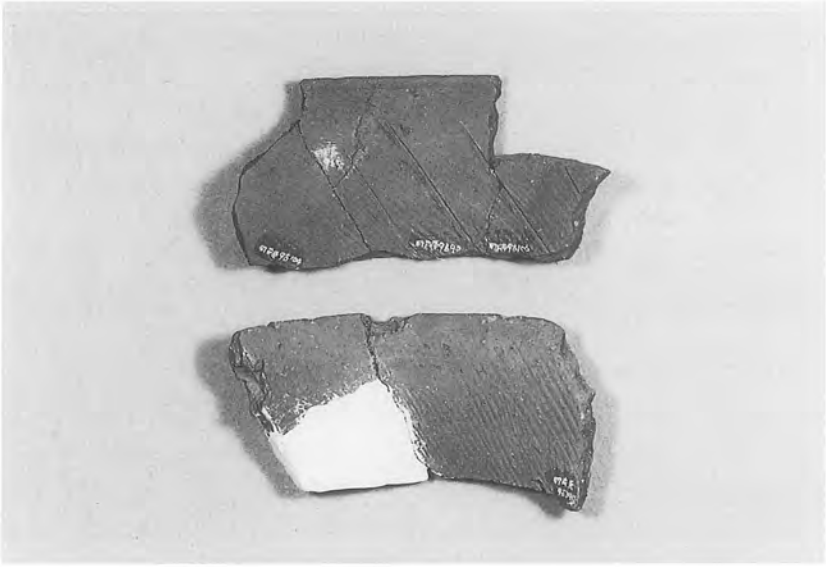
図版29

第９号墳外周溝11・12　表

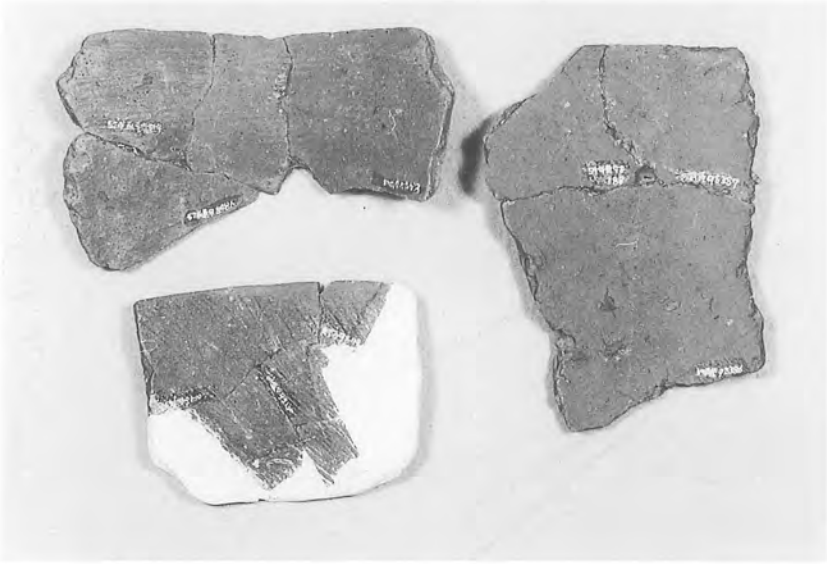
第９号墳外周溝13～15　表



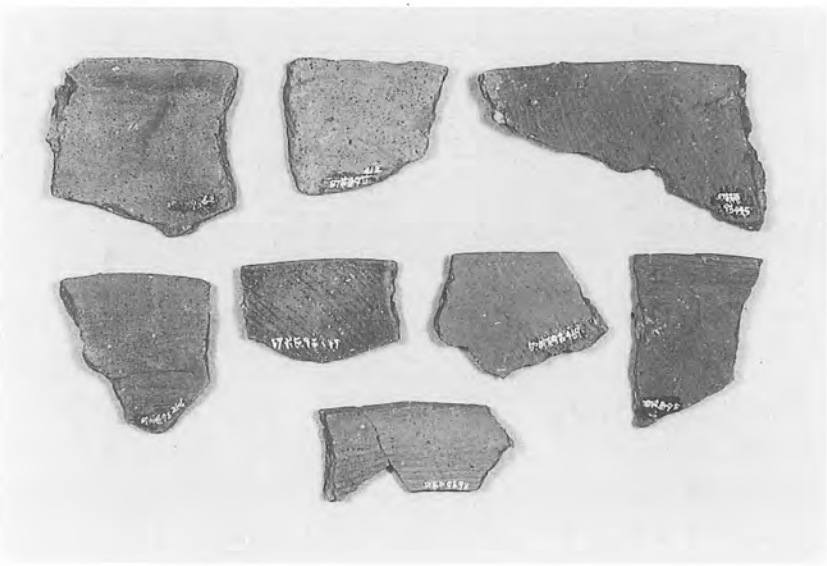
第９号墳外周溝16～23　表



第９号墳外周溝11・12　裏

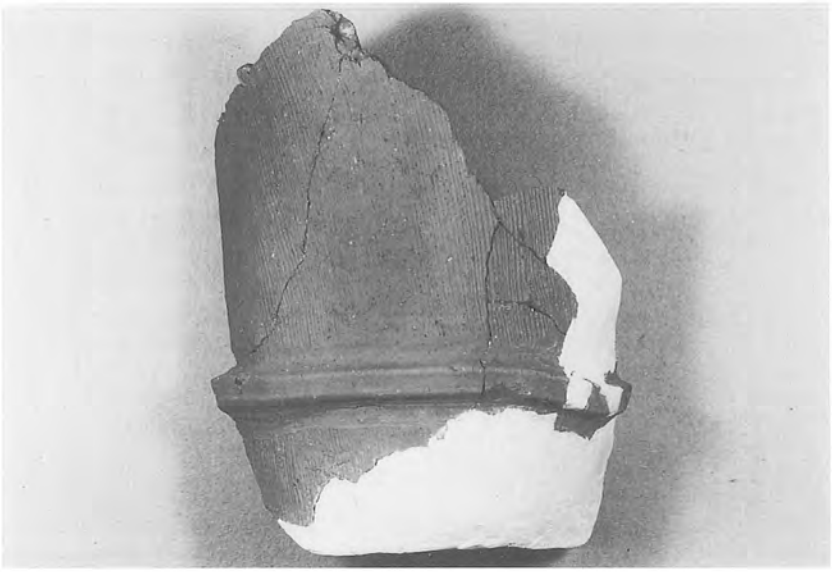


第９号墳外周溝13～15　裏

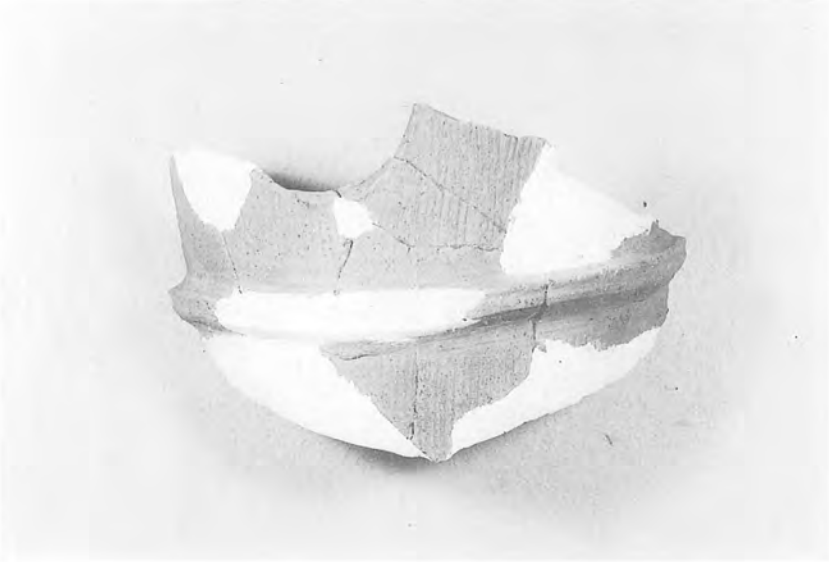


第９号墳外周溝16～23　裏

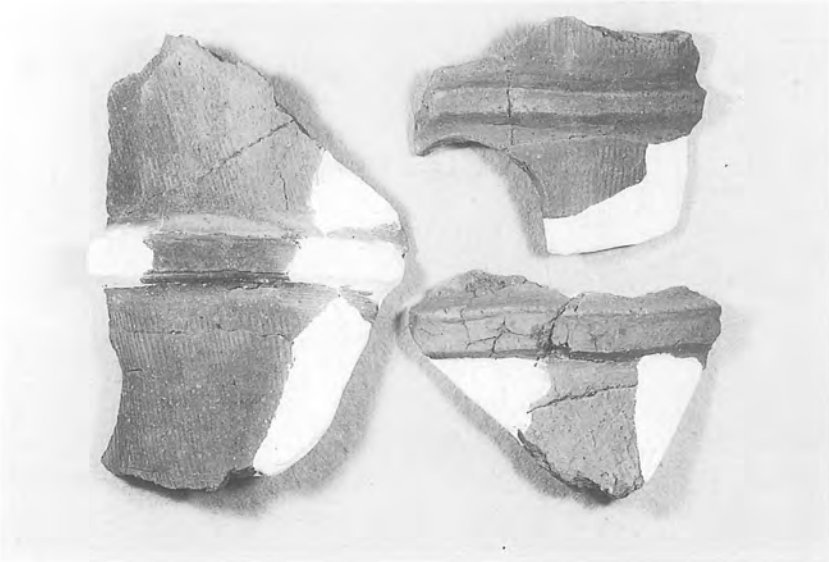
図版31



第９号墳25　表

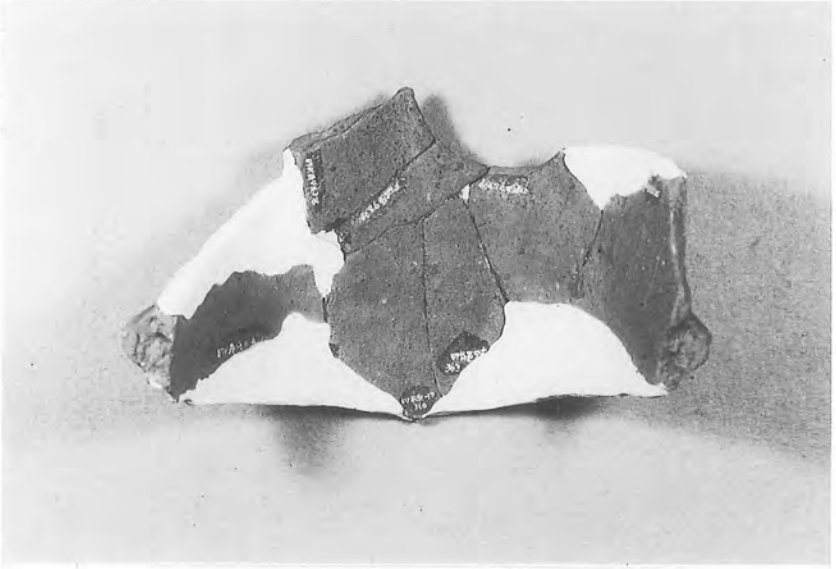


第９号墳26　表

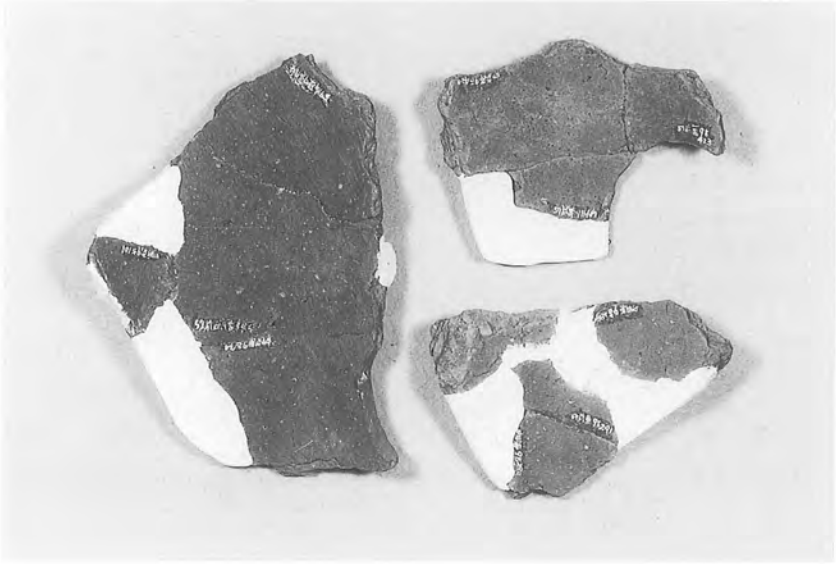


第９号墳・27～29　表

第９号墳25　裏



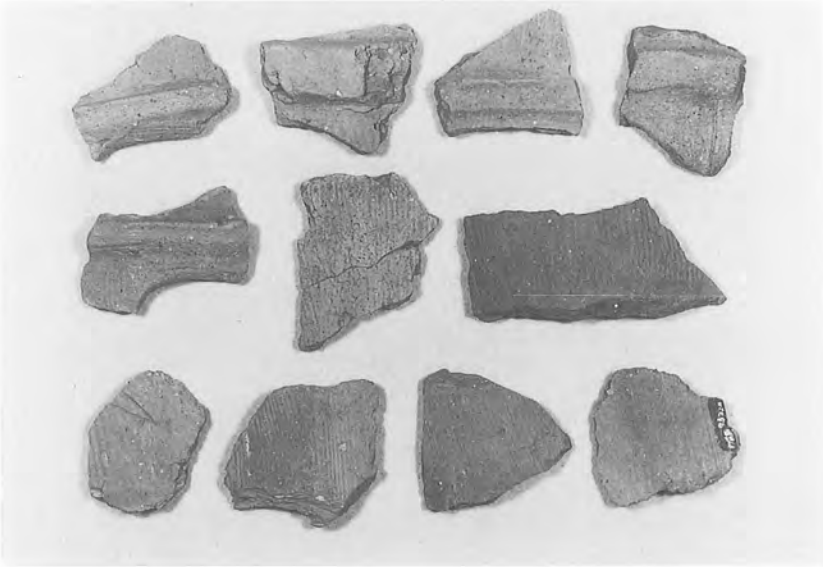
第９号墳26　裏



第９号墳27～29　裏

図版33

第９号墳外周溝30～34　表



第９号墳外周溝35～45　表

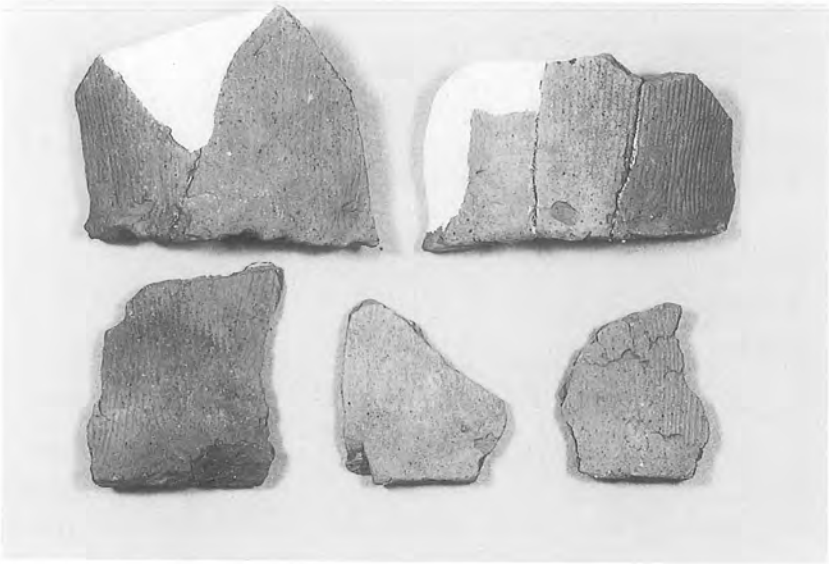
第９号墳外周溝46～52　表

第９号墳外周溝30～34　裏

第９号墳外周溝35～45　裏

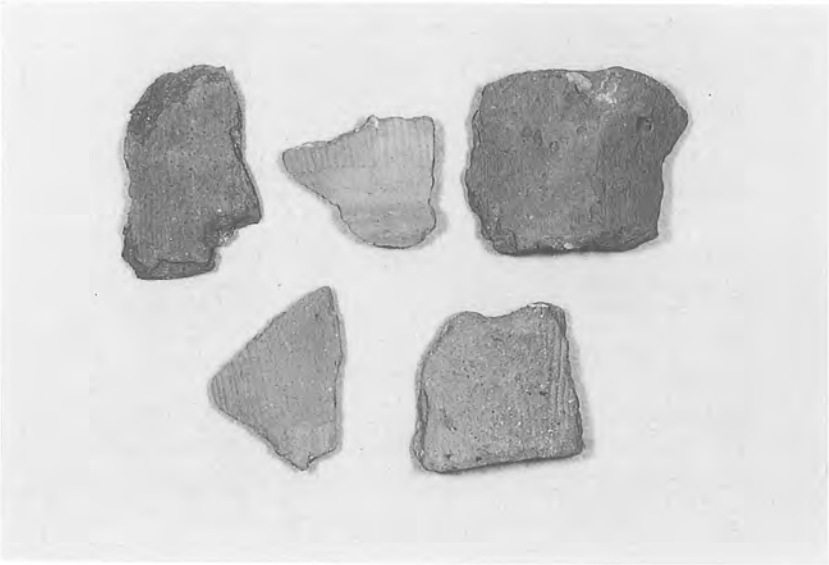
第９号墳外周溝46～52　裏

図版35



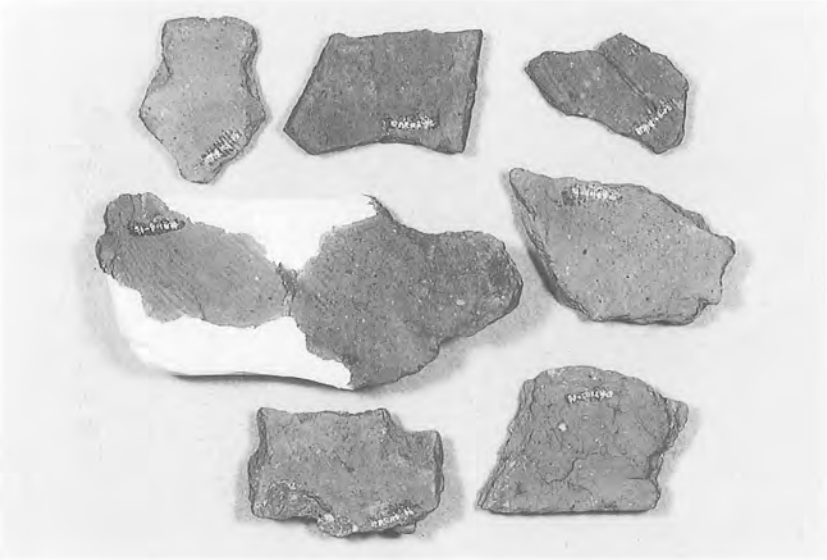
第９号墳外周溝53～57　表

第９号墳内周溝２～８　表



第10号墳外周溝16～18　表
内周溝４～５　表

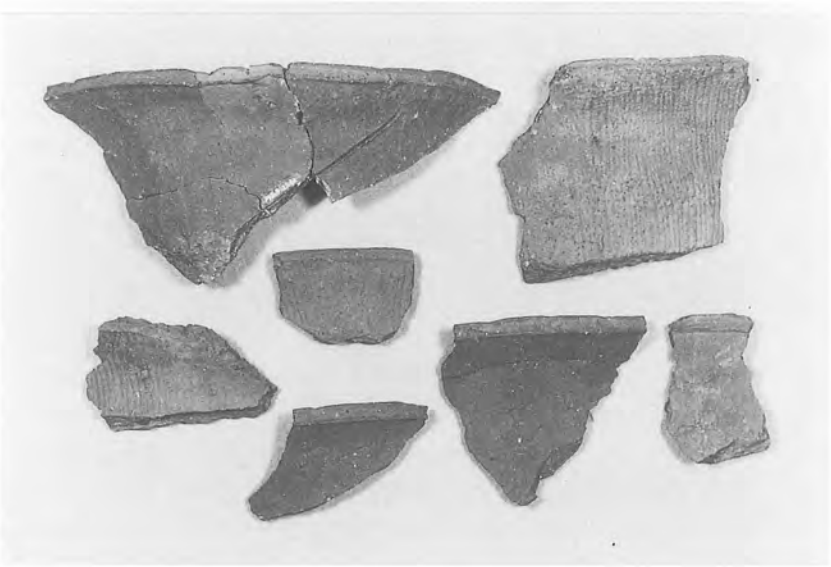
第９号墳外周溝53～57　裏



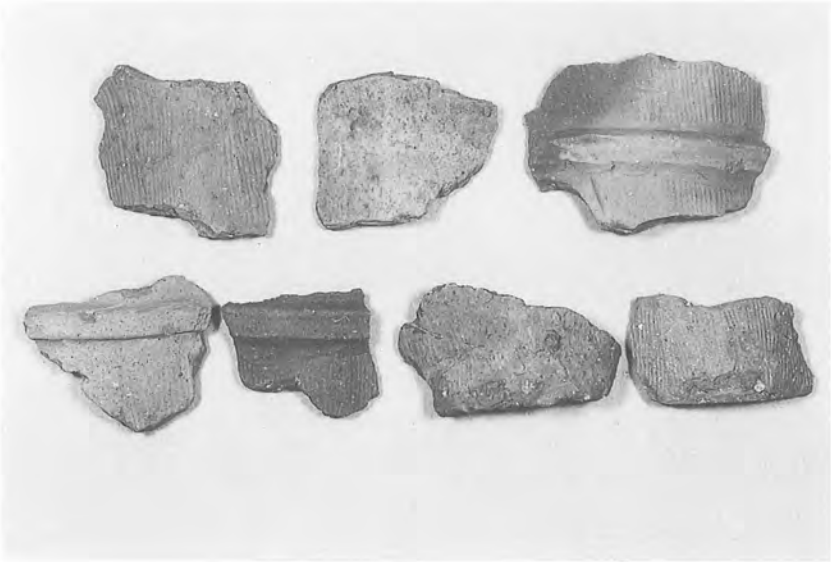
第９号墳内周溝２～８　裏

第10号墳外周溝16～18　裏
内周溝４～５　裏

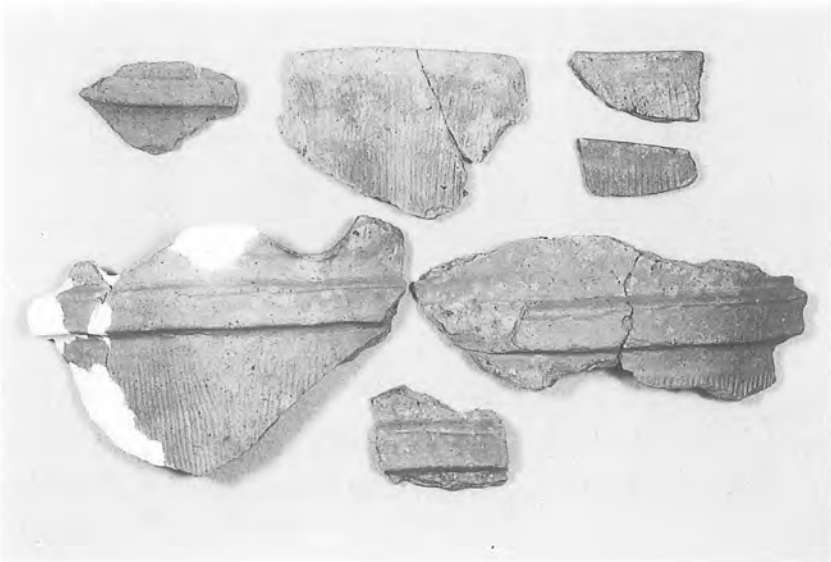
図版37



第11号墳３～９　表

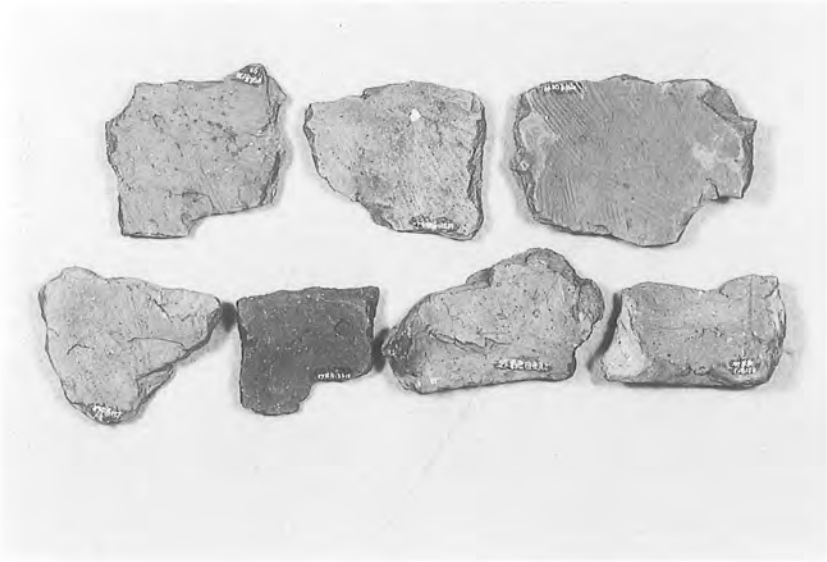


第11号墳10～17　表



第１号土坑１　表
第９号土坑３～８　表

第11号墳３～９　裏

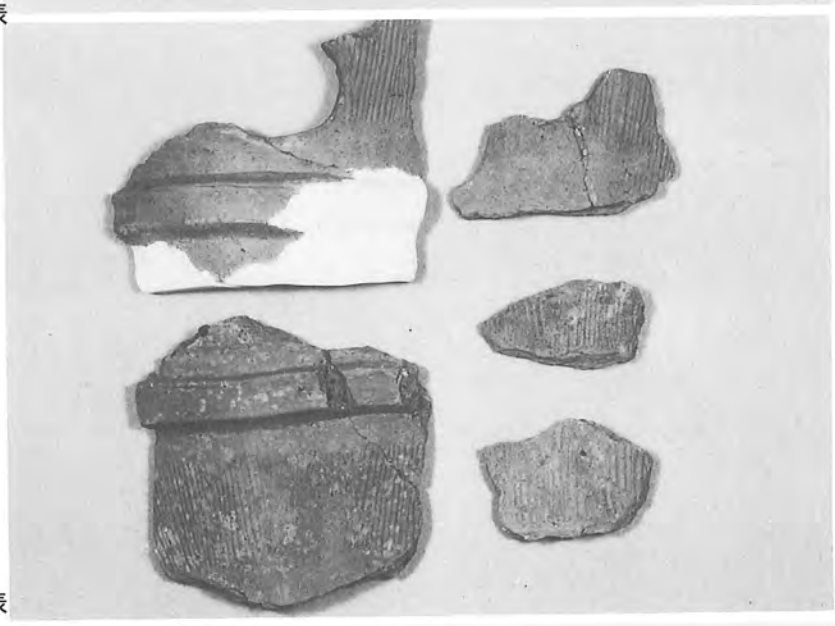


第11号墳10～17　裏

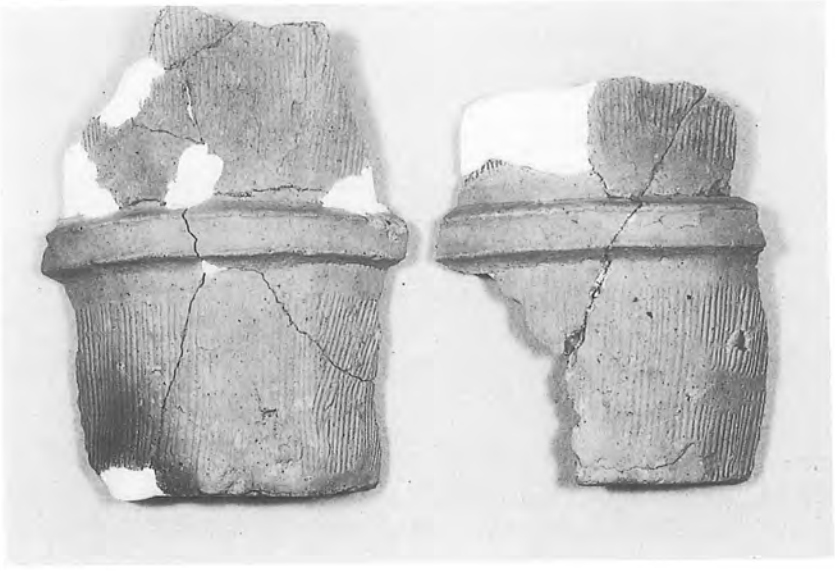
第１号土坑１　裏
第９号土坑３～８　裏

図版39

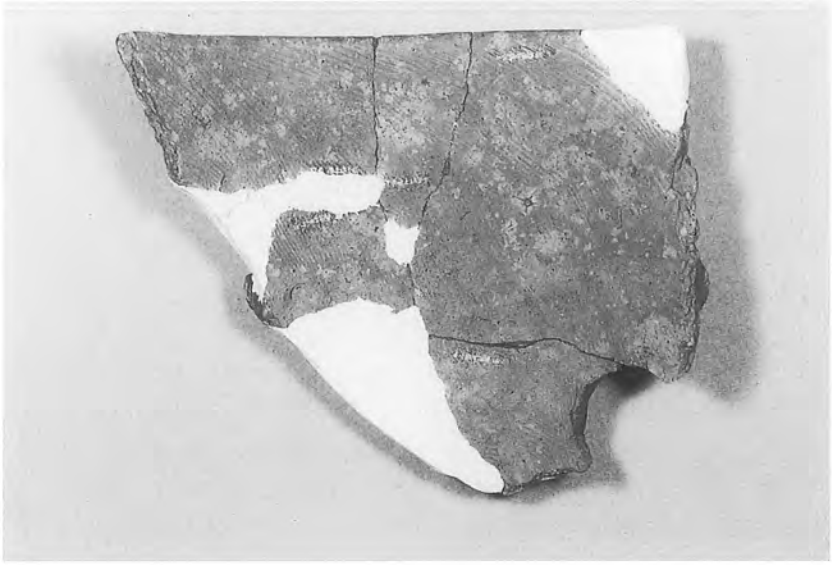
第９号土坑２　表



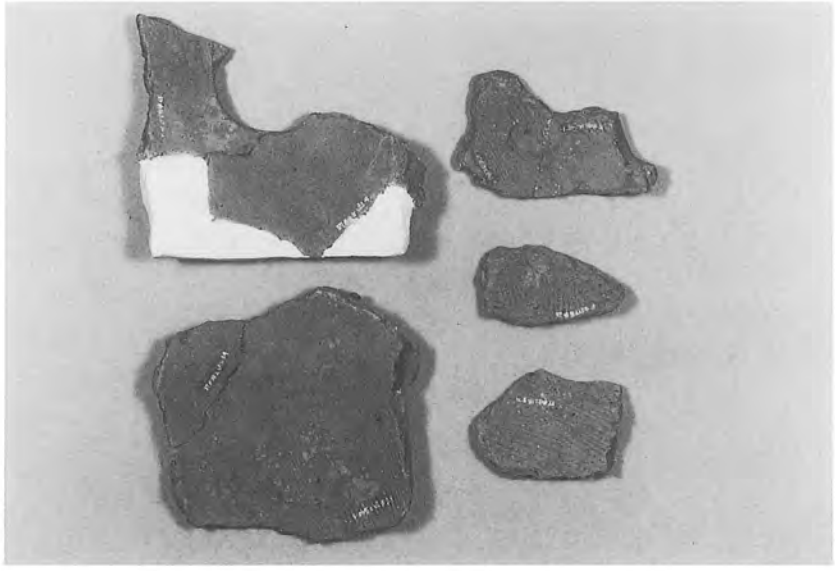
第９号土坑９～13　表



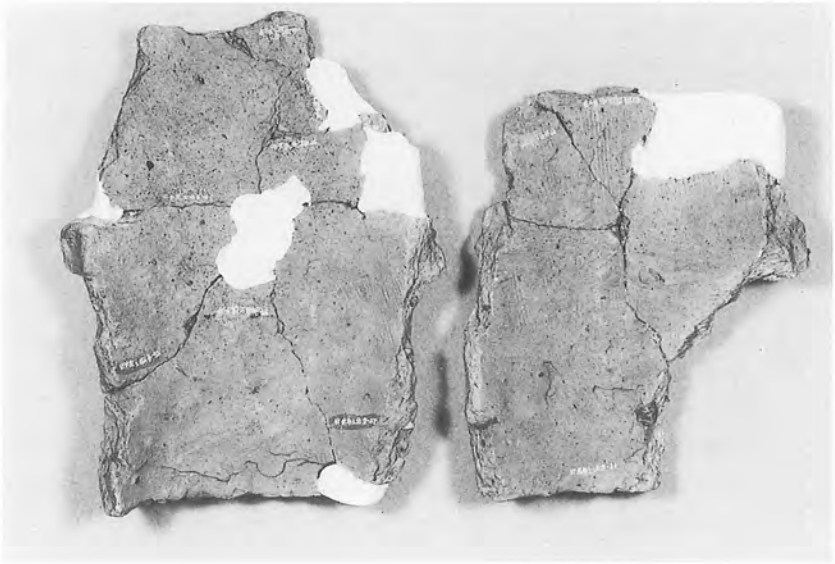
第９号土坑14・15　表



第９号土坑２　表

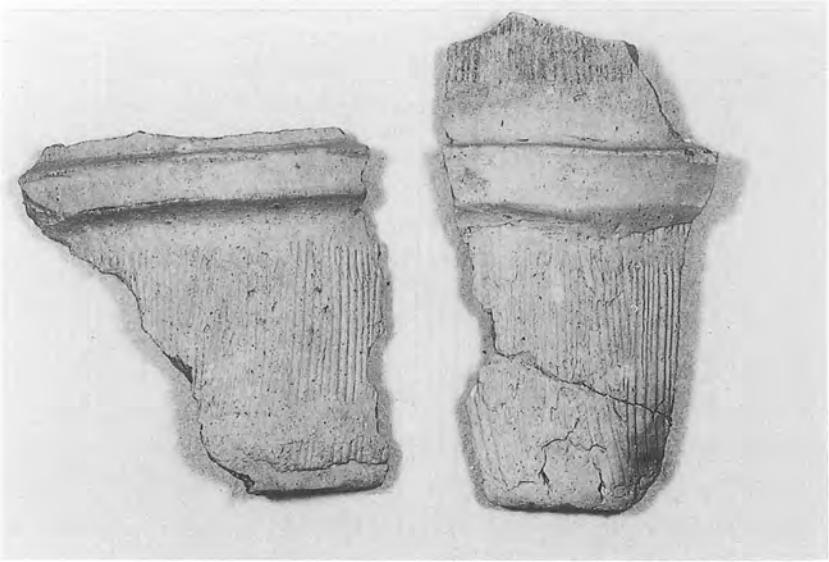


第９号土坑９～13　表

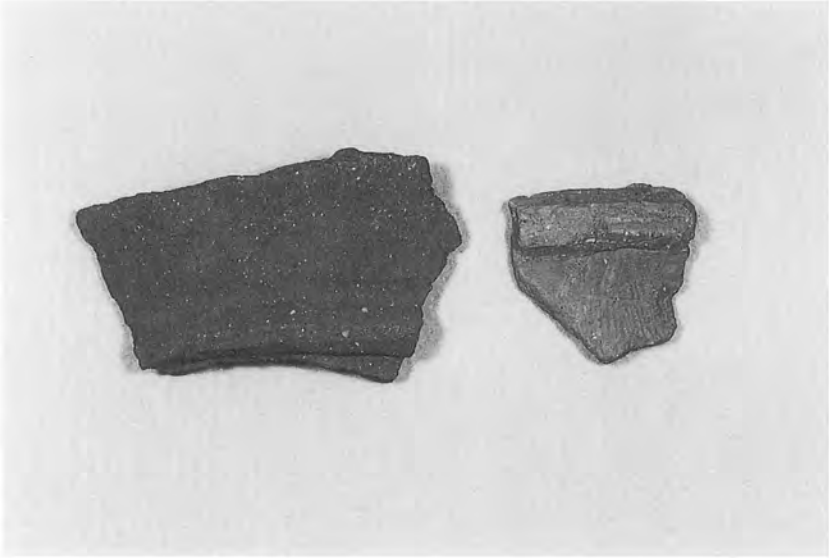


第９号土坑14・15　表

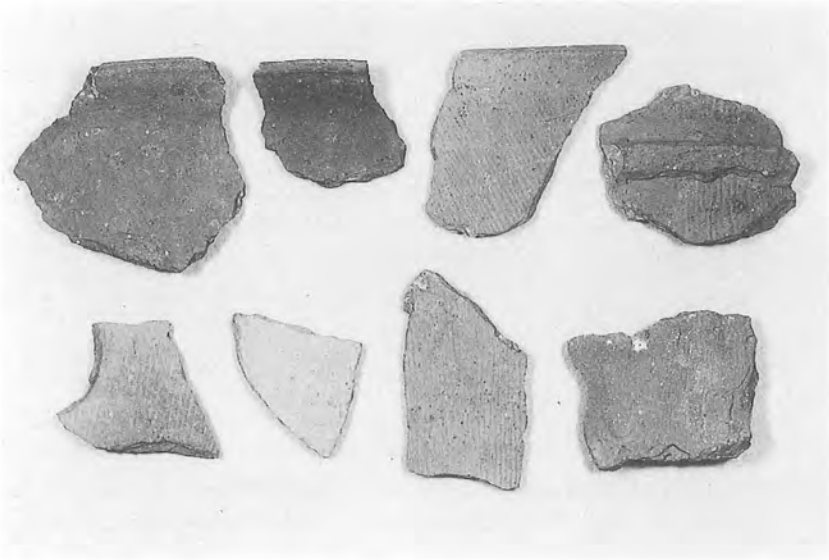
図版41



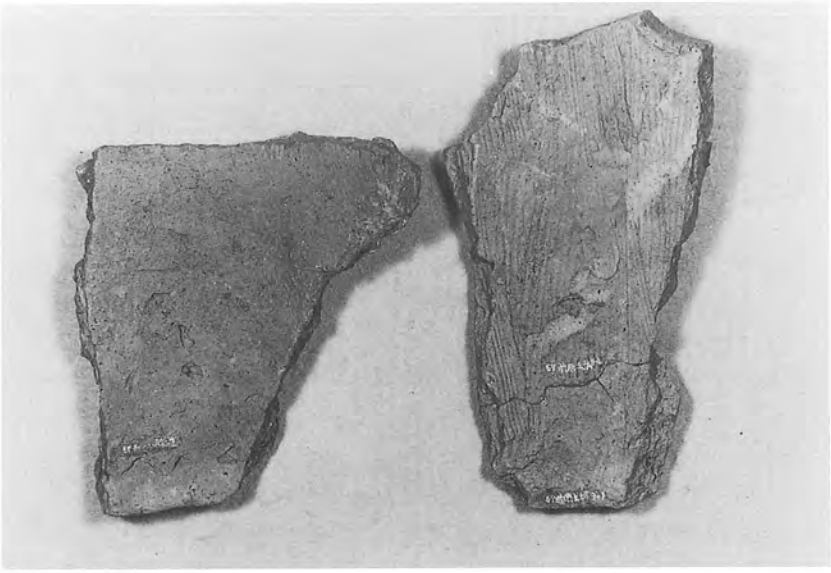
第９号土坑16・17　表



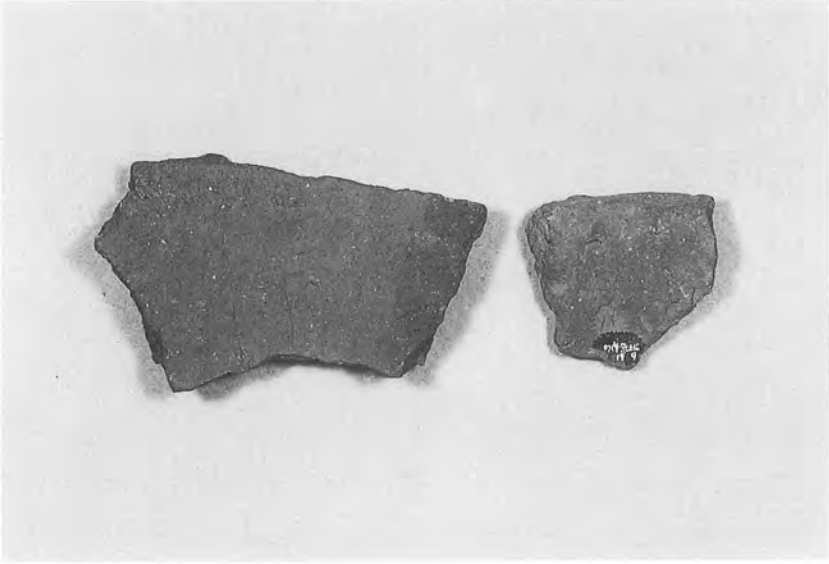
第22号土坑18　表
第28号土坑19　表



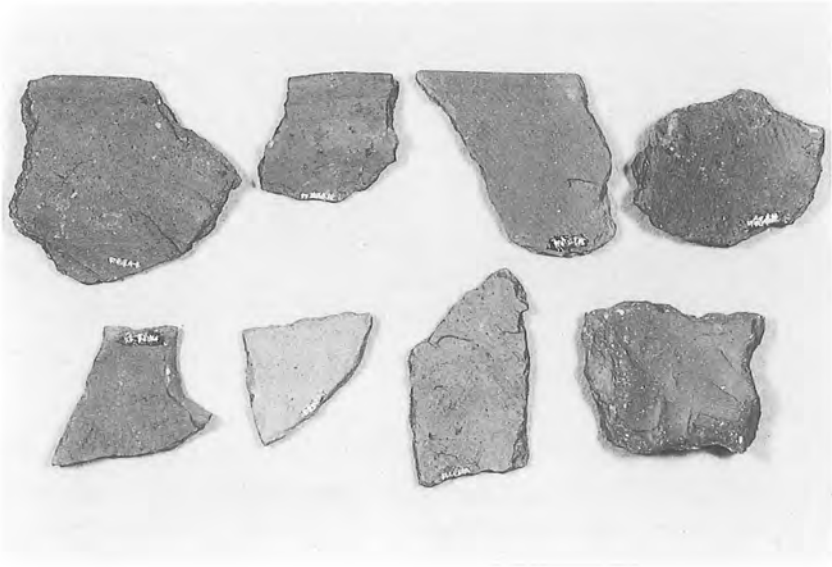
遺構外出土遺物３～10　表



第９号土坑16・17　裏

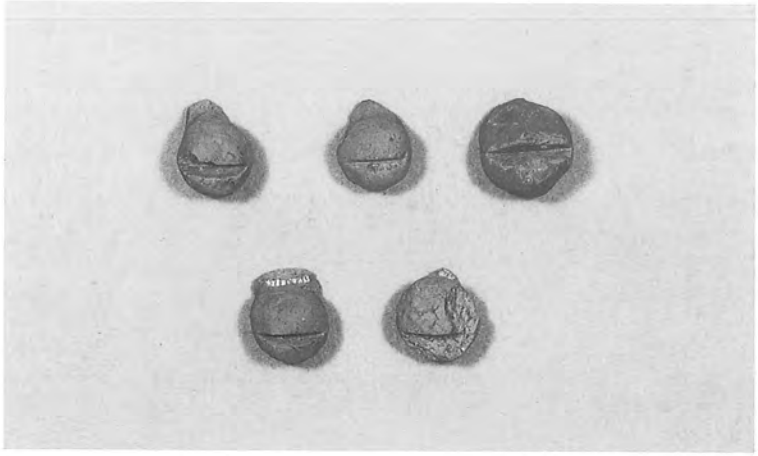


第22号土坑18　裏
第28号土坑19　裏

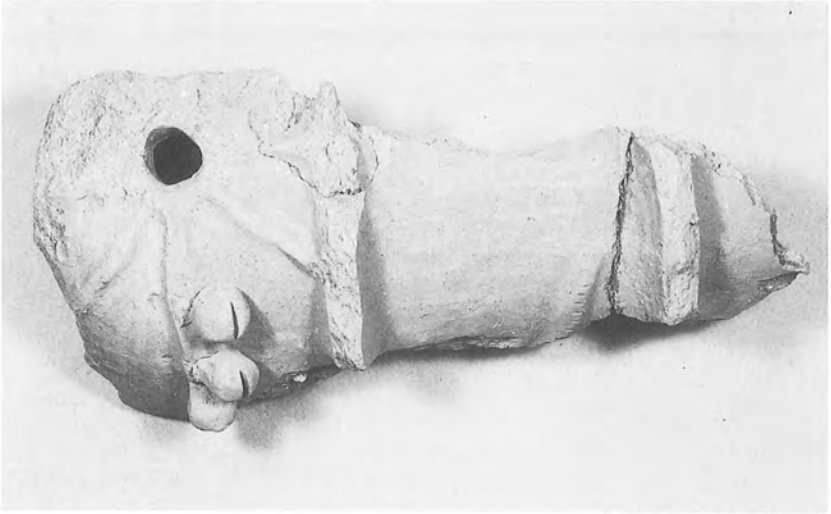


遺構外出土遺物３～10　裏

図版43



第１号墳13～17

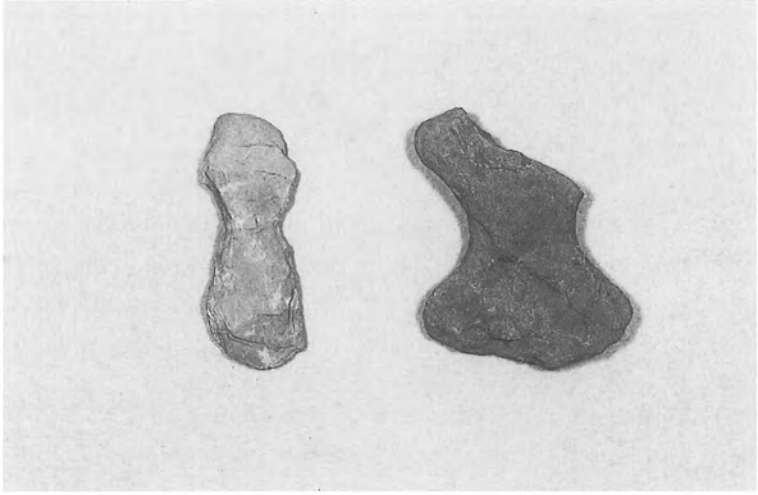


第１号墳18（上から）

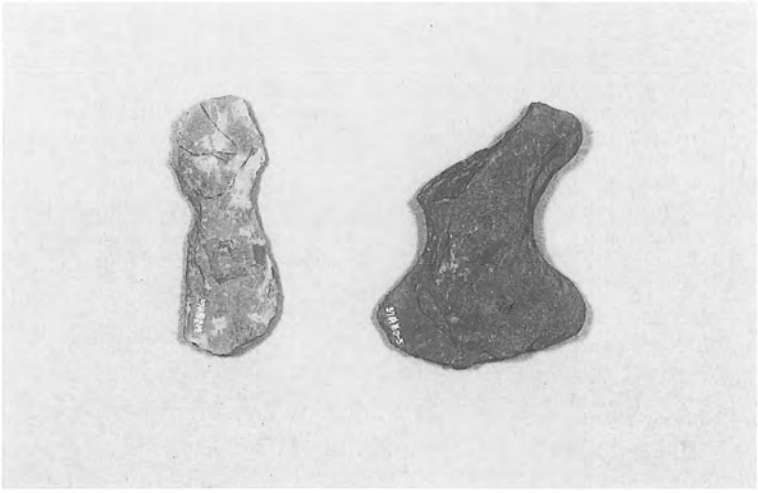
第１号墳18（横から）

遺構外出土遺物11

遺構外出土遺物12



遺構外出土遺物13・14　表



遺構外出土遺物13・14　裏

報告書抄録

ふりがな	せとやまいせき・せとやまこふんぐん
書名	瀬戸山遺跡・瀬戸山古墳群
副書名	平成12年度埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	松田 哲
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1熊谷市教育委員会社会教育課 TEL 048-524-1111
発行年月日	西暦2001(平成13)年3月30日

所収遺跡名(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯(°′″)	東経(°′″)	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
瀬戸山遺跡(せとやまいせき) 瀬戸山古墳群(せとやまこふんぐん)	熊谷市大字平塚新田500番地他(くまがやしおおあざひらつかしんでん)	11202	30	36°6′47″	139°22′30″	19820602～19820630	2,000	中学校校庭拡張工事
	熊谷市大字平塚新田字前原537番地他(くまがやしおおあざひらつかしんでん)	11202	30・31	36°6′56″	139°22′30″	19820712～19821012	3,000	市立配水場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀬戸山遺跡	集落跡	縄文時代	遺物包含層	打製石器	
		古墳時代前期	竪穴住居跡 8軒	土師器	前期末の集落跡が検出された。
		古墳時代以降	土坑 31基	埴輪	
			溝跡 9条	—	
			ピット	—	
		江戸時代	墓坑 1基	—	
瀬戸山古墳群		古墳時代後期	古墳 13基	土師器・埴輪	二重周溝の古墳が2基検出された。

平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
瀬戸山遺跡・瀬戸山古墳群
平成13年３月30日発行
発　行／埼玉県熊谷市教育委員会
印　刷／株式会社　博　文　社